

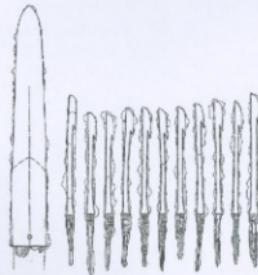
静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第149集

寺山古墳群

第二東名 No.128 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

豊岡村 - 1



2004

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

日本道路公団 静岡建設局

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第149集

寺山古墳群

第二東名 No.128 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

豊岡村-1

2004

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

日本道路公団 静岡建設局



▲ 寺山古墳群
豊岡村を南東から望む

巻頭図版 2

寺山古墳群 ▼



1 北から望む周辺の地形

▲ 寺山古墳群



2 南から望む周辺の地形



1 寺山 14号墳 小竪穴式石室



11号墳

12号墳

2 寺山 11~13号墳

13号墳

卷頭圖版 4



寺山古墳群出土主要遺物

序

第二東名高速道路は、静岡県を長く東西に通る。この建設に伴って、豊岡村においてもいくつかの遺跡を発掘調査し、これを記録に残すことが必要となった。実際、その調査には多くの年月を費やすこととなっている。

豊岡村における発掘調査はすでに完了し、これらの資料の整理や調査成果のまとめ、そして報告書の刊行を目指す方向へと転換している。本報告書は、その1冊目である。また、静岡県内における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書としても1冊目の刊行となる。

豊岡村内には、特に古墳群が広く分布していることがわかっている。その他にも、弥生時代の集落・銅鐸出土地・古代の廃寺・中世の城跡も存在していることがわかっている。今回、新たな遺跡の発見こそなかったが、いくつかの古墳群、さらに銅鐸出土地の調査を実施することができ、各遺跡の詳細を知ること、また新たな知見を得ることができたと考える。

古墳時代中・後期の小規模円墳群である寺山古墳群の調査では、14号墳で木棺直葬の埋葬施設と、類例の少ない小竪穴式石室の埋葬施設が平行して発見された。また木棺直葬の埋葬施設からは、片刃箭鏃群・鉄劍などとともに構造上特徴的な鉄鋸も発見された。これらは、日本列島に広がる古墳文化の中にあって、本地域・本古墳群の特質を示すことのできる貴重な成果である。

このような成果を収録した本報告書が、失われる遺跡の記録に十分な役割を果たすことを希望する。そして、20世紀末から行ってきた第二東名建設に伴う貴重な文化遺産の調査成果を、21世紀以降に生きる人々にどのように伝えるのかを見極めて、調査で得られた資料がより多くの役割を果たすようになる一つの機会となることを切望している。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたって、日本道路公団静岡建設局、豊岡村教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位に、多大なご理解とご協力をいただいた。さらに、多くの方からはご指導・ご助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。また、現地作業、資料整理に関わった調査員・作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表する次第である。

平成16年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　言

1. 本書は、豊岡村域（以下、豊岡地区）における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の総論と、静岡県磐田郡豊岡村敷地字枳ヶ谷他および周智郡森町一宮字奥ノ谷他に所在する寺山古墳群（第二東名No.128地点）の発掘調査報告書である。
2. 第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位にて実施している。豊岡地区では本書が1冊目であり、よって「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 豊岡村-1」とした。
3. 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、日本道路公团静岡建設局の委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、豊岡村教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
4. 寺山古墳群の確認調査・本調査および資料整理の期間は以下のとおりである。

　　総　論　　豊岡地区全ての現地調査の期間は第1章に別記した。

　　資料整理および報告作成：平成14年4月～6月　平成15年1月～4月

　　寺山古墳群　現地調査　確認調査：平成10年6月～7月

　　本　調　査：平成11年1月～4月

　　資料整理および本書作成：平成13年8月～9月　平成14年4月～5月

　　平成15年11月～平成16年3月

5. 調査体制は第1章に豊岡地区の調査体制として別記した。なお、本書に関わる各調査担当者は下記のとおりである。

　　総　論　　資料整理および報告作成：田村隆太郎

　　寺山古墳群　現地調査　確認調査：西田光男、木崎道昭

　　本　調　査：西田光男、長尾一男、佐原哲之、大谷宏治、丸杉俊一郎

　　資料整理および報告作成：大谷宏治

6. 執筆は及川司、大谷宏治、田村隆太郎、西尾太加二が行った。なお、執筆分担は下記のとおりである。

　　及川　司　：第1章 第1節～1　田村隆太郎：第1章 第1節～2～第5節

　　大谷　宏治：第2章 第4節以外　西尾太加二：第2章 第4節

7. 各調査における助言・協力者等については、各章文末に別記した。

8. 各調査で実施した委託事項および委託先は、各章文中に記した。

9. 現地の写真撮影は各調査担当者が実施した。航空写真的撮影は委託したものである。遺物の写真撮影は当研究所写真室にて大谷宏治が実施した。

10. 金属製遺物のクリーニング・保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。

11. 寺山古墳群出土鉄鋤の木製柄の樹種同定は、西尾太加二が実施した。

12. 各調査の概要は、当研究所や他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

13. 編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があつた。

14. 発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

凡 例

本書の記述については、以下の基準に従っている。

1. 座標は、平面直角座標系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。
2. グリッド（方眼）は、1の座標を用いて設定している。グリッドの1辺は10mとし、アルファベット（A～）と算用数字（1～）を用いてその位置を表示している。東西方向が西から1・2…、南北方向が南からA・B…と設定している。
3. 方位は、1の座標による方位（座標北）を基準として表示している。
4. 寺山古墳群の古墳番号は、調査区内に11～18号墳が分布調査時に示されたが、調査の結果、その場所に古墳が存在しないことから、豊岡村教育委員会との協議に基づいて1～10号墳に続けて11～14号墳とした。
5. 遺物番号は、挿図に掲載したものについて、種類・出土遺構・挿図の別に関わらずに遺跡ごとの通し番号を付している。
6. 土層の色調は、農林水産技術会議事務局監修1992新版『標準土色帳』を使用した。
7. 土器の断面と種別の関係は、以下のとおりである。



目 次

卷頭図版／序／例言／凡例

第1章 総 論	1
第1節 調査に至る経過	3
1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯	3
2. 現地調査の体制	5
第2節 豊岡村の位置と環境	6
1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	8
第3節 確認調査	13
1. 確認調査の対象地点	13
2. 確認調査の方法と経過	15
3. 各地点の概要	17
第4節 本調査	21
1. 本調査の方法と経過	21
2. 本調査の概要	22
第5節 資料整理	24
1. 資料整理の体制	24
2. 資料整理の方法と経過	25
第2章 寺山古墳群 第二東名No.128 地点	27
第1節 位置と環境	29
1. 位置と地理的環境	29
2. 歴史的環境と調査歴	29
第2節 調査の方法と経過	32
1. 発掘調査の方法	32
2. 発掘調査の経過	32
3. 資料整理と報告書作成	35
第3節 調査の成果	36
1. 概要	36
2. 1区（14号墳）の調査成果	37
3. 2区の調査成果	53
4. 3区（13号墳）の調査成果	55
5. 4区（11・12号墳）の調査成果	66
6. 5区の調査成果	75
第4節 寺山14号墳出土鉢柄の樹種について	80
第5節 結語－寺山古墳群の位置づけ－	82
1. 寺山14号墳第1主体部について	82
2. 寺山14号墳第2主体部出土遺物について	85
3. 寺山古墳群の位置づけ	91

図版目次

卷頭図版

- 1 豊岡村を南東から望む
- 2 1 北から望む周辺の地形
- 2 南から望む周辺の地形
- 3 1 寺山 14 号墳 小窓穴式石室
- 2 寺山 11 ~ 13 号墳
- 4 寺山古墳群出土主要遺物

図版

- 図版 1 豊岡村周辺の航空写真①（南より）
- 図版 2 豊岡村周辺の航空写真②（北より）
- 図版 3 寺山古墳群空中写真（西より）
- 図版 4 1 寺山 14 号墳全景写真（南より）
2 寺山 14 号墳全景写真（北東より）
- 図版 5 1 寺山 14 号墳第 1 主体部検出状況（東より）
2 寺山 14 号墳第 1 主体部天井石除去後の状況（東より）
- 図版 6 1 寺山 14 号墳第 1 主体部天井石除去後の状況（南より）
2 寺山 14 号墳第 1 主体部天井石除去後の状況（北より）
3 寺山 14 号墳第 1 主体部平積み石除去後の状況（東より）
- 図版 7 1 寺山 14 号墳第 2 主体部遺物出土状況（東より）
2 寺山 14 号墳第 2 主体部遺物出土状況（北より）
3 寺山 14 号墳第 2 主体部遺物出土状況（南より）
- 図版 8 1 寺山 14 号墳第 2 主体部鉄剣出土状況（東より）
2 寺山 14 号墳第 2 主体部鉄鎌出土状況（西より）
3 寺山 14 号墳第 2 主体部鉄製石突出土状況（東より）
4 寺山 14 号墳第 2 主体部鉄錐出土状況（西より）
5 寺山 14 号墳第 2 主体部土層堆積状況（南より）
6 寺山 14 号墳第 2 主体部土層堆積状況（北より）
7 寺山 14 号墳周溝西側土層堆積状況（北より）
8 寺山 14 号墳周溝東側土層堆積状況（北より）
- 図版 9 1 寺山 14 号墳埋葬施設完掘状況（東より）
2 寺山 14 号墳完掘状況（東より）
- 図版 10 1 2 区完掘状況①（東より）
2 2 区完掘状況②（西より）
- 図版 11 1 3 ~ 4 区全景（西より）
2 寺山 13 号墳全景写真（北東より）
- 図版 12 1 寺山 13 号墳全景（南より）
2 寺山 13 号墳全景（俯瞰）
- 図版 13 1 寺山 13 号墳周溝北東集石出土状況（南東より）
2 寺山 13 号墳横穴式石室検出状況（南より）
- 図版 14 1 寺山 13 号墳横穴式石室再利用時の状況（東より）
2 寺山 13 号墳横穴式石室再利用時の状況（南より）
3 寺山 13 号墳横穴式石室再利用時集石出土状況（北より）
- 図版 15 1 寺山 13 号墳横穴式石室完掘状況（南より）
2 寺山 13 号墳横穴式石室完掘状況（東より）
- 図版 16 1 寺山 13 号墳横穴式石室完掘状況（南より）
2 寺山 13 号墳横穴式石室玄門（北より）
- 図版 17 1 寺山 13 号墳横穴式石室左側壁（西より）
2 寺山 13 号墳横穴式石室右側壁（東より）
- 図版 18 1 寺山 13 号墳横穴式石室基底石（東より）
2 寺山 13 号墳墓壙（東より）
- 図版 19 1 4 区全景（南西より）
2 4 区全景（南西より）
- 図版 20 1 寺山 11 号墳全景（俯瞰）
2 寺山 11 号墳主体部完掘状況（北東より）
3 寺山 11 号墳周溝南側遺物出土状況（西より）
- 図版 21 1 寺山 12 号墳全景（俯瞰）
2 寺山 12 号墳主体部完掘状況（東より）
3 寺山 12 号墳主体部遺物出土状況（東より）
- 図版 22 1 5 区完掘状況①（西より）
2 5 区完掘状況②（北西より）
- 図版 23 寺山古墳群出土主要遺物
- 図版 24 1 寺山 14 号墳墳丘出土遺物
2 2 区出土遺物
3 寺山 14 号墳出土鉄錐保存処理前 X 線写真
- 図版 25 寺山 14 号墳出土遺物
- 図版 26 寺山 14 号墳出土鉄錐①
- 図版 27 寺山 14 号墳出土鉄錐②
- 図版 28 寺山 14 号墳出土鉄錐③
- 図版 29 1 3 区出土土器
2 3 区出土銅鏡
3 3 区出土砾石
4 寺山 11 号墳出土土器
5 寺山 11 号墳周溝出土土器
- 図版 30 1 寺山 12 号墳出土鉄剣・刀子
2 寺山 12 号墳出土土器
3 5 区出土土器
4 5 区出土鉄製品

挿図目次

第1図 豊岡村の地質	6	第28図 3区出土器実測図	58
第2図 豊岡村の地形と大字	7	第29図 3区出土銅鏡実測図	58
第3図 周辺遺跡の分布図	10	第30図 3区出土砥石実測図	58
第4図 第二東名の路線と対象地点	14	第31図 寺山13号墳横穴式石室検出状況図・ 土層図①	59
第5図 各地点対象範囲1	17	第32図 寺山13号墳横穴式石室土層図②	60
第6図 各地点対象範囲2	19	第33図 寺山13号墳横穴式石室再利用時実測図	61
第7図 各地点対象範囲3	20	第34図 寺山13号墳横穴式石室展開図	63
第8図 寺山古墳群周辺の古墳分布図	30	第35図 寺山13号墳横穴式石室基底石・墓壙実測図	64
第9図 寺山古墳群調査区・グリッド配置図	33	第36図 寺山13号墳横穴式石室出土遺物実測図	65
第10図 寺山14号墳出土遺物実測図	37	第37図 寺山11号墳表土出土遺物	66
第11図 寺山14号墳地形測量図・土層図	38	第38図 4区地形測量図	67
第12図 寺山14号墳第1・2主体部配置図	39	第39図 寺山11号墳地形測量図	68
第13図 寺山14号墳第1主体部展開図・土層図	41	第40図 寺山11号墳周溝南側出土遺物出土状況図	69
第14図 寺山14号墳第1主体部平面図	42	第41図 寺山11号墳周溝南側出土遺物実測図	69
第15図 寺山14号墳第1主体部推定復元図	44	第42図 寺山11号墳主体部実測図・土層図	70
第16図 寺山14号墳第2主体部検出状況図・土層図	45	第43図 寺山12号墳丘測量図・土層図	72
第17図 寺山14号墳第2主体部遺物配置復元図	46	第44図 寺山12号墳丘・周溝出土遺物実測図	73
第18図 寺山14号墳出土鉄錐計測値散布図	47	第45図 寺山12号墳主体部実測図・遺物出土状況図	74
第19図 寺山14号墳第2主体部遺物実測図①	48	第46図 寺山12号墳主体部出土遺物実測図	74
第20図 寺山14号墳第2主体部遺物実測図②	49	第47図 5区出土遺物実測図	75
第21図 寺山14号墳第2主体部遺物実測図③	50	第48図 5区地形測量図・断面図	76・77
第22図 寺山14号墳出土鉄錐構造模式図	51	第49図 遠江・駿河における堅穴式石室・箱形石棺	
第23図 2区出土遺物実測図	53	編年図	84
第24図 2区試掘配置図・土層図	54	第50図 遠江・駿河における片刃箭頭の変遷	86
第25図 3区地形測量図・土層図	56	第51図 鎧身鉢編年図	88
第26図 寺山13号墳地形測量図・断面図	57	第52図 敷地川流域における古墳・古墳群の変遷	91
第27図 寺山13号墳周溝集石出土状況	58		

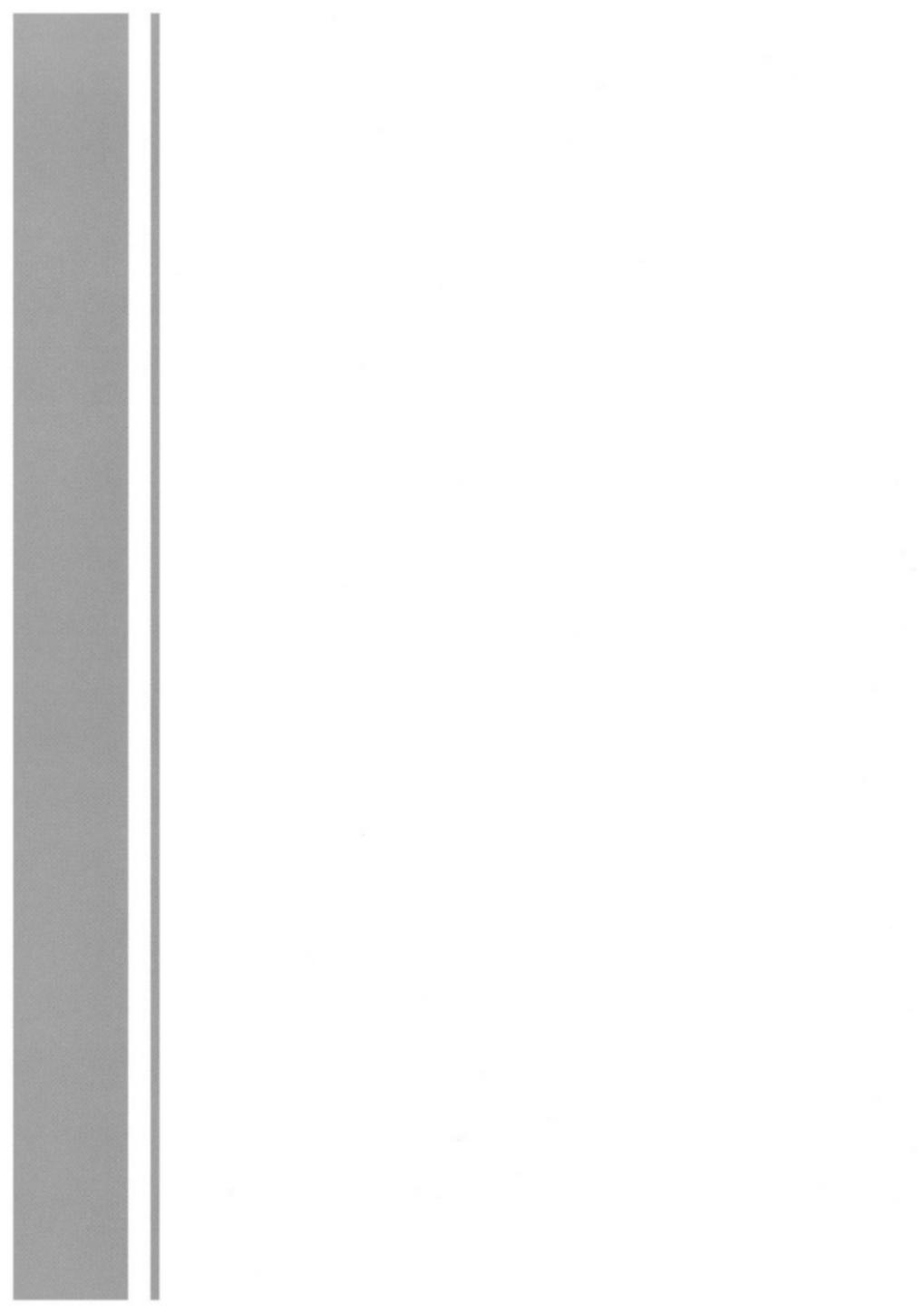
挿表目次

第1表 豊岡地区現地調査の体制	5	第8表 寺山古墳群・大当所古墳群の概要	31
第2表 周辺遺跡一覧表	10	第9表 寺山11～14号墳の概要	36
第3表 対象地点一覧表	14	第10表 寺山古墳群出土土器観察表	78
第4表 確認調査実施期間	16	第11表 寺山14号墳第2主体部出土鉄錐観察表	79
第5表 本調査実施期間	21	第12表 遠江・駿河における「箱形石棺」・ 「堅穴式石室」出土古墳地名表	82
第6表 資料整理の体制	24	第13表 鎧身鉢出土地名表	87
第7表 周知内容変更一覧表	25		

写真目次

写真1 トレンチによる調査	16	写真11 遺物取り上げ	35
写真2 遺物出土状況	16	写真12 基礎整理	35
写真3 本調査前の状況	21	写真13 トレース	35
写真4 検出中の墳丘	23	写真14 鉄錐の木質の遺存状態	80
写真5 実測中の石室	23	写真15 木口 70×	81
写真6 表土除去	34	写真16 桁目 70×	81
写真7 遺構精査	34	写真17 板目 70×	81
写真8 主体部精査	34	写真18 桁目 200×	階段穿孔のbarの正面
写真9 遺構測量	34	写真19 板目 200×	階段穿孔のbarの断面
写真10 空中写真撮影	35	写真20 桁目 200×	道管と放射組織との隙孔

第1章 総論



第1節 調査に至る経過

1. 第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯

混雑化する東名・名神高速道路の抜本的な対策として、昭和62年の道路審議会において第二東名・第二名神の建設が建議された。その後、第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等を経て、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、飛島村～神戸市間の第二名神とともに、横浜市から東海市に至る延長約270kmの第二東名高速道路の基本計画が策定された。静岡県内においては東西に貫く形となり、その延長は約170kmである。この基本計画策定を受けて静岡県は、平成元年12月、第二東名建設推進庁内連絡会議を設置したが、教育委員会文化課もメンバーとして協議に参加した。

その後、第二東名の基本計画については、文化財を含む環境影響調査等が行われ、他の公共事業や地域開発計画との調整を図った上、平成3年9月24日には静岡県内長泉町～引佐町間の都市計画決定告示がなされた。

こうした環境影響調査と並行する形で、埋蔵文化財の分布状況の把握作業もなされている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公团は、平成4年2月17日付で文化庁へ通知を行うとともに、平成4年5月11日付で、日本道路公团東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長あてに、長泉町～引佐町間の埋蔵文化財分布調査、その手続きの依頼を行った。また、平成4年8月27日付で日本道路公团東京第一建設局静岡調査事務所長から静岡県教育委員会教育長あてに、「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けた県教育委員会は、平成4年9月29日に関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った。踏査結果については、各市町村教育委員会からの回答を基に協議を行い、県教育委員会が取りまとめたものを平成5年3月18日付で、静岡県教育委員会教育長から日本道路公团東京第一建設局静岡調査事務所長あてに回答がなされている。この時点での調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518m²となっている。

その後、長泉町～引佐町間については、平成5年11月19日付で日本道路公团に施行命令が出された。これに伴い、日本道路公团東京第一建設局および静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課で、埋蔵文化財調査の進め方について協議が行われた。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取扱い等について協議されるとともに、発掘調査の実施については日本道路公团が(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託を行うことが確認されている。しかしながら、第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査については、短期間に膨大な調査量が想定され、そのための調査体制をどのように確保していくかが、大きな課題となった。

さらに平成6年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・取りまとめがなされている。こうした状況調査やあらたな踏査結果を基に見直しがなされた結果、この段階での調査対象地点は133箇所、調査対象総面積は1,286,759m²となっている。

平成7年度後半には、路線の一部では幅杭の打設が開始されており、埋蔵文化財の調査の開始についてもかなり見通しがでてきた。こうした状況の中で、第二東名建設に係る埋蔵文化財の取扱いを協議する場として、日本道路公团静岡建設所(平成6年2月設置)と県教育委員会文化課による「第二東名開

連埋蔵文化財連絡調整会議」が設置され、第1回の協議が平成7年12月13日に行われている。これ以降、細かい埋蔵文化財の取扱いについては、この会議において協議していくこととなった。なお、日本道路公団静岡建設所は平成8年7月1日をもって、日本道路公団静岡建設局に改組されている。

平成8年度には、第二東名建設に係る埋蔵文化財の調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、平成8年9月24日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについての確認書を締結した。さらに調査実施機関である（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、平成8年9月25日付で第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。年度後半には、掛川市倉真のNo.94地点、浜北市大平のNo.136地点、同市四大地のNo.137地点の確認調査が実施されている。その後、平成9年度からは、発掘調査も本格化し、県内各地に於いて確認調査から順次着手していった。

一方、長泉町～御殿場市間についても日本道路公団に対し、平成9年1月31日付で建設に係る調査開始指示が出され、さらに平成9年12月25日付で施行命令が出されている。この区間については、建設省の依頼により平成6年度後半に踏査が行われ、調査対象地点のリストアップが行われていたが、調査開始指示を受けて、再度平成10年9月2日付で日本道路公団静岡建設局より静岡県教育委員会教育長あてに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。これを受けて、県教育委員会文化課は、関係する市町村教育委員会に平成10年9月25日付で再踏査の依頼をするとともに、10月2日には踏査の実施に関する打ち合せ会を行った。11月上旬には、長泉町・裾野市・御殿場市教育委員会から踏査結果についての報告がなされたが、県教育委員会文化課はそれを取りまとめ、平成10年12月17日付で県教育長から日本道路公団静岡建設局あての回答を行った。この区間で埋蔵文化財調査の対象となった箇所は21地点、調査対象総面積は108,734m²であった。関係者協議の結果、これらの調査対象地点についても、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施することとし、平成11年3月5日付で協定変更を行っている。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及びサービスエリア・パーキングエリア、排土処理場について（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応してもらうとともに、特に東部地域を中心に、民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

こうした経過の中で、豊岡村地域における第二東名建設に伴う埋蔵文化財調査について、最終的には後述する6地点を調査対象にした。発掘調査の実施については、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所があたることとし、用地買収が進み、一部調査実施が可能となった平成9年度に、No.124地点（上神増A古墳群）、No.125地点（上神増E古墳群）、No.127地点（敷地）の確認調査から開始した。

2. 現地調査の体制

豊岡村域（以下、豊岡地区）の確認調査および本調査（以下、現地調査）は、平成9～12年度に実施した。その体制は、第1表のとおりである。

第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、本事業）においては、平成11～13年度では本事業担当の課を設けて対応した。さらに、日本道路公团静岡建設局各工事事務所の範囲に合わせて工区を設定し、数多くの調査に工区単位で対応した。なお、豊岡地区は掛川工区内の一地区である。

掛川工区内の掛川地区・森地区・豊岡地区的担当は、森町一宮に設置した森現地事務所を拠点として各現地調査を実施した。なお、各遺跡の調査担当者については、各報告書の例言にあげることとする。

また、現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。ただし、基礎的な整理作業（各種台帳作成、写真の整理・収納、図面の修正・整理・収納、出土遺物の注記・接合・復元・収納、遺構所見・遺跡概要の整理）については、森現地事務所にて、現地調査と並行して実施した（以下、基礎整理）。

各現地調査・基礎整理には第1表以外にも多くの者が参加した。

第1表 豊岡地区現地調査の体制

		平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
総務部担当	所長	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠
	副所長	池谷 和三		山下 晃	山下 晃
	常務理事 兼総務部長	三田村昌昭	伊藤 友雄	伊藤 友雄	伊藤 友雄
	総務課長	初鹿野英治	杉木 敏雄	杉木 敏雄	杉木 敏雄
	経理専門員	稻葉 保幸	稻葉 保幸	稻葉 保幸	稻葉 保幸
	総務係長		田中 雅代		
	会計係長	杉田 智			
	副主任				鈴木 秀幸
	主事			鈴木 秀幸	
調査研究部	部長	石垣 英夫	石垣 英夫	佐藤 達雄	佐藤 達雄
	次長	栗野 克巳		佐野五十三	及川 司
	次長心得		佐野五十三		
	担当課長	渡瀬 治	遠藤 喜和	及川 司	及川 司
	工区主任		平野 徹	篠原 修二	加藤 理文
	主任調査研究員	遠藤 喜和	篠原 修二		長尾 一男
	調査研究員	佐藤 清隆	西田 光男	佐原 哲之	中村 正宏
		平野 徹	長尾 一男	大谷 宏治	児玉 卓
		竹原 一人	富樫 孝志	田村隆太郎	田村隆太郎
		長尾 一男	木崎 道昭		
		長谷川 誉	梶葉 良久		
			大谷 宏治		
保存処理	主任調査研究員		西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
	調査研究員		青木 修		

第2節 豊岡村の位置と環境

1. 地理的環境

豊岡村は、北緯35度50分・東経137度50分付近の静岡県西部に位置し、北側は天竜市、東は周智郡森町、西は天竜川を挟んで浜北市、南は磐田市や袋井市に面している。総面積は約40.06km²を測る。

静岡県西部は、南の太平洋側には平野部が広がり、北の内陸部は中部山岳地帯から続く山地・丘陵地になっている。村域は、山地・丘陵地が広がる地域から平野部が広がる地域への変換部分を範囲としている。すなわち、豊岡村の北部は赤石山地から南にのびている山地・丘陵地であり、南部は天竜川流域の平野部や敷地川流域の平野部の北端になっている。ただし、この豊岡村から南の磐田市にかけては磐田原台地が南北に横たわっており、天竜川流域の低地部と太田川や敷地川流域の低地部を分けている。したがって、丘陵地が村域の中央を南北に縦断し、豊岡村では東西にわかれて天竜川流域の平野部と敷地川流域の平野部がつながることはない。

約5千万年前（新生代古第三紀）以前、豊岡村は海底にあった。村内で最初に現れる陸地は、海底で堆積した砂や泥で形成された光明層群・犬居層群が、プレートの移動によって陸化したものである。その後、河川堆積や海底で堆積した泥・砂・礫によってさらに多くの層が形成され、また幾度かの地殻変動等によって現在の地形に近付いていくことになる。約8万年前以降（新生代第四紀更新世）になると、山地の隆起と海面の低下に伴って天竜川等の各河川がほぼ今の位置に定まる。海面の低下によって急な

流れになる河川は、それ以前に形成された平野の一部を侵食し、その平野を台地や段丘へと変えていった。また、隆起した山地・丘陵からは大量の礫・土砂が流れ、特に河川の流れが比較的緩やかになる時期には広範囲に堆積して新たな平野を形成していく。こうした作用を繰り返し、現在の地形がつくられている。以上から、豊岡村の山地・丘陵地は、泥岩層・砂岩層・砂層・礫層といった海底や河川で堆積した層によって形成されていることがわかる。ただし、磐田原台地では、河川によって形成された磐田原台地礫層の上に、風で運ばれてきた火山灰が堆積している。

地質平面図によると、第二東名路線にあたる村中部では、丘陵地は曾我層群や掛川層群という砂や礫による層がみられる。一方の平野部は、天竜川や敷地川を中心とする各河川が運んだ礫・土砂・泥の堆積で形成されている、いわゆる沖積平野である（加藤1992等）。



第1図 豊岡村の地質

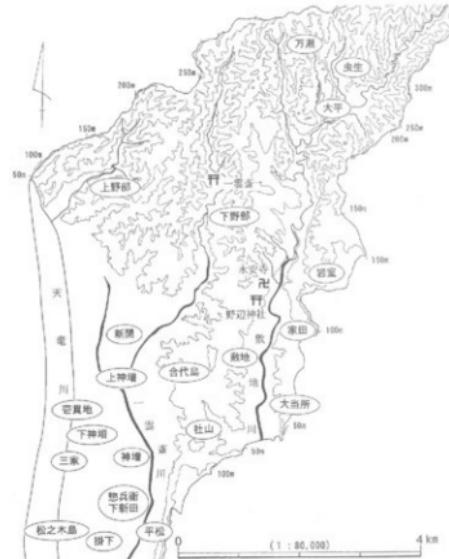
豊岡村の山地・丘陵地、特に中・南部においては、大きく3つに分けて捉えることができる。1つ目は、敷地川流域の東側、北方山地の本宮山から南南西に続く丘陵で、村域の東境界になっている。2つ目の丘陵は、敷地川と一雲斎川に挟まれた丘陵地で、同じく北方山地から南に続く丘陵である。ただし、この南部は合代島丘陵とも称し、より北方に広がる険しい山地・丘陵とは異なり、上部に平坦部をもつ台地状地形を呈している。この丘陵上部の中央には浅い谷状地形があり、丘陵頂部が東西にわかれて存在する。西側頂部の最南部には社山と称する頂部がより高くなっている。3つ目の丘陵は、社山から谷を挟んでさらに南に続く、磐田原台地と称する丘陵である。この台地は南の磐田市にかけて広がる。村域の各丘陵からは河川流域へ多くの尾根を派生させているが、この磐田原台地においては天竜川の侵食による崖面をみせ、目立った尾根は派生させていない。

村域を流れる河川は、敷地川・一雲斎川、そして村の西境界となる大河川、天竜川をあげることができる。敷地川は、南の袋井市域で一宮川と、さらに南の磐田市域で太田川と合流する。すなわち、敷地川流域はより東を流れる太田川流域の平野部とつながっている。一方、一雲斎川は天竜川東側流域を流れて南で天竜川に合流する。天竜川の流路は、時代によって変化し、流域内により網目状になっていたと復元することもでき、一雲斎川もその一つであったと考えられる。

豊岡村の大半は丘陵地で、植林地や自然林がその多くを占めている。ただし、段丘や台地状を成す合代島丘陵上には畠、特に茶畠も多くみられる。平野部には水田が多く広がる。人家は、山間地にも存在するが、平野部の周縁や自然堤防上に多く立地する。

現在、敷地川に沿った県道61号線、一雲斎川に沿った県道44号線等、河川に沿った南北の道路がいくつも存在している。また、合代島丘陵や磐田原台地上にも南北をつなぐ道路がつくられている。近世においても、春野町から天竜川沿いに南に下り、磐田へと南下する秋葉街道や塩の道といわれる道があったとされている。またこれらの道は、掛川方面や天竜川以西へも分岐していくとされ、東西方向の道もあったと考えられる。現在、天竜浜名湖鉄道や県道40号線が合代島丘陵の北側を、県道61号線が合代島丘陵の南側を東西にはしり、東の森町から敷地川流域、さらに丘陵を越えて天竜川流域を結ぶ。また、西の浜北市とは天竜川を挟むが、豊岡村や天竜市に現在の橋ができる以前は、渡船を利用しての交流があった。

これら地理的環境等によって、豊岡村はいくつかに区分して捉えられることもある。奈良時代には律令制が整備され、平安時代の『和名抄』によると、遠江國には13の郡が掲載されている。明確な根拠をもって具体的に示すことは難しいが、龜玉・磐田・周智等といった各郡が、豊岡村の範囲を分けてその一部としていたと考えられている。近世には凡そ20の村があつた。現在の豊岡村は、21の大字に分けられている（豊岡村史編さん委員会1995等）。



第2図 豊岡村の地形と大字

2. 歴史的環境

ここでは、豊岡村に所在する遺跡全体について、時代ごとに概観する。各遺跡調査に関わるより詳細な周辺の歴史的環境については、遺跡ごとの報告で記述することにする。

旧石器時代・縄文時代

数箇所において、旧石器時代（約1万年前以前）の遺物が発見されているという記述がある（豊岡村史編さん委員会 1995）。南に続く磐田市の磐田原台地上には旧石器時代の遺跡の存在が明らかとなっており、豊岡村の丘陵上にも当時の遺跡が存在する可能性は十分に考えることができる。しかし、発掘調査によって確認された旧石器時代の遺跡は豊岡村ではなく、明示することはできない。

縄文時代（約1万年前から紀元前4世紀）の遺跡は、上神増の大手内遺跡、下野部の新平山遺跡・大楽地遺跡、敷地の藏平遺跡などで調査されている。いずれも、敷地川や一雲齊川・天竜川流域を東西に見ることのできる丘陵上に立地する。

縄文時代草創期では、大手内遺跡出土の打製槍先がこの時期の遺物である可能性があるといった程度である。続く早期・前期の資料としては、大手内遺跡や藏平遺跡から出土した土器をあげることができ。藏平遺跡では、小穴内からその時期の土器片が出土している。大手内遺跡や新平山遺跡では、中期の遺物も出土している。いずれの遺跡においても、先の時期よりも中期の遺物の方が多く出土しており、全体としてこの時期の資料が最も多いようである。後期に至ると、藏平遺跡などで少量の土器が出土しているだけであり、全体的に減少する（豊岡村史編さん委員会 1995）。

大楽地上の段遺跡では、中期後半の土器が出土している。中でも、咲烟式土器といわれるものが目立つ。一方、一雲齊川を1km程下ったところにある新平山遺跡（B地点）では、同じ中期後半でも先行する五領ヶ台式土器や北屋敷式土器が多く出土しており、咲烟式になると極端に減少するようである。両遺跡間にみる相互補完関係が、当時の定住と移動を考え上で注目されると報告されている（豊岡村教育委員会 1993・2002）。

以上、縄文時代の遺物が出土している遺跡は少なくない。ただし、性格が明確に把握できる縄文時代の遺構は少ない。

弥生時代

調査などでその存在と概要を示すことができる弥生時代の遺跡としては、下野部の新平山遺跡、敷地の藏平遺跡・西の谷遺跡をあげることができる。新平山遺跡や藏平遺跡は、先述のとおり敷地川や一雲齊川・天竜川流域を東西に見ることのできる丘陵上の遺跡である。しかし、西の谷遺跡だけは丘陵斜面に立地する遺跡であり、後述するように通常の遺跡とは性格も異なっている（豊岡村史編さん委員会 1995等）。

新平山遺跡A地点は、弥生時代前期（紀元前3世紀頃）の遺物も出土しているが、後期から古墳時代前期にかけて（3世紀頃）の集落跡を主としている。丘陵尾根上の集落跡であり、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡10軒が点在するように発見されている。この集落からは、土器のほかに石製臼鍤車およびその未製品が比較的多く出土している。瘦せ尾根上の小集落という集落形態とともに、出土遺物にみる特徴もこの集落の様子を知る上で注目される（豊岡村史編さん委員会 1993）。一方、藏平遺跡でも弥生時代後期の土器が発見されている。ただし、発見されたのは日常生活で多用される壺・壺・高杯といった土器ではなく、祭祀の意味を強く持っていたと考えられる鳥形土器である。段丘上という立地条件からは集落跡の可能性が考えられるが、明確にすることのできる遺構・遺物の発見はない。

なお発見された鳥形土器は、その後の調査によって浅い土坑内にあったものと考えられている（豊岡村史編さん委員会 1993 等）。この藏平遺跡と同じ敷地川西岸丘陵地には、銅鐸埋納地である西の谷遺跡が位置している。明治時代に丘陵斜面から 2 個の三連式銅鐸が発見されている。丘陵斜面という見晴らしの悪い特異な立地にある遺跡であり、見晴らしの比較的良い丘陵の上に展開する集落や墓域といった遺跡とは全く異なる。すなわち、銅鐸埋納のための特別な場所（遺跡）であったと考えられる。その一方で、藏平遺跡との関連も想像されるところである（豊岡村史編さん委員会 1995 等）。

古墳時代

古墳時代になると、丘陵上のほぼ全体に遺跡が確認できるようになる。ただし、その多くは墓域、すなわち古墳群である。古墳群以外の遺跡としては、下野部の新平山遺跡・大楽地遺跡があげられる。ともに古墳時代前期の集落跡である。新平山遺跡は、先述のとおり弥生時代後期から継続して営まれた小規模な集落跡である。なお、敷地川西岸の丘陵では、より下流域の袋井市の山田申波遺跡でも弥生時代後期から古墳時代前期の集落が発見されている（袋井市教育委員会 1994）。この遺跡も、決して大規模な集落であったとは考えられない。

大楽地上の段遺跡では、前期の堅穴住居跡 8 軒が発見・調査されている。集落全域の調査ではないが、出土遺物等から前期後半の短期間の集落であったと考えられている。さらに、新平山遺跡 A 地点の集落は前期前半に終息をむかえることを考えあわせると、両集落の時期的補完関係を見出すことができるようである（豊岡村教育委員会 2002）。

調査・確認されている古墳のうち、最も古いものは上神増の大手内 15 号墳である。大手内古墳群は、磐田原台地上の北端に立地する古墳群である。大手内 15 号墳は古墳時代の前期後半（4 世紀）に築造された古墳で、不定形な方形墳である。3 基の埋葬施設が発見されているが、中心にある第 1 主体は木棺直葬を埋葬施設とする。

中期（5 世紀）になると、大手内古墳群のほか、下野部の五反田 1 号墳や谷田ヶ谷 11 号墳・新平山古墳群等でも古墳が築造されていたことがわかっている。いずれも、天童川・一雲齊川流域を西に見下ろす丘陵、もしくはその方向にのびた尾根の上に立地している古墳である。

豊岡村の古墳は、その時期に問わらず円墳が多い。ただし、方墳や前方後円墳の存在もいくつか知られている。大手内古墳群では、円墳の多い古墳群中に方墳も存在していることが、発掘調査によって明らかとなっている。なお、五反田 1 号墳や新平山 B 1 号墳・同 B 2 号墳では葺石が検出されているが、これらは円墳である。前方後円墳としては、大当所の大当所 2 号墳や上神増の血松塚古墳が現在知られている。血松塚古墳は墳長約 48 m の前方後円墳であり、測量調査と範囲確認調査が行われている。その調査等によって、古墳時代中期後半の土器や埴輪が出土している。大当所 2 号墳は、敷地川流域東の丘陵上に立地する墳長約 21 m の前方後円墳である。大当所古墳群は円墳である 1 号墳とこの前方後円墳で形成されているが、1・2 号墳とも発掘調査されておらず、築造時期等の詳細はわからない。なお、大当所 2 号墳と同じ敷地川流域のより下流域の西側丘陵では、袋井市の川会坊主山古墳という墳長約 30 m の前方後円墳がある。鏡や大刀・土器・埴輪が出土しており、中期末もしくは後期初頭に造られた古墳であると考えられている。

豊岡村で確認されている前・中期の古墳の埋葬施設は、木棺直葬を基本としたものである。ただし、石（礫）を木棺の小口・側面や上部に使用した例も少なくない。木棺直葬の埋葬施設は、古墳時代後期（6 世紀）前葉までの古墳にも採用される（静岡県教育委員会 2001、豊岡村史編さん委員会 1993、豊岡村教育委員会 1993・1996・2000）。

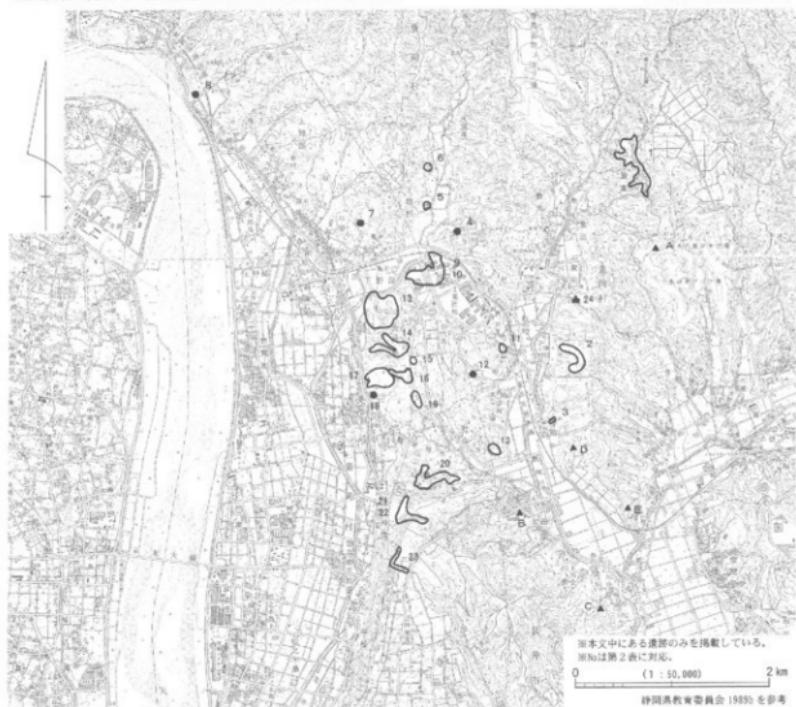
第2表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	主な時代	No	遺跡名	主な時代
1	岩室魔寺	平安	16	上神増E古墳群	古墳
2	寺山古墳群	古墳	17	押越（上神増D）古墳群	古墳（6～7C）
3	大当所古墳群	古墳	18	新林（上神増C）1号墳	古墳（6～7C）
4	五反田1号墳	古墳（5C）	19	社山（上神増F）古墳群	古墳
5	大楽地瓦窯	平安	20	社山城跡	中世（戦国）
6	大楽地遺跡	縄文・古墳	21	大手内遺跡	縄文
7	谷田ヶ谷11号墳	古墳（5C）	22	大手内A古墳群	古墳（4～8C）
8	神田1号墳	古墳（7C）	23	大手内B古墳群	古墳（5～6C）
9	新平山遺跡	縄文・弥生・古墳	24	仲明古城遺跡	中近世
10	新平山古墳群	古墳（5～8C）	A	西鈴木戸ヶ谷東峰遺跡（森町）	弥生～鎌倉
11	藏平遺跡	縄文・弥生	B	山田中渡遺跡（袋井市）	弥生～古墳
12	西の谷遺跡	弥生	C	川会坊主山古墳（袋井市）	古墳
13	亀井戸城跡	中世（戦国）	D	龍源寺上西古墳群	古墳
14	上神増A古墳群	古墳（6～7C）	E	八王子神社上古墳群	古墳
15	上神増B古墳群	古墳			

*本文中にある遺跡のみを掲載している。

*Noは第3回に対応し、1～23は藤岡村、A～Cはそれ以外に所在する遺跡である。

静岡県教育委員会 1989b を参考



第3図 周辺遺跡の分布図

後期中葉以降、多くの古墳に採用される埋葬施設は横穴式石室にかわる。とともに、古墳の数が増加していく。

調査・確認された古墳・古墳群をあげても、上野部の神田1号墳・下野部の新平山古墳群・上神増の押越（上神増D）古墳群・新林（上神増C）1号墳・大手内A古墳群・同B古墳群・合代島・社山の上神増A古墳群・同B古墳群・社山の社山（上神増F）古墳群と、先の時代・時期の遺跡・古墳群数に比べると特に多い。さらに古墳群数だけでなく、大手内古墳群のような古墳時代中期から古墳を築造してきた古墳群においても、この時期に古墳数が増加する傾向にある。古墳数の増加とともに、丘陵頂上だけではなく斜面部にも古墳を築造するようになる。

上神増A古墳群や同B古墳群では、丘陵上や丘陵斜面にこの時期の古墳が存在している。これらの古墳は、割石を使用した横穴式石室や河原石を使用した横穴式石室を露出させ、もしくは天井に開いた隙間から石室内に入ることができ、今でも横穴式石室の古墳であることが確認できる。また、埋葬施設を見るることはできないものの、明確な墳丘を今も残している古墳が合代島丘陵には多く分布している。ただし、多くの場合は盗掘されているようである。分布調査によれば、豊岡村の丘陵各所にさらに多くの古墳が存在しており、その多くもこの時期の古墳であると想定される。

古墳群の構成としては、小規模墳が密集するように築造されているものが多く、いわゆる群集墳といわれるものである。しかし、全く同じような古墳ばかりが築造されているというわけではない。墳丘規模の多少の差は認められる。また、横穴式石室の規模差は顯著に認められる。横穴式石室の形態の違いにおいても、使用石材（河原石か角石か）の違いにおいても様々である。築造時期による違いもあるが、古墳群による違いや古墳群内における階層差などによるものと考えられる部分もあるようである（豊岡村史編さん委員会 1993、豊岡村教育委員会 1983・1993・1996・2000、森下他 2000）。

古墳の築造は7～8世紀に至るまで行われていたことがわかっている（豊岡村教育委員会 1983等）。上野部の神田1号墳は終末期（7世紀代）に丘陵斜面に築造された古墳であり、墳丘の規模・石室の規模とともに大型ではない。ただし、その副葬品に中国鏡が含まれており、鏡副葬の背景を考える上で注目される（森下他 2000）。

奈良時代・平安時代

奈良時代の遺跡としては、8世紀代にまで至る古墳築造や追葬を数基の古墳で確認できる他は、明確なものはあまり認められない。敷地の藏平遺跡では奈良時代の土器も採集できるというが、奈良時代の遺跡があるという証拠はない（豊岡村史編さん委員会 1993）。大楽地上の段遺跡では8世紀代の遺物も出土しているが、伴う遺構は明確ではない（豊岡村教育委員会 2002）。

次に述べる岩室廃寺からも奈良時代の須恵器が発見されている。その量は少量であり、奈良時代までさかのぼるかについては明言し難いが、可能性として指摘することはできよう。

岩室廃寺は、密教系山岳寺院の跡であり、敷地川上流東岸丘陵・山地に立地する。平安時代後期の作と思われる大日如来等が祀られている觀音堂のほか、礎石建物跡や塔芯礎を確認することができ、さらには発掘調査で基壇らしき部分2箇所を発見している。觀音堂・礎石建物跡・塔芯礎の周囲では平安時代の瓦や陶器が発見されており、この岩室廃寺は平安時代中頃（10世紀後半）に最盛期を迎えていたと考えられている。

岩室廃寺と谷を隔てた丘陵・山地では、2箇所に塔芯礎の存在を確認することができる。その一つ塔芯礎の周囲からも岩室廃寺と同様の瓦片が採集されている。また、森町一宮の西岸水戸ヶ谷東岸遺跡では、岩室廃寺と同時期の陶器・須恵器が出土しており、岩室廃寺との関連も考えられている（森町教育委員会 1991）。これらの状況から、岩室廃寺を中心とした広範囲に堂塔が配置されていたことをうかが

わせる。すなわち、山地全体といった広範囲に堂塔が配置され、寺域としていたと考えられ、平安時代の山岳寺院のありかたをみることができる。

岩室庵寺で採集された瓦片、岩室庵寺から谷を隔てた丘陵地にある塔芯礎周辺で採集された瓦片は、下野部の大楽地瓦窯跡で採集される瓦片と酷似している。すなわち、岩室庵寺やその関係のものに使用した瓦は、大楽地瓦窯の製品であったと考えられる。この大楽地瓦窯跡は、一雲斎川上流の西北岸丘陵に立地する。発掘調査は行われていないものの、多くの瓦片が採集されている。また、平安時代の陶器も採集されており、大楽地窯では陶器の生産も行っていたと考えられている。(豊岡村史編さん委員会 1995 等)。

中世

中世においては、岩室庵寺周辺等の中世墓群のほか、城跡・寺社も存在している(豊岡村史編さん委員会 1995)。野部神社は中世においては山王社と呼ばれていた。その所領は野部郷内に多く、戦国期の今川氏によっても寄進・安堵されていたようである。永安寺は14世紀後半に開創された臨済宗の古刹である。14世紀末、守護今川氏から寄進されていた野部郷内の所領が足利義満から安堵されている。戦国期の今川氏やその後の武田氏、さらに徳川氏(幕府)においても、所領の安堵は続いたようである。一雲斎は曹洞宗の寺で、その教祖が遠州で拡大した15世紀に開創されている。以上は現存する寺社であるが、先述の岩室庵寺も鎌倉時代から南北朝期においては相当な盛況ぶりであったようである。

城跡としては、下野部の亀井戸城や社山の社山城を代表としてあげることができる。亀井戸城は合代島丘陵の北端に位置する。繩張の遺存状態は良好である。南東から天竜市の二俣城を目指すには避けられないルート上に位置し、また各方面への眺望もよい。築城時期については史料もなく、知ることができない。ただ、戦国時代(16世紀後半)、武田信玄が遠州を侵攻して天竜市の二俣城を攻撃した際、合代島に本陣を置いたことが史料からわかっており、合代島とある場所から、この亀井戸城がその本陣であった可能性が考えられている。一方、社山城は磐田原台地の北端から谷を挟んだ北側、合代島丘陵南端部のより隆起した小山塊の尾根上に立地する。亀井戸城の南に位置し、その間の距離は約2kmと近い。西・北への眺望が特によい山城であり、狼火での通信なども想像させる。築造・廃城年代は不明だが、15世紀末から16世紀にかけて、今川氏と斯波氏の新旧守護勢力抗争の一舞台となっていたことがわかっている。その後、16世紀中頃に今川氏が滅亡するので、この地は徳川氏の軍門に下ったと考えられる。16世紀後半には、先述したように武田信玄が遠州に侵攻して二俣城を攻撃するが、その際には、この城も武田氏の属城となっていた可能性は否定できない。ただ、二俣城が武田氏の属城となった後、徳川氏はその武田氏に備えて社山や合代島の砦を修築したようである。

以上は、文献資料によるところが大きく、発掘調査の実施はない。また、他にも山城・砦のあったことがわかっているが、やはり文献資料があるものの発掘調査は実施されていない(静岡県教育委員会 1981)。

以上、時代ごとに順を追って記述してきたが、豊岡村では古墳群が最も多く存在し、発掘調査資料も充実している。ただ、他の時代においても重要な遺跡は存在している。また開発の多い地域ではないために、今後新たに発見される遺跡にも期待される。現在知ることのできる、もしくは把握されている遺跡は全てと言っていいほど丘陵地に立地する。さらに西の谷遺跡等の一部を除けば、河川流域の低地を見下ろす丘陵上や高所に立地している。少なくとも、現在までの調査等で平野部に立地する遺跡を知ることはできない。平野部に遺跡が存在しない、遺存しない、もしくは発見されないのは、天竜川等の河川の影響によるものであろうか。

第3節 確認調査

1. 確認調査の対象地点

(1) 位置と現況

第二東名の路線は、豊岡村の中央を東西に横断する。豊岡村域での路線は4km前後を測る。なお、豊岡地区においてサービスエリア・パーキングエリア・インターチェンジは設定されていない。

まず、路線の位置を東から西へと説明する。豊岡村の東境は敷地川流域の東の丘陵尾根上となっているが、森町からこの丘陵を横断してくる路線は、敷地字仲明の谷部あたりから敷地川流域へと続く。敷地川流域においては、敷地川沿いをはしる天竜浜名湖鉄道の敷地駅の南を東西に横断する。敷地川流域の西には、合代島といわれる丘陵が存在している。路線は、敷地川流域から敷地字西の谷南の谷から合代島丘陵に入り、合代島丘陵のほぼ中央を東西に横断する。合代島丘陵の西は天竜川流域の平野部となっているが、路線は社山字押越からこの平野部に入り、若干北方向に曲がりながら天竜川に至る。

丘陵地の現況は、多くが植林地として利用され、茶畑に利用している場所は合代島丘陵上の一帯にしかない。したがって、各丘陵の地形は、ほぼ本来の形状が残されているとみられる。ただし、上神増の押越では丘陵が土採り等によって大きく削平されている。

一方、平野部・谷平野においては、道路や建築物・宅地によって開発されている部分があるものの、水田や畑に利用されている部分の方が多い。

(2) 対象地点の選定

第二東名路線範囲において、静岡県教育委員会および豊岡村教育委員会が確認調査を必要とする対象地点とその範囲を選定している。その後においても、路線範囲の変更や側道等といった本線以外の工事範囲の確定、さらに遺跡の所在の再確認等によって、対象地点の範囲の変更や新たな対象地点の追加も同様に行われた。最終的に、豊岡地区では6箇所の対象地点が選定された。

第3表に対象地点の一覧を示した。6箇所の対象地点の内、4地点は既に周知されていた埋蔵文化財包蔵地（以下、周知の遺跡）を含んだ場所、その他2地点は周知の遺跡を含まないが、遺跡の存否を含めて確認調査を行う必要があるとされた場所である。

No 124 地点・No 125 地点・No 128 地点は、丘陵上に立地する古墳群の存在が知られていた場所である。ただし、周知の遺跡の範囲よりも大きく遺跡（古墳群）が広がっている可能性も考えられ、より広い範囲を対象地点の範囲とした。また、No 128 地点の対象範囲は森町域にも広がっているが、範囲の大半が豊岡村域にあることから、対象範囲全体を豊岡地区の地点として扱うこととした。

No 126-2 地点は、敷地1・2号銅鐸の出土土地として知られていた場所である。銅鐸は丘陵斜面から出土したことから、その丘陵斜面を対象範囲とした。また、同じ丘陵斜面のより奥まった部分にNo 126 地点が位置する。これら2つの対象地点に関しては、敷地1・2号銅鐸埋納の痕跡・新たな埋納銅鐸の存否確認はもちろんのこと、銅鐸埋納地の地形環境・景観を記録保存しておく必要も考えられた。

No 127 地点は、丘陵上に位置するものの周知の遺跡が存在する場所ではなかった。しかし、その丘陵の斜面には銅鐸出土地が知られており、銅鐸埋納に関係する遺構・遺物が発見される可能性も考えられ

た。また、この丘陵上にはある程度の平坦面をもった部分がある。前節－2で述べたとおり、豊岡村では遺跡の多くが丘陵地に立地しており、この丘陵上にも古墳群や弥生時代の集落・墓域といった遺跡が存在する可能性を指摘することができた。なお、No.127地点の対象範囲をNo.126-2地点の対象範囲と一部を重ねている理由は、No.127地点では集落・墓域・古墳群等の存在を含めて確認する必要があった一方、No.126-2地点は銅鐸埋納地を念頭に置いた確認調査を必要としたという違いがあったからである。

第3表 対象地点一覧表

対象地点	対応する遺跡（現地調査前の周知）	対象地点	対応する遺跡（現地調査前の周知）
No.124 地点	上神増A古墳群	No.126-2 地点	西の谷遺跡
No.125 地点	上神増B古墳群 上神増E古墳群	No.127 地点	なし
No.126 地点	なし	No.128 地点	寺山古墳群

静岡県教育委員会 1889b を参考



第4図 第二東名の路線と対象地点

2. 確認調査の方法と経過

(1) 調査の方法

確認調査は、通常は対象範囲の一部を実際に掘り下げて遺跡の有無と範囲を把握するが、No 126 地点と No 126-2 地点は銅鐸出土地であるという性格から、全域に対して金属探査を行い、その反応部を部分的に掘り下げるという方法を採用した。この両地点の確認調査については、後述する各地点の概要とは別に報告する西の谷遺跡の調査報告で詳細に触れることとする。よって、以下の調査の方法についての記述は、両地点以外の対象地点に関することを主とする。

まず駐車場・作業員棟設置等の準備、対象地点の位置と範囲を確認した。その後、対象範囲内で調査区を設定した後、各調査区の掘削を開始した。調査区は、対象地点が全て丘陵上にあって古墳群の存在も想定されることから、トレンチを基本とし、把握の難しい場合はその周囲を拡張した。また、遺跡の有無とともにその範囲を把握するため、対象範囲の全域に亘るよう調査区を設定することに努めたが、急斜面部においては、横穴墓や窓跡等の存在が想定できない限り、作業の安全上を考慮して調査区の設定を避けた。調査区の掘削は、丘陵上では重機が入らない場所が多く、また重機が入ることで古墳等が壊される可能性のある場所が多いため、表土から人力で行った。

土層については、特に遺物や遺構を発見した場所について、遺物包含層と遺構面の判断に重点を置いて、平面や調査区各壁の土層断面によって検討し、記録した。ただし、丘陵上では表土や流土・崩落土層直下が遺構面となる場合が多く、遺構の有無確認の方に重点を置いて調査を行った。

発見した遺構については、遺構面・覆土・平面形を調査区内で把握し、記録した。遺構であるのか、根痕や擾乱・自然地形等であるのか判断できない場合は、実際に覆土を掘り下げるか、遺構全体を把握できるように部分的に調査区を拡張して判断に努めた。

出土遺物については、基本的には位置と層位を確認・記録した後に取り上げたが、遺構内でまとまつて出土した遺物や土器棺・蔵骨器のような遺構の性格を持つものについては、本調査をすること前提として、出土位置に残したままにした。

以上のことによって、遺構や遺物の確認と層位の把握を行い、遺跡の有無、さらに発見した遺跡の範囲について判断した。

現地の記録図面は、全体図は 1/100、土層断面もしくは柱状図は 1/20 を基本とし、必要と判断した遺構図等は 1/20 もしくは 1/10 で作成した。なお、測量基準杭は、三角点や第二東名の工事関係用基準杭を使用し、その国土座標をもって作成した。また、条件を満たす基準杭がなかった場合は、任意に基準杭を設定して記録作業を実施した。現地記録写真は、作業工程撮影用と併行して 35mm 判カラーネガを用い、必要に応じて、35mm 判や 6 × 7 判のモノクロも使用した。

調査区の埋め戻しについては、各地点あるいはその部分の事情に合わせて行った。埋め戻し作業は、調査区の掘削と同様、重機が入らない場所や重機が入ることで遺構が壊れる場所が多いために人力で行った。

(2) 調査の経過

各地点の確認調査は、実施できる条件がそろい、要請のあった順に実施した。よって、地点順に確認調査を実施してはいない。また、同一地点内でも部分的に数度に分けて確認調査を実施せざるを得ない場合もあった。その場合は「126 地点その1」等として実施することとした。数度に分けて実施した地点は、豊岡地区ではNo.126-2 地点だけである。

各地点の調査期間は、第4表のとおりである。それぞれ、下に示した期間内において、先述の調査の方法に従って確認調査を実施し、遺跡の有無と範囲を把握した後、調査を終了している。

第4表 確認調査実施期間

地点	対象面積 (m ²)	平成 9 年度						平成 10 年度						平成 11 年度							
		8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
124	4,703	—																			
125	14,070	—																			
126	923																		—		
126-2	その1																		—		
	その2	2,596																	—		
127	4,743	—																			
128	21,010												—								



写真1 トレンチによる調査 (No.127 地点)



写真2 遺物出土状況 (No.125 地点)

3. 各地点の概要

(1) №124 地点

位置・立地と現況

本地点は、豊岡村社山字押越に位置する。東の合代島丘陵から西の天竜川流域へとのびる尾根の先端部上に立地している。丘陵尾根付近の大半が植林地になっていた。小さな山道が尾根上に設けられており、若干の擾乱の存在は見られたが、大きな地形改変や造成は認められなかった。

この対象範囲は、周知の遺跡である上神増A古墳群の一部を含んでいた。現況観察では、尾根の西先端部上に存在が知られていた上神増A5号墳の墳丘と盗掘坑を明確に確認することができた。

調査方法と確認状況

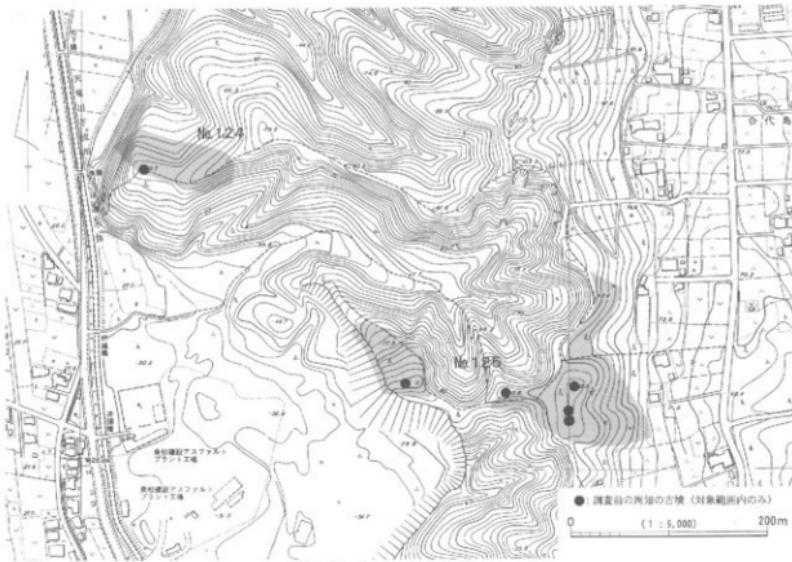
丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。ただし、上神増A5号墳の周囲は、現況観察で明確な墳丘等を確認することができ、安易な掘削を行うことを避けた。

全調査区で、表土・流土等の直下に疊を含む黄色砂層等を確認した。場所による色調や含む疊の量の違いがあるものの、いずれも丘陵を形成している基盤層と判断することができる。

遺物の出土ではなく、調査区内における遺構の発見もなかった。

結果

周知されていた上神増A5号墳は、その位置が若干異なっていたものの、現況観察でその墳丘等を確認することができた。一方、トレンチを設定して調査を実施した上神増A5号墳以外の場所では、遺跡の存在を確認することができなかった。



第5図 各地点対象範囲 1

(2) №125 地点

位置・立地と現況

本地点は、豊岡村社山字押越、合代島字新林・西通りに位置する。合代島丘陵の西半部に立地し、合代島丘陵中央の浅い谷に面した東向きの斜面、その頂上部、さらに西側に派生する尾根上を範囲としている。大半が植林地で、山道等による若干の擾乱は見られたが、大きな地形変容等は認められなかった。ただ、対象範囲の西隣は土採りによる数十mの崖になっていた。

対象範囲南半の尾根上は周知されていた上神増E古墳群の一部を含み、現況でも数基の墳丘や盗掘坑を観察することができた。また、対象範囲の北隣の東向斜面では上神増B古墳群が周知されていた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。周知されていた上、明確な墳丘を確認できた古墳については、調査区を設定して安易な掘削を行うことを避けた。

全調査区で、表土・流土等の直下に礫を含む赤褐色砂質土層や黄色砂層等を確認した。場所による色調や含む礫の量の違いがあるものの、いずれも丘陵を形成する基盤層と判断することができる。

数基の古墳の墳丘・周溝や埋葬施設（多くは横穴式石室）を確認することができた。また、須恵器や土師器といった古墳時代の土器が一部から出土した。これら遺構・遺物の発見は、丘陵東斜面と西に派生する尾根上の双方でみられた。ただし、丘陵東斜面の内の浅く谷状になった部分や尾根の特に痩せた部分においてはみられなかった。また、遺物包含層と判断されるような遺物の出土状況はなかった。

結果

東斜面の浅い谷地形や特に痩せた尾根上を除いて、多くの古墳が存在していることを確認した。したがって、上神増E古墳群・上神増B古墳群とともに、より広い範囲により多くの古墳を含む古墳群であることが確認できた。なお、古墳群の範囲や号墳名の追加・変更についての詳細は、上神増E古墳群・上神増B古墳群の調査報告で記し、それをもって訂正することとする。

(3) №126 地点

位置・立地と現況

本地点は豊岡村敷地字池ノ谷、敷地川流域西丘陵地の一谷部の奥まった場所に位置する。この東に開く谷は西奥でいくつかに分岐するが、その中央に張り出した尾根の北斜面に本地点が立地する。対象範囲の大半は植林地で、大きな地形変容や擾乱を見ることはできなかった。

本地点の東約100mには、銅鐸出土地である西の谷遺跡が位置する。西の谷遺跡と同じ丘陵斜面に立地することから、新たな銅鐸出土地の可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

銅鐸が発見される可能性があることから、トレンチ内を掘り下げる調査方法は効果的ではないと考えた。よって本地点の確認調査は、電磁法探査および金属探知機による金属探査を行い、反応部分に試掘坑を設定して掘り下げによる調査を行った。調査の結果、遺構・遺物の発見はなかった。

結果

本地点対象範囲において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。なお、この確認調査についての詳細は、西の谷遺跡の調査報告で改めて述べることとする。

(4) №126-2 地点

位置・立地と現況

本地点は豊岡村敷地字西ノ谷・三年代に位置し、№126 地点と同じ丘陵斜面のより東の部分に立地する。対象範囲の大半は植林地で、大きな地形改変や攪乱を見ることはできなかった。

先述のとおり、周知されていた西の谷遺跡は本地点に含まれる。

調査方法と確認状況

№126 地点と同様の方法で確認調査を実施した。その結果、1箇所で埋納された銅鐸を発見した。

結果

丘陵斜面の中腹やや下方の1箇所で埋納された銅鐸を発見、銅鐸出土地である西の谷遺跡の存在を確認した。なお、この確認調査についての詳細は、西の谷遺跡の調査報告で改めて述べることとする。

(5) №127 地点

位置・立地と現況

本地点は豊岡村敷地字西ノ谷・池ノ谷・三年代・小池ヶ谷に位置する。尾根上に立地し、その斜面には№126・№126-2 地点が位置する。大半が植林地で、大きな地形改変や攪乱を見ることはできなかつた。

周知の遺跡はなかったが、本節-1(2)で述べたとおり、遺跡が存在する可能性が考えられた。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

全調査区で、表土・流土等の直下に礫を含む黄灰色砂層等を確認した。場所による色調や含む礫の量の違いがあるものの、いずれも丘陵を形成する基盤層と判断することができる。

遺物の出土はなく、調査区内における遺構の発見もなかった。

結果

本地点対象範囲内において、遺跡が存在しているという根拠は得られなかった。



第6図 各地点対象範囲 2

(6) №128 地点

位置・立地と現況

本地点は豊岡村敷地字枳ヶ谷・馬場ヶ谷・寺東・樽ヶ谷および森町一宮字奥ノ谷に位置する。敷地川流域の東側丘陵地で、南にのびる丘陵尾根上およびそこから西の敷地川流域に向かって派生する尾根上に立地する。大半が植林地で、大きな地形改変や攪乱を見ることはできなかった。

対象範囲は周知されていた寺山古墳群の範囲と一部が重なり、範囲内では8基の古墳の存在が分布調査時に示されていた。しかし、現況観察では明確に古墳であると判断できる場所はなかった。

調査方法と確認状況

丘陵尾根上および調査可能な傾斜の斜面部を中心に、トレンチによる調査を行った。

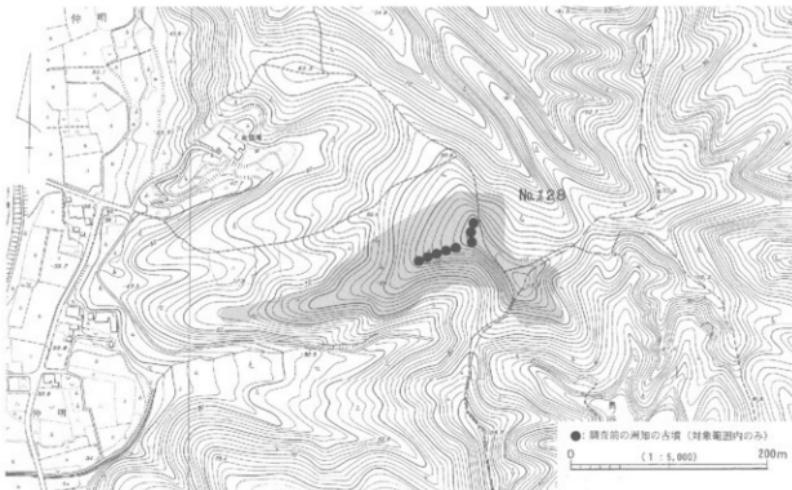
全調査区で、表土・流土等の直下に礫を含む黄灰色砂層等を確認した。場所による色調や含む礫の量の違いがあるものの、いずれも尾根丘陵を形成する基盤層と判断することができる。

古墳の墳丘・周溝等を各所で発見し、古墳数基の存在を確認することができた。これら古墳は、西に派生する尾根の頂上幅が比較的広い部分で発見され、南にのびる丘陵尾根上および西に派生する尾根の特に痩せた部分では発見できなかった。

遺構覆土や表土・流土層の一部からは古墳に伴う遺物が出土した。また、南にのびる丘陵の頂上部の内、対象範囲南部で中世の陶器片を発見した。ただし、遺物包含層と判断されるような遺物の出土状況はなかった。

結果

丘陵尾根上の数箇所において古墳の存在を確認したが、同時に周知されていたものとは異なった古墳分布であることが把握された。また、古墳群とは別に中世の遺跡が存在する可能性を捉えることもできた。この寺山古墳群の範囲や号墳名の追加・変更についての詳細は、寺山古墳群の調査報告で記し、それをもって訂正することとする。



第7図 各地点対象範囲 3

第4節 本調査

1. 本調査の方法と経過

ここでは、主に豊岡地区の本調査全体に関わる事項について触れる。

本調査を実施した対象地点とその範囲は、前節で述べた確認調査の結果に基づいて静岡県教育委員会から示されたものである。なお、本調査を実施した対象地点および対応する遺跡名は、第5表にあげたとおりである。

本調査の実施においては、調査範囲および調査に必要な諸用地（作業員棟・駐車場用地等）が確保できたこと、立木伐採・除去等の調査環境が整うこと、調査を行う体制が整うことといった条件がそろい、要請のあった順に開始することになった。したがって、西から東、東から西へといったような整理された順序で調査を実施することはできなかった。また、No.125地点（上神増B古墳群・上神増E古墳群）では、調査対象範囲をさらに3分割、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期と3回に分け、それぞれ間を置いて調査を実施した。

調査の方法は、第1節の調査体制の中である程度の統一を図った。しかし、詳細においては各調査で異なるため、各遺跡の調査方法と経過については、各遺跡の報告で述べることにする。なお、各本調査の実施期間は、第5表に示したとおりである。



写真3 本調査前の状況 (No.125地点 上神増E古墳群)

第5表 本調査実施期間

遺跡名	地点・期	面積 (m ²)	平成10年度										平成11年度							平成12年度						
			9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
上神増A 古墳群	124	150																								—
上神増B 古墳群	I	400	—																							
	125	II	3,000																							—
	III	970																								—
西の谷遺跡	126-2	160																								—
寺山古墳群	128	1,240																								—

2. 本調査の概要

各遺跡の調査結果の概要は以下のとおりである。基本的には丘陵上の古墳群、丘陵斜面に埋納されたいた銅鐸という2種の遺跡を調査したということができるが、その中でも他の時代の遺構・遺物も発見されている。もちろん、詳細は各遺跡の報告で述べるが、ここでは時代ごとに発見された遺構・遺物を概観する。

縄文時代

上神増E古墳群（No.125地点）では、古墳の周囲や溝から少量の縄文土器片が出土した。ただし、確実に遺構に伴う出土遺物であると言えるものはない。また、同じ古墳群中に落し穴が8基発見された。これら落し穴は、古墳群形成以前の遺構であることが判断でき、縄文時代の遺構である可能性が高いと考える。

寺山古墳群（No.128地点）でも少量の縄文土器片が出土したが、当時の遺構は発見されなかった。

弥生時代

西の谷遺跡（No.126-2地点）では、埋納された1個の銅鐸を発見した。この遺跡は、2個の銅鐸が出土したことから、古くから銅鐸出土地として知られていた。その2個の銅鐸を「敷地1号銅鐸」「敷地2号銅鐸」と称していたことから、今回出土した銅鐸は「敷地3号銅鐸」と称することとした。かつての銅鐸出土は偶然のものであり、出土地点や出土状況（埋納状況）については聞き取り調査によって推測されたものである。一方、今回の敷地3号銅鐸に関しては、出土地点・出土状況を詳細に調査することができ、埋納状況をある程度復元することもできた。本遺跡が正式な埋蔵文化財調査によって銅鐸埋納地として認知できるようになったとともに、弥生時代に各地でみられる銅鐸の埋納、その状況を比較的良好な条件下で調査できた事例として重要な資料になる。

丘陵上の調査では、新平山遺跡（第2節-2参照）のような集落跡が発見される可能性も考えられたが、今回調査したいずれの遺跡でも、そのような遺構・遺物は発見されなかった。第二東名建設に伴って調査した豊岡地区の遺跡の中で、弥生時代の遺跡は西の谷遺跡に限られると考えて支障はない。

古墳時代

この時代の遺構・遺物が一番多く発見された。ただし、それらは全て古墳であり、集落や生産域の発見はなかった。

調査した古墳のうち最も古い時期の古墳は上神増A5号墳（No.124地点）で、5世紀後半の築造と考えられる。この古墳は葺石を施した墳丘直徑約13.5mの円墳である。木棺直葬の埋葬施設をもつが、後に横穴式石室が構築され、木棺直葬の埋葬施設は破壊されていた。副葬品は残っていないが、墳頂部から5世紀後半の須恵器が出土した。6世紀前半頃までの古墳は、他に寺山古墳群（No.128地点）や上神増E古墳群（No.125地点）でも発見された。これらは墳丘直徑10m前後の小規模な円墳である。周辺の古墳群をみると、この時期の古墳として多いのは木棺直葬を埋葬施設とする古墳であるが、寺山古墳群では小型横穴式石室、上神増E古墳群では礫構造とされる埋葬施設も発見された。

横穴系の埋葬施設をもつ6世紀後半以降の古墳は、各古墳群で発見することができた。上神増A古墳群では先述のとおり、5世紀の古墳に新たに構築した横穴式石室を調査した。上神増E古墳群・上神増B古墳群（No.125地点）では、15基の横穴系の埋葬施設をもつ古墳を調査した。多くが墳丘直徑10m

前後の円墳である。6世紀後半頃に築造されたと考えられる古墳は、丘陵尾根上に立地していた。横穴式石室を埋葬施設とする古墳の他に、横穴式木室（木芯粘土室）を埋葬施設とする古墳も発見することができた。7世紀以降に築造されたと考えられる古墳は、丘陵東斜面に各々接近して並ぶように群集して立地していた。全て横穴式石室を埋葬施設としている古墳と考えられるが、盜掘・破壊によって埋葬施設の詳細がわからない古墳も存在した。寺山古墳群では、横穴式石室の古墳が1基発見され、7世紀代の遺物が出土した。

奈良時代

上神増B古墳群・上神増E古墳群では、古墳の築造・追葬が8世紀代まで続いていることを確認した。と同時に、古墳周囲からは土師器の壺や甕を骨蔵器とした8世紀代の墓も発見することができた。古墳の終焉において、重要な調査事例になると考える。

中世以降

上神増E古墳群では鎌倉時代の炭焼窯を2基発見した。さらに、山茶碗等の遺物の出土もあった。寺山古墳群でも中世の陶器片等が出土した。しかし、この時代のものと判断できる遺構の発見はなかった。詳細は寺山古墳群の報告にゆだねるが、この丘陵上に何らかの行為があつたものと考えることはできる。

西の谷遺跡の銅鐸発見、特に銅鐸埋納状態の発掘調査は全国的にも数少ない貴重な事例となる。また、豊岡村には群集墳等の多くの古墳が存在し、調査前より古墳群の存在を予測していたことは確かだが、これほどの範囲の古墳群を調査する機会は決して多くはなく、本地域にとって貴重な調査事例の一つになると考える。



写真4 検出中の墳丘 (No.124 地点 上神増A古墳群)



写真5 実測中の石室 (No.125 地点 上神増E古墳群)

第5節 資料整理

1. 資料整理の体制

本事業では、第1節のとおり現地調査を優先したため、基礎整理は継続的に実施してきたものの、本格的な資料整理・報告書作成の作業はしばらく実施することができなかった。

現地調査・基礎整理を工区・地区ごとに実施してきたこと、現地調査を優先したことから多くの資料整理が必要になってきたこと、その多くの遺跡の資料整理を各現地担当者が同時に実施することが物理的に不可能なことなどから、資料整理および報告書の作成は、現地調査の実施と同様に工区や地区ごとのまとまりの中で、順次遺跡ごとに実施することになった。

豊岡地区の資料整理は、平成12年度末時点で豊岡地区的現地調査が全て終了、森地区も一部を除いて現地調査を終了できたことから、平成13年度から開始した。現在（平成16年3月時点）、豊岡地区的資料整理は豊岡地区・森地区・掛川地区の一部として、袋井整理事務所で実施している。なお、遺物の写真撮影は当研究所写真室、金属製遺物のクリーニングおよび保存処理は当研究所保存処理室での実施を基本としている。

豊岡地区的資料整理体制については、現在も資料整理継続中のために、現地調査の体制のように一括掲載することはできない。よって、各報告書にてそれに関わる資料整理の体制を示すこととする。なお、本書に関わる資料整理の体制は下の第6表のとおりであるが、他にも多くの者が参加している。

第6表 資料整理の体制（平成15年度まで）

		平成13年度	平成14年度	平成15年度
	所長	斎藤 忠	斎藤 忠	斎藤 忠
	副所長	山下 晃	飯田英夫	飯田英夫
	常務理事兼総務部長	桑田徳幸	桑田徳幸	桑田徳幸
総務部 担当	次長			鎌田英巳
	総務課長	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳
	経理専門員	稻葉保幸	稻葉保幸	稻葉保幸
	副主任	鈴木秀幸		
	主事		鈴木秋博	鈴木秋博
	部長	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平
調査研究部	次長	栗野克巳	栗野克巳	栗野克巳
	担当課長	及川 司	中嶋郁夫	中嶋郁夫
	保存処理室長	及川 司	篠原修二	足立順司
	工区主任	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
	調査研究員	加藤理文		
		大谷宏治	大谷宏治	田村隆太郎
		田村隆太郎	田村隆太郎	

2. 資料整理の方法と経過

例言2にも示したが、現地調査・資料整理とも工区・地区ごとに実施していくことから、報告書も地区ごとに作成していくことになった。また各地区の最初には、工区・地区単位で実施してきた調査の経過や概要等を地区ごとにまとめたもの（総論）を掲載することになった。

以上により、豊岡村における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書は、本書を「豊岡村-1」として、総論と寺山古墳群の報告を掲載し、続く「豊岡村-2」以降の報告書に残る遺跡（西の谷遺跡、上神増B古墳群、上神増E古墳群、上神増A古墳群）の調査報告を掲載することとした。

資料整理・報告書作成の前に、各現地調査の結果に基づいて必要な周知の埋蔵文化財包蔵地登録内容の変更が行われた。以後、変更された遺跡名・遺跡範囲・古墳番号等に基づいて報告することとする。

変更内容は第7表のとおりであるが、詳細は各遺跡の報告中でも触ることにする。豊岡地区では新たな埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の追加はなかったが、各遺跡の周知の範囲については、調査成果を受けて変更することとなった。また、古墳群では古墳分布・古墳番号（号墳名）等の変更を行った。

第7表 周知内容変更一覧表

遺跡	地点	周知内容の変更
上神増A古墳群	No 124 地点	範囲の変更（拡大） 5号墳位置の修正
上神増B古墳群	No 125 地点	範囲の変更（拡大） 新規古墳の追加
上神増E古墳群	No 125 地点	範囲の変更（拡大） 新規古墳の追加 古墳番号の変更
西の谷遺跡	No 126-2 地点	範囲の変更
寺山古墳群	No 128 地点	範囲の変更（拡大） 古墳分布の修正

上神増B古墳群・上神増E古墳群の新旧古墳番号対応

古墳群	古墳番号	変更後		調査歴
		古墳番号	古墳群	
上神増B古墳群	1	1		第二東名に伴う調査対象外
	2	2		
	3	3		
	4	4		
	5	7		
	6	10		
	7	18		
	8	19		
	9	4		
	10	2		
上神増E古墳群	11	6		No 125 地点Ⅱ期
	12	13		
	13	17		
	14	12		
	15	14		
	16	9		
	17	5		
	18	7		
	19	6		
	20	8		
	21	11		
	22	9		
	23	1		
	24	3		
上神増B古墳群				No 125 地点Ⅰ期
上神増E古墳群				

*変更前の古墳番号に下線の付いた古墳は、本事業開始以前から周知されていた古墳である。他は調査で新たに発見し、番号を付した古墳である。

この周知内容の変更は、静岡県教育委員会および豊岡村教育委員会によって行われたが、現地調査終了時から周知内容の変更が行われるまでに多少の時間が経過した。そのため、変更以前に調査成果の一部を公表した場合が生じたが、その場合は当然、変更前の遺跡内容や古墳番号で公表している。詳細は各遺跡の報告でも触れるが、これまで公表しているものと本書および各遺跡の報告書とで相違がある場合は、本書および各遺跡の報告書をもって訂正することとする。なお、上神増B・E古墳群について、本書刊行以前に公表したものは全て変更前の番号を使用している。

資料整理の作業についてであるが、前述した資料整理の体制同様、現在資料整理継続中のために豊岡地区について一括掲載することはできない。したがって、各遺跡に関わる資料整理の方法と経過は各遺跡の報告中に記すこととする。

寺山古墳群の資料整理および報告書作成作業については次章 第2節で記している。本章（総論）に関しては、調査日報等の調査資料（書類）の整理、挿図表の作成、報告の執筆・編集といった資料整理および報告書作成作業を、平成14年4月～6月および平成15年1月～4月、平成15年11月～平成16年3月に断続的に実施した。

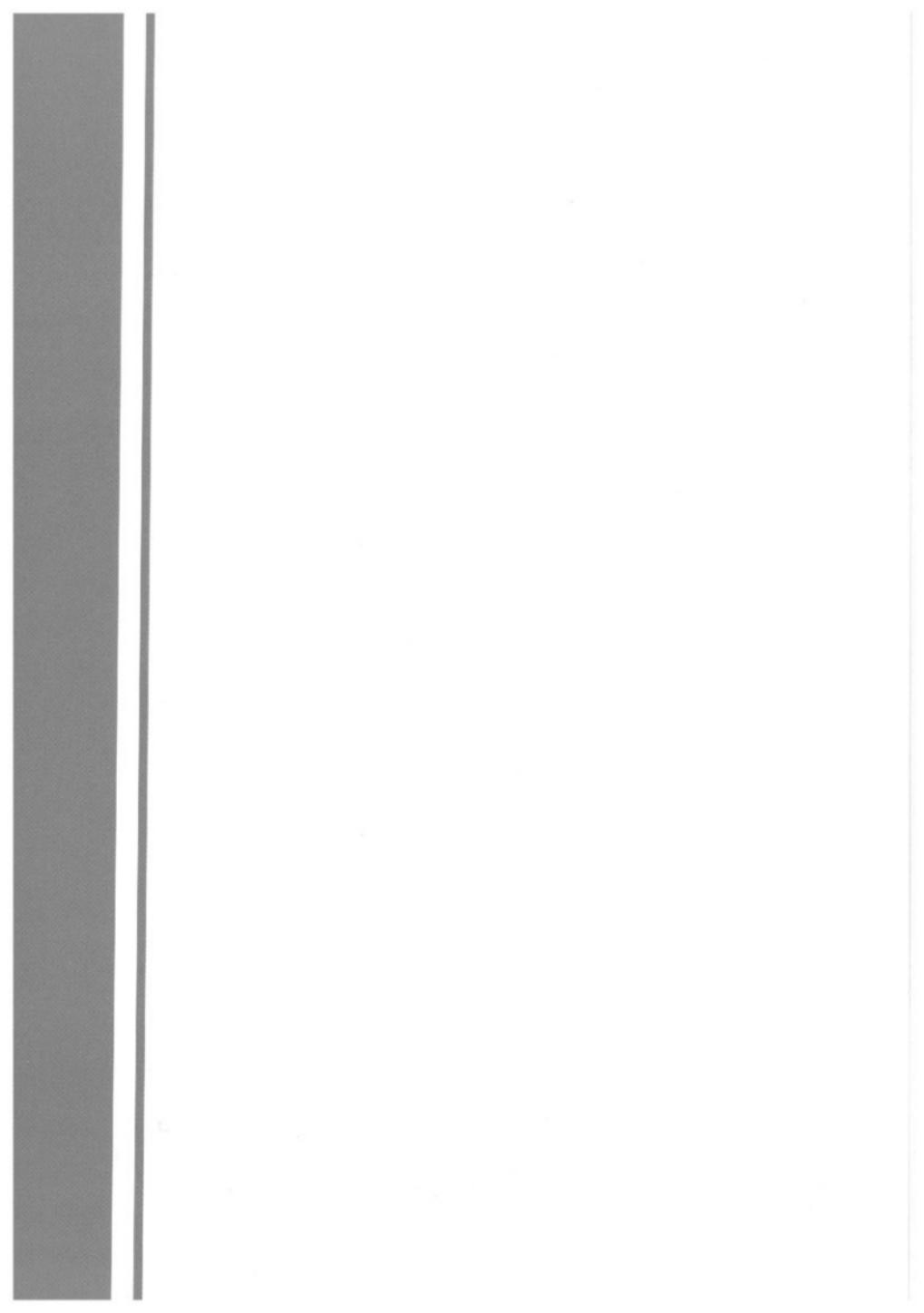
参考文献

- 加藤芳潤 1992 「豊岡村新平山遺跡とその周辺地域の地質学的考察」 豊岡村教育委員会
静岡県教育委員会 1981 「静岡県の中世城館跡」
静岡県教育委員会 1989 「静岡県の窯業遺跡 本文編」
静岡県教育委員会 1989 「静岡県文化財地図Ⅱ 姫津市以西」
静岡県教育委員会 2001 「静岡県の前方後円墳－資料編－」
豊岡村史編さん委員会 1993 「豊岡村史」資料編三 考古・民俗 豊岡村
豊岡村史編さん委員会 1995 「豊岡村史」通史編 豊岡村
豊岡村教育委員会 1983 「押越・社山古墳群調査報告書」
豊岡村教育委員会 1993 「谷田ヶ谷11号墳発掘調査報告書」
豊岡村教育委員会 1993 「新平山遺跡(Ⅱ)」
豊岡村教育委員会 1996 「大手内B古墳群」
豊岡村教育委員会 2000 「大手内古墳群」
豊岡村教育委員会 2002 「大秦地上の段遺跡」
袋井市教育委員会 1994 「山田申波遺跡Ⅰ・Ⅱ」
森下草司・鈴木一有・鈴木敏則 2000 「磐田郡豊岡村神田古墳－中国鏡出土の後期古墳－」
『浜松市博物館報』第13号 浜松市博物館
森町教育委員会 1991 「涼松・朝日平・西咲水戸ヶ谷東岬遺跡」

本章執筆等にあたって、豊岡村教育委員会 涼美 寛氏には貴重な御助言とともに多くの御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

第2章 寺山古墳群

第二東名No.128 地点



第1節 位置と環境

1. 位置と地理的環境

寺山古墳群は静岡県磐田郡豊岡村の西南部、天竜浜名湖鉄道敷地駅の西側約600mのところに位置し、現在の行政区画では豊岡村敷地地内（調査区1～4区）および周智郡森町一宮地内（調査区5区）にある（巻頭図版1～3、図版1・2）。

当古墳群は敷地川の左岸（東側）に位置し、天竜方面から敷地川に沿って南に伸延する丘陵上に立地する。古墳群はこの丘陵から竜雲庵を挟み込むように西に向かって伸びる「V」字形の支脈上、標高65～120m付近に立地し、各古墳は尾根の稜線部分に築造されている。

寺山古墳群の眼下には、敷地川に面した平地部が広がり、現在は肥沃な水田地帯として利用されている。この平地部の標高は35m前後であり、当古墳群との標高差は約30m～70mである。

古墳群の所在する丘陵の調査前の状況は、1区付近は竹林となり、2～5区は檜が植林されており、開発など人工的にあまり手を加えられていない土地利用状況であった。

2. 歴史的環境と調査歴

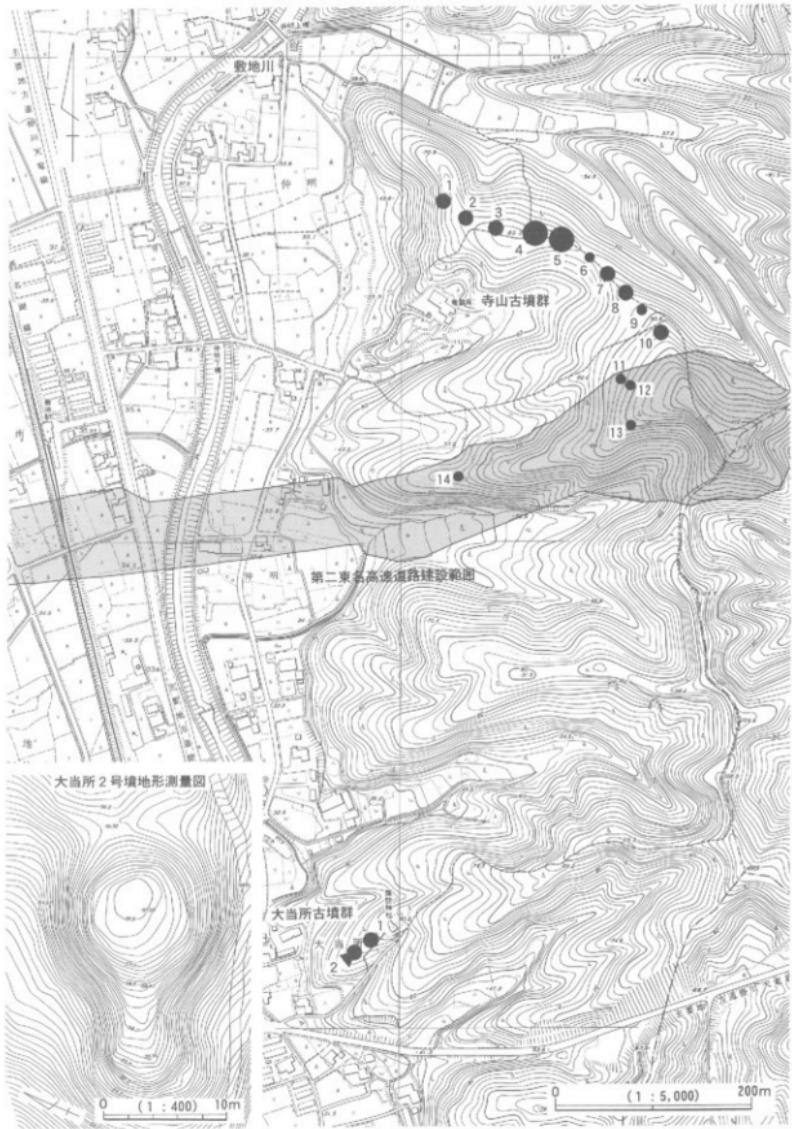
（1）歴史的環境

寺山古墳群周辺では、旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代の遺跡は新平山遺跡などがあり、遺構は明確ではないものの縄文土器や石器が少數ながらも出土している。現状ではこの地域で調査された遺跡としては弥生時代のものが最も古い。弥生時代の遺跡としては、敷地川の右岸に西の谷遺跡、藏平遺跡が所在する（第3図参照）。第二東名建設に伴い発掘調査が行われた西の谷遺跡では、今回出土した敷地3号銅鐸をはじめ3点の銅鐸が出土している。また、西の谷遺跡の北側には鳥形土器が出土した藏平遺跡が広がる。

古墳時代前期の遺跡は確認されていないが、古墳時代中・後期になると、当古墳群の北西約1.5kmのところに、新平山工業団地を造成するに当たって発掘調査が実施された新平山A・B古墳群が、天竜川に沿った通称社山の尾根上およびその斜面には、上神増A・E古墳群をはじめとする古墳群が確認される。このうちの幾つかの古墳群に対して発掘調査が実施された結果、横穴式石室を埋葬施設とする円墳が大部分で、一部が竪穴系埋葬施設をもつ古墳であることが確認されている。天竜川左岸地域では、これらの古墳群を併せると総数100基以上の古墳が築造され、周溝が共有されるなど非常に密集して古墳が築造されたことがわかる。

一方、寺山古墳群が立地する丘陵上には、分布調査時に寺山古墳群（18基）と、その500m南に位置する大当所古墳群と、その南に700m、県道40号線で分断された尾根上、豊岡村と袋井市の境に龍源寺上西古墳群や、この丘陵の先端部に前方後円墳の可能性も指摘された1号墳（円墳2基である可能性が高い）を含む10基で構成される八王子神社上古墳群が確認されるだけであり、天竜川左岸の通称社山丘陵と比較すると古墳群の分布は散在的である。

このうち大当所古墳群は、円墳（1号墳）と前方後円墳（2号墳）の2基で構成される古墳時代中期と想定される古墳群である。2号墳は静岡県教育委員会が実施した静岡県内前方後円墳発掘調査等事業



第8図 寺山古墳群周辺の古墳分布図

にかかる調査で2000（平成12）年に墳丘の現況測量調査が実施され、後円部を東に向ける全長約21mの前方後円墳であることが判明した（静岡県教委編2001）。

また、寺山古墳群と関連性が考えられる古墳群として五反田遺跡をあげることができる。当古墳群は新平山古墳群と一緒に北側の尾根上に位置する古墳群である。報告書が未刊のため詳細は不明であるが、このうちの1基の古墳が箱形石棺を内蔵する古墳であったという（註1）。

奈良時代以降の遺跡は今のところほとんど確認されておらず、当古墳群の北約300mの丘陵上に仲間古城遺跡が分布する程度である。

（2）調査歴

昭和62（1987）年3月に豊岡村教育委員会により村内の遺跡分布調査の一環として寺山古墳群においても古墳の分布調査が実施され、18基の古墳（10～20m程度の円墳）の存在が想定され、須恵器など若干の遺物が採集された。本格的な発掘調査は実施されておらず、今回の第二東名建設に伴う発掘調査が第一次調査となる。

寺山古墳群は、分布調査では18基と想定されたが、今回の発掘調査の結果、調査区外の10基（1～10号墳）を除くと、11～18号墳とされた箇所には4基が残存するだけであった。したがって、未調査の10基を含めて14基で構成される群集墳であることが判明した。分布調査の成果によると、1～10号墳は10～25m前後の円墳で構成されており、埋葬施設としては1・2号墳が横穴式石室であることが確認されている。これ以外は、おそらく竪穴式埋葬施設を有する古墳である蓋然性が高い。分布調査時に採集された遺物は須恵器片のみであり、時期的には古墳時代後期に位置づけられる可能性が高い。

（註1）向坂灝二、柴田 稔潤氏のご教示による。

第8表 寺山古墳群・大当所古墳群の概要

古墳名	墳形・規模	埋葬施設	遺物	調査歴等	その他
寺山1	円(15 m)	横穴式石室		未調査 (1987年分布調査)	墳形・規模・埋葬施設とともに分布調査時の内容を記載。
寺山2	円(15 m)	横穴式石室	須恵器		
寺山3	円(15 m)		須恵器		
寺山4	円(25 m)				
寺山5	円(25 m)				
寺山6	円(10 m)				
寺山7	円(15 m)				
寺山8	円(15 m)				
寺山9	円(10 m)				
寺山10	円(15 m)				
寺山11	円(8.2 m)	木棺直葬	須恵器・土師器	1999年1～4月 発掘調査	(本書)
寺山12	円(7.5 m)	木棺直葬	鉄劍・鉄製刀子・土師器		
寺山13	円(7.8 m)	横穴式石室	須恵器・土師器		
寺山14	円(10.5 m)	小竪穴式石室 木棺直葬	鉄劍・鉄製劍吊金具・鉄鏡・鉄鉢・鉄製石突・土師器		
大当所1	円(15 m前後)			未調査	
大当所2	前方後円(21 m)			2000年墳丘現況測量	(静岡県教委編2001)

第2節 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

確認調査は、1987（昭和62）年の豊岡村教育委員会による分布調査で確認された寺山古墳群18基のうち、11～18号墳とされた古墳8基が第二東名高速道路の本線工事で破壊されることから、この地点の丘陵頂部を中心にトレント調査を実施した（第1章第3節参照）。

確認調査の結果、分布調査で古墳に認定されていた地点すべてにおいて古墳は存在しなかったことから、日本道路公団静岡建設局との協議により、遺構・遺物が出土した古墳想定箇所4地点および陶器（古瀬戸）が出土し山城の可能性が想定された1箇所の計5箇所を、西から1～5区（第9図）として本調査を実施することとした。

発掘調査は調査区が細尾根に位置し、尾根の南側が崩落して急斜面となっており、重機の進入が困難であることから、表土除去から人力で行い、各調査区ともに十字に土層観察用の土層帯を設けて発掘を進めた。必要な段階で基準杭の設置、遺構の図化、写真撮影・空中写真撮影、地形測量図作成作業等を実施した。基準杭の設置は株式会社フジヤマに委託した。基準杭は国土座標に準拠し10m毎に設定し、南北にアルファベット、東西に数字で示し、グリッドには国土座標の数値を記載した（第9図）。また、5区の測量における標高は寺山古墳群内の丘陵頂部に位置した三角点（標高115.6m）を利用した。写真撮影は6×7カメラ（白黒ネガ）、35mmカメラ（リバーサル、カラーネガ）を用いて行い、空中写真撮影・空中写真測量は、株式会社フジヤマに委託し、ラジコンヘリコプターにより6×4.5カメラ（リバーサル、白黒ネガ）を用いて実施した。5区の地形測量はトータルステーションを用いて実施した。各古墳の遺構図化は一部を株式会社フジヤマに委託し、それ以外は研究所職員が実測した。

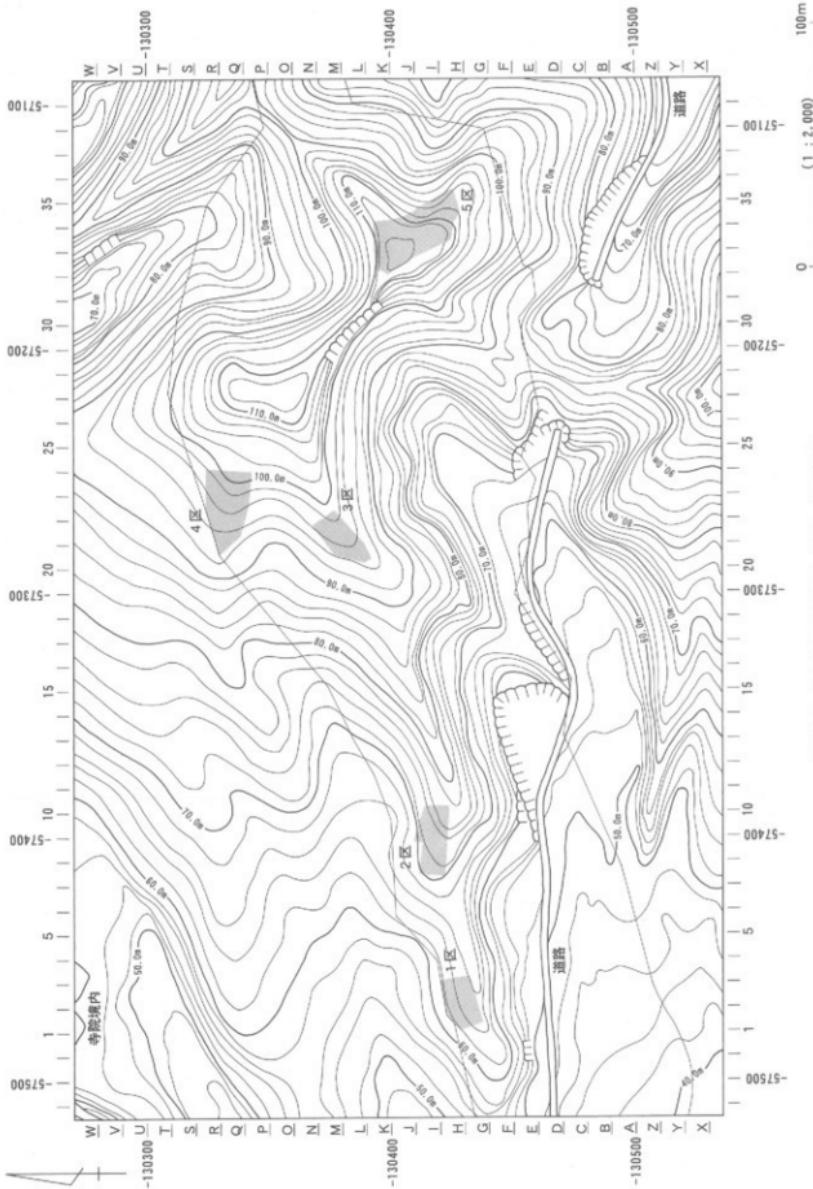
2. 発掘調査の経過

確認調査は平成10年6月18日から7月21日まで実施し、この結果4箇所において6基の古墳と、森町と豊岡村の境界に位置する尾根上に山城（砦あるいは狼煙台）が存在する可能性が想定された。

この確認調査の成果を受けて、静岡県教育委員会の指導のもと、日本道路公団静岡建設局、豊岡村教育委員会、森町教育委員会、地元自治会の協力を得て、平成11年1月6日から本調査を実施した。発掘調査はまず調査区への進入路の造成から開始し、その作業が終了後1・2区の表土除去および周溝埋土の掘削を開始した。

1区では当初板状の石材が確認できたことから天井が遺存する横穴式石室と考えたが、調査が進行するにつれ横穴式石室ではなく、いわゆる「（石棺系）小竪穴式石室」（第1主体部）であることが判明した。この埋葬施設内の調査終了後、盛土有無および盛土と埋葬施設の関係を調査する目的で第1主体部の主軸を基準に試掘溝を十文字に設定して調査を進めると、第1主体部より0.7m程東から鉄刀が出土した。この遺物は第1主体部床面より20cm下部で出土したため、その周囲の精査を再度実施したことから、鉄刀の下位にU字形のくぼみを確認し、この段階で第1主体部に並行する木棺直葬（第2主体部）が存在することが判明した。第2主体部を精査すると、鉄刀は切先より15cm程の部位で破断しており、なおかつ北側の破片の方が約10～15cmほど高い位置から出土した。この比高差は鉄鉢と石突でも確認できること、さらにこの比高差は第1主体部の床面にも確認できることを考慮すると、14号墳のくぼ

第9図 寺山古墳群調査区・グリッド配置図



中央を丘陵の伸延する方向に沿って（東西方向に）地滑りが生起したことが判明した。この痕跡を見学された寒川 旭先生は、断定はできなないが地震による地滑りの可能性が高いという見解を示された。ただし、地滑りの生起した時期に関しては古墳時代以降としか言えない。

2区では当初2基の古墳の存在を想定し、表土除去を順次始めた。発掘を慎重に進めたものの埋葬施設、周溝等の痕跡は確認できなかった。このため試掘溝を設定し再度確認を実施したところ、墳丘の盛土と考えた黒色土と黄褐色土の互層は改植時の堆積層および地山（自然堆積）であることが判明した。この段階で試掘溝の土層を図化し、写真撮影を行い、調査を終了した。

1・2区の表土除去がほぼ終了した2月3日から3・4区の表土除去を開始した。

3区では横穴式石室を埋葬施設とする古墳を1基検出した。石室内の精査を進めると、板石や円礫を利用した床面、ならびに羨道入口部分で集石を検出した。この石材には大型の角礫や天井石に用いられるような大型の板石が用いられていたことから本来の床面と閉塞石ではなく石室が再利用された時の床面と集石であることが判明した。これらの石材を図化、写真撮影終了後、順次土砂を除去すると、小型の板状石材を用いた築造当初の床面が現われた。このあと石室の図化、写真撮影を実施した。

4区では想定どおり2基の古墳を確認し、まず両者の周溝を掘削した。この段階で11号墳の周溝南側より土師器4個体（76～79）が出土し、12号墳の周溝北西側より土師器壺の小片などが出土した。周溝の掘削を終了した段階で、11・12号墳の埋葬施設の精査を開始し、木棺直葬の主体部をそれぞれの古墳中央部にて確認した。埋葬施設の精査を進めると12号墳の主体部より鉄剣（86）、刀子（87）が出土した。

遺物取り上げ 12・14号墳の埋葬施設から出土した遺物の図化を終了した3月24日に鉄製品の取り上げを実施した。

空中写真撮影・空中写真測量 1～4区の埋



写真6 表土除去



写真7 遺構精査



写真8 主体部精査



写真9 遺構測量

葬施設内の調査が終了した段階で、3月25・29日に株式会社フジヤマに委託し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影および空中写真測量を実施した。補測が終了した段階で、11～14号墳の埴丘解体作業を実施するとともに5区の表土除去を開始した。11～14号墳すべて盛土はすでに流出していたことが判明した。

5区 表土除去終了後、丘陵頂部を中心として遺構の精査を実施したが、遺構は確認できなかった。

そして、平成11年4月30日に5区の測量調査補足を実施し、プレハブの撤収を行い、現地調査を終了した。

3. 資料整理と報告書作成

資料整理作業は平成13年8月から9月まで実施し、保存処理作業は平成14年4月から12月まで実施した。報告書作成作業および出土文化財収納作業を平成14年4月から5月と平成15年11月から平成16年3月まで実施した。

資料整理作業 当研究所森現地事務所にて出土器の洗浄・注記・接合・復元、遺構図の修正、遺構図・写真等の台帳作成を実施した。

保存処理作業 当研究所清水整理事務所で保存処理室において、金属製品の保存処理および鉄鉢の柄に使用された木材の樹種同定の分析を実施した。

報告書作成作業 当研究所森現地事務所にて出土遺物の図化作業、遺構図・遺物図の編集・トレース作業、遺物の写真撮影・編集作業、報告の執筆・編集を実施した。遺物の写真撮影は、4×5カメラ（リバーサル・白黒ネガ）、6×7カメラ（リバーサル・白黒ネガ）、35mmカメラ（リバーサル）を用いて当研究所本部写真室にて撮影した。

最終的に平成16年3月31日に当報告書を刊行し、寺山古墳群発掘調査業務を終了した。



写真 10 空中写真撮影



写真 11 遺物取り上げ



写真 12 基礎整理



写真 13 トレース

第3節 調査の成果

1. 概要

今回の発掘調査では、4基の古墳（11～14号墳）の調査を実施した。4基ともに不整形な円墳であり、直径7～10m規模の小型古墳である（図版3）。

1区では、2基の埋葬施設をもつ14号墳を確認した。第1主体部は東日本では類例の少ない、真上から見ると竪穴式石室の石積みに見える形態を示すいわゆる「（石棺系）小竪穴式石室」である。第2主体部は割竹形木棺を墓壙内にそのまま埋置した埋葬施設である。主な遺物としては、墳丘や周溝より土師器高杯、深鉢、杯が出土し、第2主体部には鉄劍、鉄鐵、鉄鉢（鉄石突）が副葬されていた。これらの遺物から14号墳は5世紀後半～6世紀前半に築造されたことが判明した。

3区では、横穴式石室を埋葬施設として採用した13号墳を確認した。この横穴式石室は奥壁と立柱石に角礫を、側壁には円礫を用いた擬似両袖式の石室である。築造後に追葬以外の再利用が行われた可能性が高い。主な出土遺物は、須恵器、土師器があり、7世紀後半に位置づけることができる。この他に3区からは繩文土器、砥石、銅鏡「寛永通寶」が出土した。

4区では木棺を直葬する2基の古墳（11・12号墳）を確認した。埋葬施設はともに箱形木棺を直接墓壙に埋置したものである。11号墳の周溝南側では、なんらかの古墳祭祀に使用されたと考える土師器碗4点が四角形に据え置かれた状態で出土した。12号墳の埋葬施設内からは、鉄劍、鉄製刀子が出土した。この他に表土あるいは周溝から土師器や須恵器などが出土しており、これらの遺物から11、12号墳とともに5世紀末～6世紀前半に築造されたことが判明した。

2・5区では遺構は確認できなかったが、2区からは須恵器、灰釉陶器、5区からは須恵器、陶器（古瀬戸）、鉄製品が出土した。

第9表 寺山11～14号墳の概要

古墳名	標高(m)	墳形	規模(m)	埋葬施設	規模(m)	主軸方位	副葬品	埋葬施設外	その他の遺物
11号墳	93.8～95.2	円	8.2	箱形木棺 直葬	1.8×0.56	N-65°-E	なし	土師器碗4点、 把手付碗1点、高 杯1点、須恵器 杯身1点・蓋片 1点・平腹1点	
12号墳	97.0～98.6	円	7.5×7.1	箱形木棺 直葬	墓擴3.0× 0.75	N-105°-E	鉄劍1振、鉄 刀子1点	土師器甕2点・ 高杯1点	
13号墳	96.5～ 98.0	円	復元7.8× 6.2	横穴式石室	3.0×0.75	N-15°-W	(石室内)土師 器盤1点、 (裏込め)須恵 器返蓋2点、 杯身1点	須恵器長頸壺 1点、土師器 杯1点	砥石1点、 銅鏡「寛永通 寶」1点、 繩文土器1点
14号墳	64.3～ 65.8	円	10.5× 復元8.0	小竪穴式 石室	復元1.95× (0.3～0.5)	N-4°-W	なし	土師器高杯5 点、土師器小 型深鉢1点、 土師器小型鉢 1点	
				割竹形 木棺直葬	復元2.65× (0.6～0.8)	N-10°-W	鉄劍1振、鉄 劍柄金具1 点、鉄鐵38 本、鉄鉢1点、 鉄石突1点		

2. 1区（14号墳）の調査成果

（1）墳丘

①立地・調査前状況

寺山14号墳は標高64.3～65.8m前後に立地する古墳である。今回調査した寺山古墳群中の4基の中では最も標高の低い位置に立地する。敷地川（西）に向かって舌状にのびる小丘陵の先端部に位置し、古墳からは敷地川が中央を流れる低地部を見渡すことができる。現在の水田面（標高約35～40m）からの比高差は約25～30mをはかる。

調査前の地形観察では明瞭な瘤状の高まりが確認でき、古墳であるとすれば墳丘が流出しているものの比較的旧状を保持しているとの印象であった。また、調査以前は竹が繁茂し竹林となっていることから、墳丘および埋葬施設はこの竹根の伸長による破壊が非常に進行している状態が想定できた。

②墳丘・周溝（第11図、図版4-1・2、8-7・8）

周溝は、東側と西側に尾根を切断する形で南北方向に掘削されたことが判明したが、北側には周溝は確認できず、地山を削り出して周溝に替えている。周溝の規模は東側で幅約3.0m、深さ0.5m、西側で幅約2.1m、深さ0.2mをはかる。

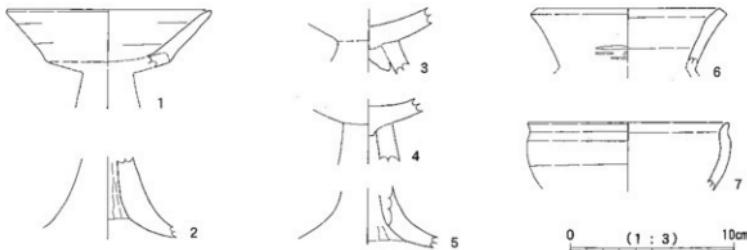
墳丘は、土砂崩れのため南側の崩落が進行している。また、墳丘断ち割り調査の結果、盛土は既に流出していることが判明した。築造当初は、小堅穴式石室を完全に覆うだけの高さが確保されていたと仮定すると、最低0.8m以上、標高66.6m付近まで盛土が構築されていた可能性が高い。

周溝をもとにして墳形・墳丘規模を観察すると、墳形は不整形な円（楕円形）墳であり、東西は周溝内側で約10.5mをはかる。南北規模は現状で6.1mをはかるが、墳丘東西の円弧を基に復元すると8m前後と推測できる。周溝底面の標高は東・西ともに約64.6mであり、一方墳丘中央部の標高は約65.8mであることから、墳丘の見かけの高さは現状で約1.2mである。

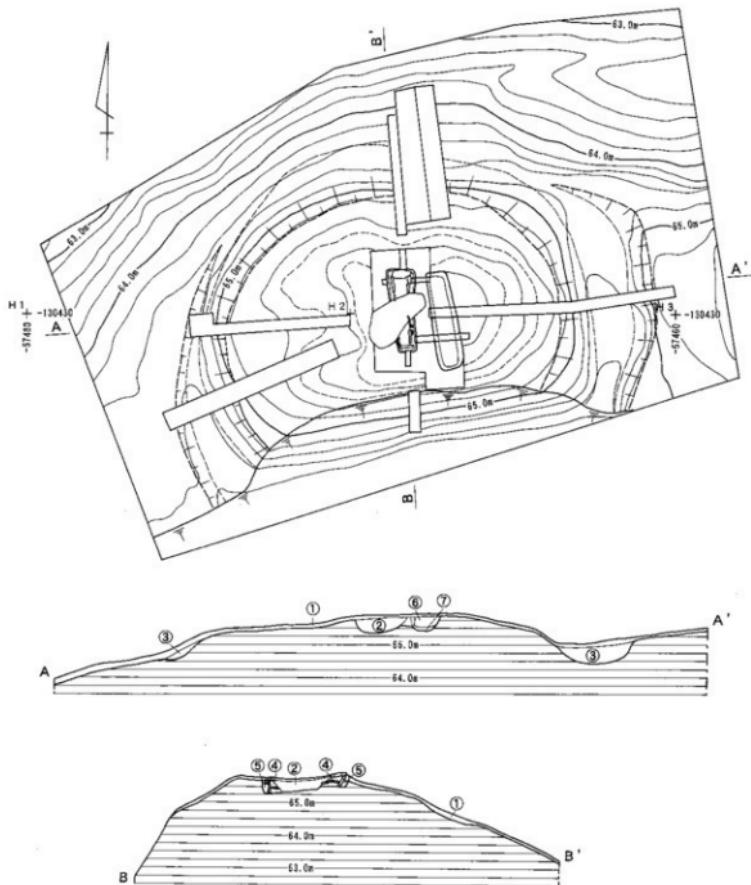
なお、葺石・埴輪等の外表施設は構築されていない。外表遺物は表土中より土師器片が数点出土しており、墳丘上での祭祀に伴う遺物であった可能性が高い。

③墳丘出土遺物（第10図、図版24-2）

墳丘から出土した遺物には、土師器小破片が20数片出土したが、高杯5個体（1～5）、小型深鉢の



第10図 寺山14号墳表土出土遺物実測図



- ①褐色細砂 10YR4/4 ……表土
- ②にぶい黄褐色細砂 10YR4/3 ……擾乱坑埋土
- ③にぶい黄褐色細砂 10YR4/3 ……周溝覆土
- ④にぶい黄褐色～暗灰黃色細砂 10YR5/3～2.5Y4/2 ……第1主体部流入土
- ⑤黄褐色細砂 2.5YS/3 ……第1主体部裏込め
- ⑥にぶい黄褐色細砂 10YR4/3 ……第2主体部埋土
- ⑦にぶい黄褐色細砂 10YR5/3 ……第2主体部埋土

0 (1 : 150) 5 m

第11図 寺山14号墳地形測量図・土層図

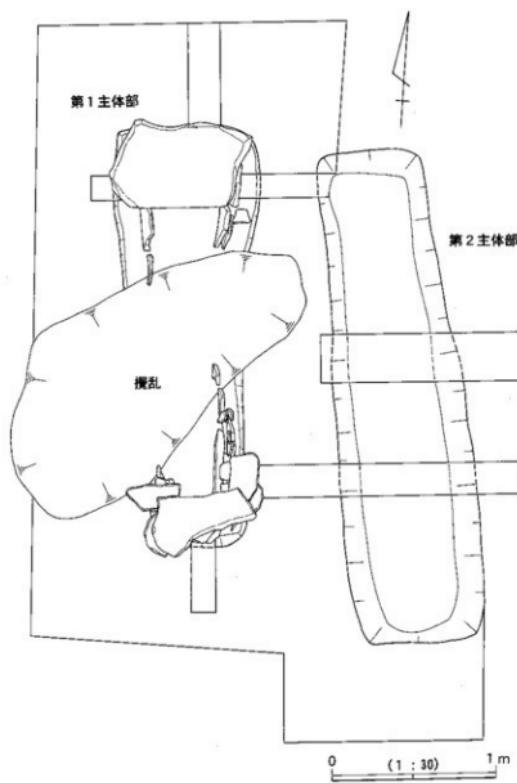
可能性の高い口縁部破片 1 点（6）、椀 1 点（7）を確認できる。なお、須恵器は全く出土していない。1～5 は土師器高杯片である。1 の杯部の形態は杯底部と口縁部との境界の稜線が明瞭であり、口縁部は高く、大きく外方に向い直線的に広がる形態を呈する。3・4 は脚部から杯底部の破片、2・5 は脚裾部破片で、3 は基部から「八」字形に垂下し、2・4 は「八」字形に垂下したあと、脚端部付近でやや外方に向かって屈曲する形態である。脚部はすべて中空である。6 は土師器深鉢の可能性が高い口縁部である。口縁部は「く」の字形に屈曲したあと、直線的に外方に向かって広がる。口縁端部には平坦面が形成される。7 は球胴形の椀である。胴部が深く丸底球胴形を呈し、短く「く」の字形に屈曲する口縁部を有する。

（2）埋葬施設（第 12～17 図、図版 5～9）

埋葬施設は墳丘のほぼ中央で第 1 主体部を、その東約 0.5 m のところで第 1 主体部に平行する第 2 主体部を確認した。第 1 主体部はいわゆる「小堅穴式石室」、第 2 主体部は木棺直葬である。

なお、第 1 主体部検出時に北小口側と南小口側の天井石および床石の比高差が約 0.2 m をはかり、從来頭側が高く足側が低かったとしてもこの高低差は大きいことから地滑りにより段差が発生した可能性を想定した。これを肯定するかのように、第 2 主体部から鐵劍が破断され約 0.1 m の段差をもって出土した。また、鐵鎌と石突の出土した標高にも約 0.10 m の高低差が確認できる。さらに、鐵劍は切先側破片と柄側破片の間に幅約 0.15 m、高さ 0.10 m の間隔が存在する。これらを考慮すると、古墳築造後に墳丘を南北に分断する形で墳丘のほぼ中央に、東西方向に地滑りが発生し、北側が約 0.1 m 高く、0.15 m の亀裂（段差）が存在していることが判明した。

したがって、まず現状での数値を記述し、次に地滑りにより生起したずれを修正し、埋葬施設の規模は築造当初に復元した数値を記入する。



第 12 図 寺山 14 号墳第 1・2 主体部配置図

①第1主体部（第12～15図、図版5・6・9）

墳頂部の精査時当初は、墳頂部ほぼ中央に周囲より柔らかい部分があり、また天井石が露出していたことから横穴式石室を想定して掘り進めた。この段階で「小豎穴式石室」の輪郭が出現し、主体部が横穴式石室ではなく、いわゆる「小豎穴式石室」であることが判明した。主軸方位は真北を基準とし、N-4°-Wをとり、ほぼ真北を向く。

また、墳頂部の柔らかかった部分を当初掘方と想定して発掘を進めたが、この部分は攪乱および竹根により軟質化したことが判明した。この結果、この部分に十字に土層帯を設定して発掘調査を進行したため、構築段階の一部（墳丘と掘方の構築状況など）が不明となった。

第1主体部は墳丘のほぼ中央で確認した、「（石棺系）小豎穴式石室」あるいは「箱形石棺」と仮称（註2）される構造である。埋葬施設のほぼ中央には主軸に約45°斜交する攪乱坑があり、主体部は大きく破壊されていた。

1 墓 墳（第14図、図版9）

旧表土である黒色土を掘り込んでいる。墓塚は北側が幅の広い長台形を呈し、その規模は現状で全長約2.6m、北側小口幅約0.9m、南側小口幅約0.5mであり、後述する基底石よりも一回り大型である。築造当初の規模は全長約2.4mに修正できる。

また、平積みされた石材は地山の黒色土（標高65.4～65.5m付近）の上に据えられる。墳丘東側黒色土上面（表土上面）は標高約65.7mまで存在し、石材が据えられている黒色土上面と0.2～0.3mの比高差があることを考慮すると、墓塚は標高65.4～65.5m付近に平坦面（段）を設けて、もう一段掘削した二段墓塚であった蓋然性が高い。

2 「小豎穴式石室」（第12～15図、図版5・6）

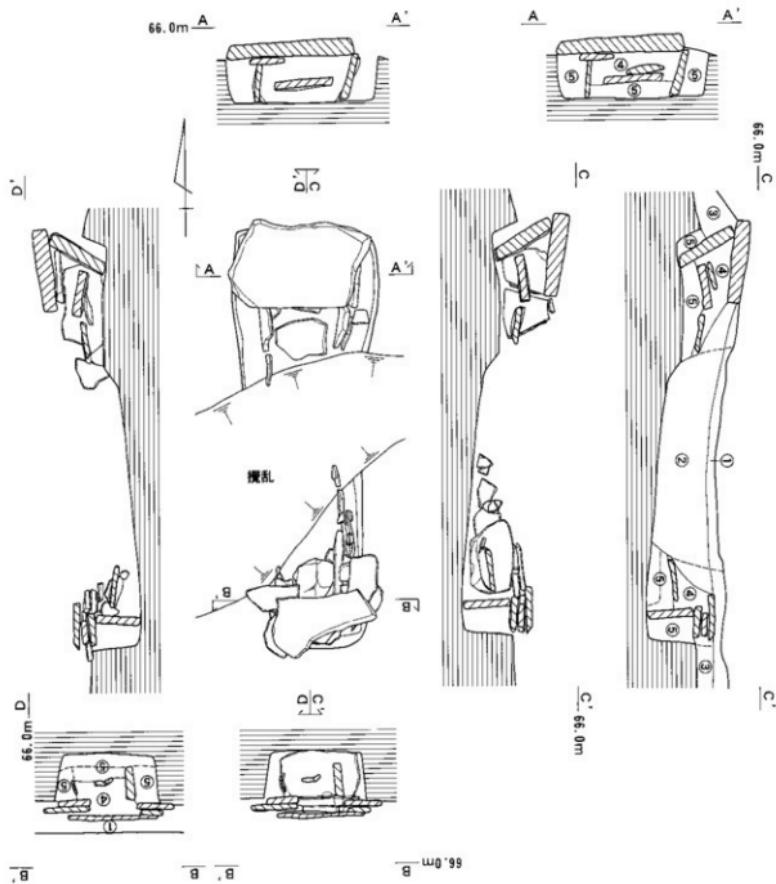
小豎穴式石室は、中央部が盜掘により大きく攪乱され、南北両小口部分が遺存するのみである。真上からみた場合、天井石直下の平積みされた板状の石材があたかも豎穴式石室の控え積みに類似することからこの名前がある。この構造は、南側小口部分を観察すると、まず側壁（長手、長側壁）・小口（短側壁）ともに板石を立位で据え、長台形に石囲いを作る。つづいて、この上に板石を2枚ずつ平積みし、天井石はこの上に水平に架構されている。

以下では各部位の観察を行う。

天井石 天井石は両小口側各1枚のみ残存している。南小口部分の天井石の上には破碎された板石が散乱していたが、築造当初より天井石の上に載せられていたのか、あるいは盜掘の際に石室を破壊した土砂に含まれていたのか不明である。したがって、天井石上に石材が積載された状況は確認できない。北側の天井石は全長（南北）0.51m、幅（東西）0.54m、厚さ0.10mをはかり、南側は全長（南北）0.36m、幅（東西）0.64m、厚さ0.04mをはかる。南側に向かうにしたがい、石材は基底石の形状に合わせて小型のものが用いられている。

なお、長野県下で多数確認されている合掌形石室は横口部があったことが想定されるが、この第1主体部では南北両小口ともに天井石が水平に架構されていることから判断して、横口部は存在しないことは明らかである。

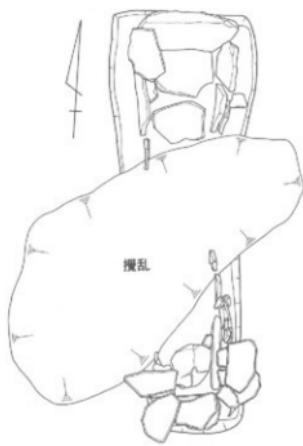
床 石 棺内底部で床石と推測する板状の石材を北側で2枚、南側で1枚確認した。使用された石材は側壁の平積みされた石材と同様、厚さ5cm程度の小型の板石を使用している。床面の高さは北側で標高65.2m、南側で65.0mであり、現状で高低差0.2mをはかるが、南側の地滑りによる沈下を勘案し



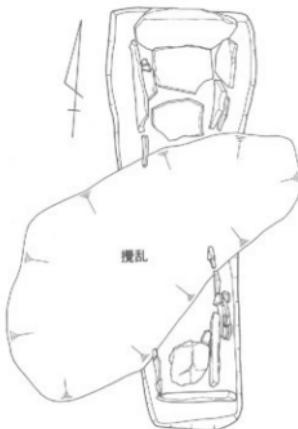
- ①褐色細砂 10YR4/4 ……表土
 ②にぶい黄褐色細砂 10YR4/3 ……擾乱坑埋土
 ③にぶい黄褐色細砂 10YR4/3 ……表土
 ④にぶい黄褐色～暗灰黄色細砂 10YR5/3～2.5Y4/2 ……第1主体部流入土
 ⑤黄褐色細砂 2.5Y5/3 ……第1主体部裏込め

0 (1 : 30) 1m

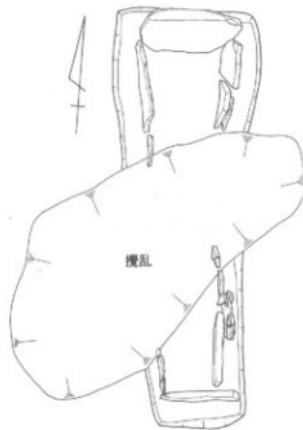
第13図 寺山14号墳第1主体部展開図・土層図



天井石撤去後



平積み石撤去後



床石撤去後



0 (1 : 30) 1 m

第 14 図 寺山 14 号墳第 1 主体部平面図

た場合、築造当初は0.1m前後の比高差となる。この想定が正しければ、通常の堅穴系埋葬施設で確認される頭側と足側の高低差の範囲と考えることができる。

小口・長側壁 両小口ともに板石1枚を立位で用いている。小口と側壁との関係は「Ⅱ」字形である。側壁は、残存状況の良好な南側から観察すると、左右両側壁ともに立位で用いた板石（基底石）の上に厚さ5cm前後の板石を2段平積みし、その上に天井石が架構される。一方、北側小口部分では2箇所において平積みされた板石1枚が確認できる。北側小口付近の棺内流入土中に床石よりも10cm前後浮いた状態で板石数枚を確認したことから、地滑り発生時に棺内に崩落したことを確認できる（註3）。したがって、南側小口のように2段存在していたかは判断不可能であるが、北側小口部分にも板石が最低1段は平積みされていた蓋然性が高い。側壁の基底石は左右両側壁ともに北側には板石2枚が確認できるが、この東西ともに2枚は接合することから、元来1枚だったものが地滑りによる土圧により、2枚に分断された可能性が高い。西側壁南側は、竹根が伸長し破壊されており、一部が残存するのみであった。一方、東側壁の南側は2石分が遺存する。左右両側壁ともに天井石同様、南側のほうが小型の石材を使用している。

内法 この小堅穴式石室の内法（床面）は復元で全長1.95m、北側小口幅0.5m、南側小口幅0.3mをはかる。高さは北側0.13m、南側約0.2mである。上述したようにこの石室は少なからず地滑りの影響を受けており、築造当初に推定・復元すると、北側小口は北側に押し倒されていることから、これを直立させた場合0.23mに復元でき、さらに天井石との間に少なくとも1枚の板石（約5cm）が平積みされた場合、約0.3mと推断できる（2枚平積みの場合は約0.35m）。したがって、築造当初は、全長1.95m、内側の高さは北側で0.3m、南側で約0.2mに復原できる。

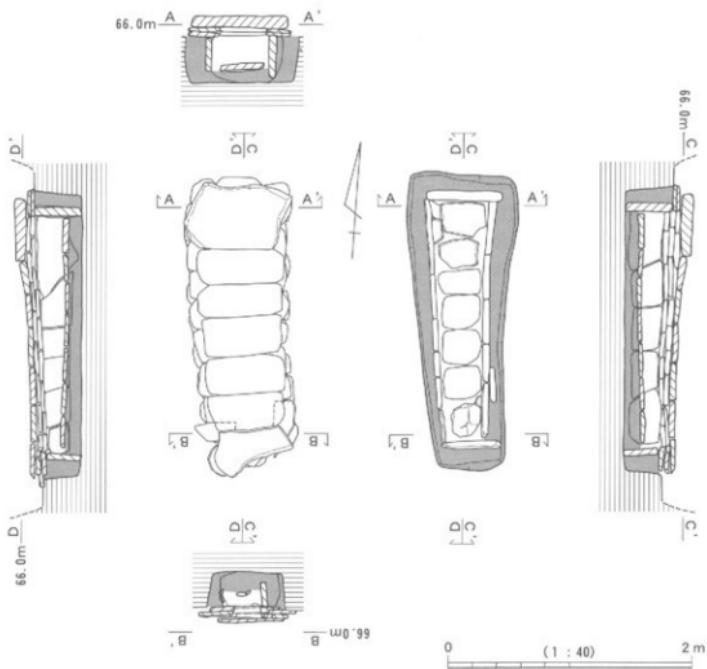
遺体の埋葬・頭位 遺体の埋葬に関して、人骨が出土していないため内法を考慮すると、大人用か小児用かの判断が困難であるが、箱形石棺をはじめとする全国的な事例では、第1主体部と同様の内法で大人が埋葬された事例が確認されていることから、大人（身長150～170cm位）・小児の両方の可能性を想定しておきたい。また、頭位は内幅が、北側約0.5m、南側約0.3mであること、北側が南側より床面標高が0.1m高いことを根拠に、北頭位と想定する。

3 小堅穴式石室構築状況の復元

発掘調査の結果から第1主体部の築造過程を復元しておきたい（第15図）。

- ①まず、墳丘のほぼ中央に地山面を掘り込んで、下段北側が0.9m、南側0.5m、全長2.4m以上（上段は下段以上の数値であるが現状では推定不可能）の長台形の二段墓壙を掘削する。
- ②墓壙内に板石を立て墓壙下段と相似形（長台形）に石材を組み合わせ、Ⅱ字形を作る。この際には北側に大型の石材を用い、南側に向かうにしたがい小型の石材を用いる。この後、墓壙と石材の隙間に裏込めを行うと同時に、内部にも10cm程度充填し、立てた板石（側壁および小口基底石）が倒壊しないようにする。この基底石の上面の高さがほぼ墓壙上段（2段目）の底面に相当する。したがって、墓壙下段は平積みする石材が墓壙上段の平坦面に位置する深さまで意図的に掘削した可能性が高い。
- ③内部に充填した土の上に板石を置き、床面を構築する。
- ④ここで遺体を納め、副葬品を添える。
- ⑤立てた板石の上全体に板石を2段平積みする。上述したようにこの時、平積みした石材は墓壙上段（2段目）の底部直上に据えられる。棺内側には、平端かつ直線的な部分を選択して向ける。
- ⑥天井石を1段架構し、墓壙を埋める。天井石は北のほうが大きいものを使用している。

なお、この構築過程における祭祀等の状況は全く遺物が出土していないことから不明である。



第15図 寺山14号墳第1主体部推定復元図

②第2主体部（第12・16・17図、図版7～9）

第2主体部は第1主体部の調査後墳丘の断ち割り調査に伴う試掘溝を掘削した段階で確認した、第1主体部の東約0.5mの位置に並列埋葬された木棺直葬である。

1 墓壙および木棺（第12図、図版9）

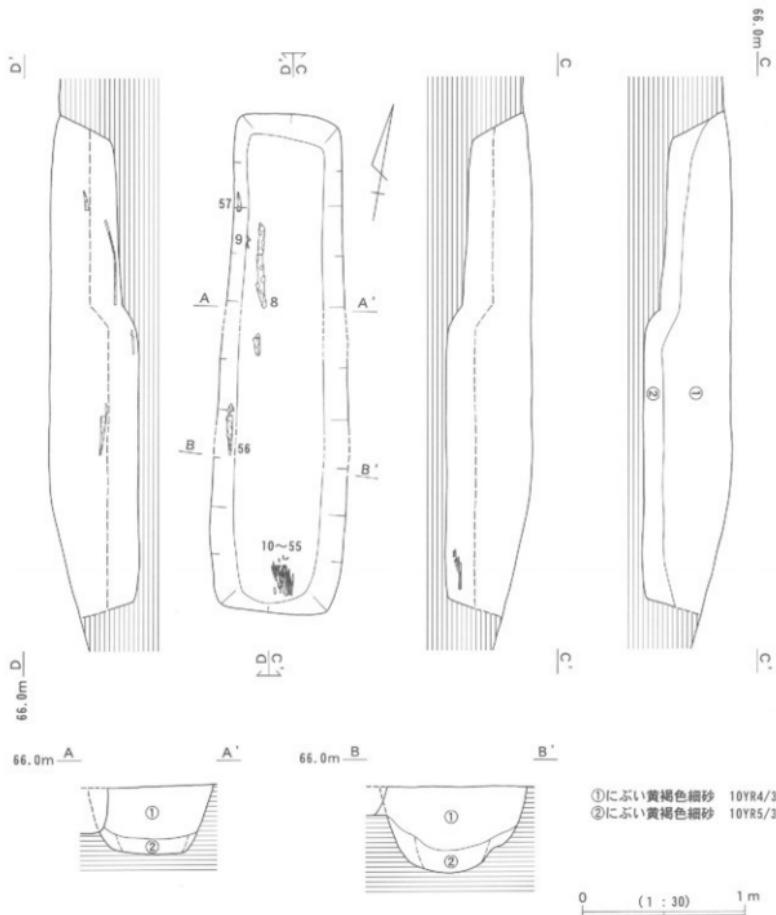
墓壙 墓壙は地山を掘り込んで構築されている。その平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、横断面の形態はU字形を呈する。主軸方位はN-10°-Wをとり、ほぼ真北を向く。第1主体部と比較して6°西偏する。床面の標高は北側で約65.45m、南側で約65.35mをはかり、約0.1mの比高差が確認できる。その規模は、現状で全長3.05m、北側小口幅約0.65m、中央部幅約0.8m、南側小口幅0.80m、深さ約0.55mをはかる。復元した墓壙の全長は約2.90mであり、南北の標高差はほとんどなく、ほぼ水平に復元することができる。

木棺 墓壙の底部が緩やかなU字形を呈することから、供用された木棺は割竹形木棺と推測する。木棺の大きさは、鉄鋤および鉄鎌の出土位置および主体部の土層観察を基礎とすると、全長約2.8m、幅約0.5mをはかる。地滑りにより生起したずれを勘案し復元した築造当初の木棺の規模は全長約2.65mである。

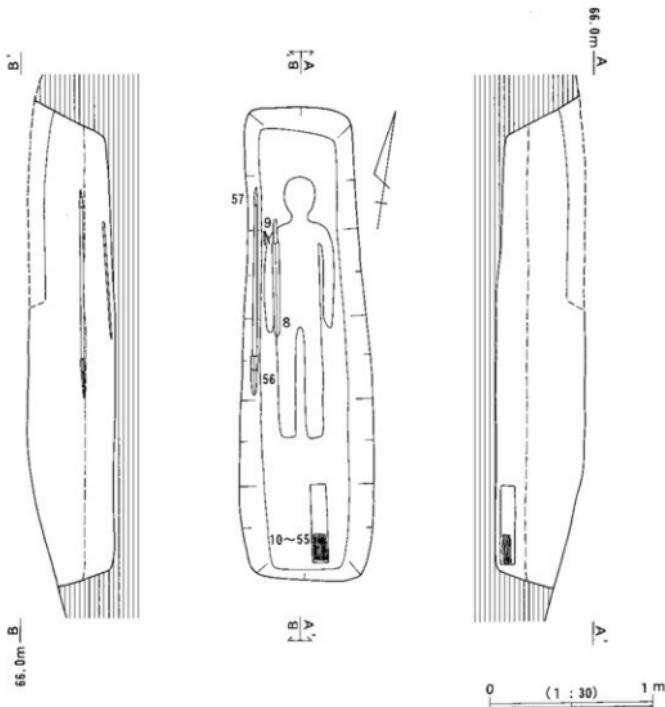
2 遺物出土状況 (第 16・17 図、図版 7・8-1~4)

竹根により土層の観察は困難であるが、墓壙の土層の堆積状況はほぼ水平であることから、未盗掘であった可能性が高い。

遺物はまず墓壙底部、北側小口から約 0.65 m のところで、鉄剣（8）が柄を北側に、切先を南に向かって倒伏した状態で出土した。この鉄剣は柄尻から約 50 cm の部分で破断しており、この割れ口の高低差は約 12 cm をはかる。また、剣の柄尻から西へ 5 cm のところでこの剣を佩用するための鉄製吊金具（9）が「脚」側を鉄剣柄の方へ向けた状態で出土した。また、棺の南小口部分からは鉄鎌 38 本（鎌身数、10~55）が銹着し一塊となって出土した。矢筒（羽・胡籠）の金具等は確認できないが、有機質の矢筒に一括し



第 16 図 寺山 14 号墳第 2 主体部検出状況図・土層図



第17図 寺山14号墳第2主体部遺物配置復元図

て納められた状態で副葬された可能性が高い。ただ、保存処理前X線写真（図版24-3）でも明らかのように、ほぼ中央に若干の空白部分が確認でき、東側（写真下側）の塊がより南側にあることを考慮すると、2束で納められていた可能性もある。鎌身はすべて南側に向かっていた。

棺外からは鉄鉢（56）と鉄製石突（57）が出土している。この2点は、墓壇と木棺の間に充填された土の上に置かれており、棺埋設後この位置に副葬されたことがわかる。鉄鉢は南小口から北に約0.9m、標高66.5m前後、鉄石突は北小口から南に0.5m、標高66.4mの位置から出土した。これらは棺内で出土した遺物との比高差は約20cmである。鉄鉢は切先を南側に向けた状態で、鉄石突は先端を北側に向けた状態で出土した。ともに原位置を保持して出土していること、袋部には木質が残存することから、木製柄に装着した状態で副葬された蓋然性が高い。この鉄鉢の全長は復元で約1.45mをはかり、鉄鉢先・鉄石突の袋内部に納められた部分を除いた木柄の長さは1.16mである。なお、発掘調査段階では木柄に漆などが塗布されていたかは確認できない。

遺体の頭位は鉄剣の切先が南を向くことを根拠として、第1主体部同様北頭位であると想定でき、身長160cm前後とした場合、第17図に示したように棺の北側に遺体を納め、南側の空間に矢筒に納めた矢を副葬したと考えることができる。鉄剣は柄・鞘に納められた状態で副葬され、この剣の吊金具が剣関部付近で発見されたことから鉄剣は佩用された状態ではなく、遺体に添えられたものと想定する。

(3) 埋葬施設出土遺物 (第 18 ~ 22 図, 卷頭図版 4, 図版 23 ~ 28)

第 1 主体部からは遺物は出土していない。第 2 主体部からは、以下の遺物が出土した。

棺内 鉄劍 1 振 鉄製劍吊金具 1 点 鐵鏹 38 本 (鐵身数)

棺外 鉄鉢 1 点 鉄製石突 1 点

鉄 剣 (第 19 図, 図版 23・25) 鍛造された鉄劍 (8) である。切先を南に向けた状態で出土した。地滑りにより切先部分が寸断されていたため、全長など正確な数値は不明である。残存長 72.4 cm、劍身長 57.6 cm、劍身幅 (切先側) 3.5 cm、同関側 4.0 cm、同厚さ 7 mm をはかる。鎬は明瞭ではなく劍身断面はレンズ状 (平造り) を呈し、切先はややふくらが張る。関は均等の直角両関であり、4 mm をはかる。茎は茎尻に向かい若干先細る形態を呈し、茎尻は一文字尻である。断面は長方形である。残存長 14.8 cm、関側幅 3.2 cm、茎尻幅 1.6 cm、厚さ 5 mm をはかる。目釘孔は茎尻から 2.3 cm と 8.8 cm の 2箇所に穿孔され、直径はともに約 2 ~ 3 mm をはかる。目釘は遺存しない。

劍身の両面には部分的に木質が遺存することから、鞘に納められた状態で副葬されたことが判明する。劍身の木目は鎬に平行する。茎にも木質が遺存し、その木目は劍身と同方向である。茎の木質は茎尻から 12.5 cm の部分まで観察でき、この部分から関までの間に木質が観察できないことから木製以外の有機質の柄縁装具が取り付けられた可能性がある。茎の木質の上に直径 1 mm の紐が螺旋状 (左上がり) に巻きつけられた状態で遺存している (図版 25 - 中央下段)。

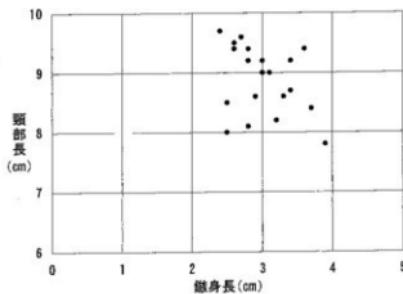
鉄製吊金具 (第 19 図, 図版 23・25) 「鎌子」あるいは「毛抜状金具」とされる鉄製品であるが、出土位置が鉄劍茎の西約 5 cm から出土したことを考慮すると、鉄劍佩用のための吊金具の可能性が高い (註 4)。

9 の形態はまさに「吊」字の中央の縦線が無い形態を呈する。一本の鉄棒を折り曲げることにより形成されている。頭部は「Ω」字形に折り曲げられ、脚部は「コ」字を 90° 反時計回りに回転した形状を呈する。遺存長 5.4 cm、脚部 2.8 cm、頭部長 2.6 cm、脚部幅 6 mm をはかる。

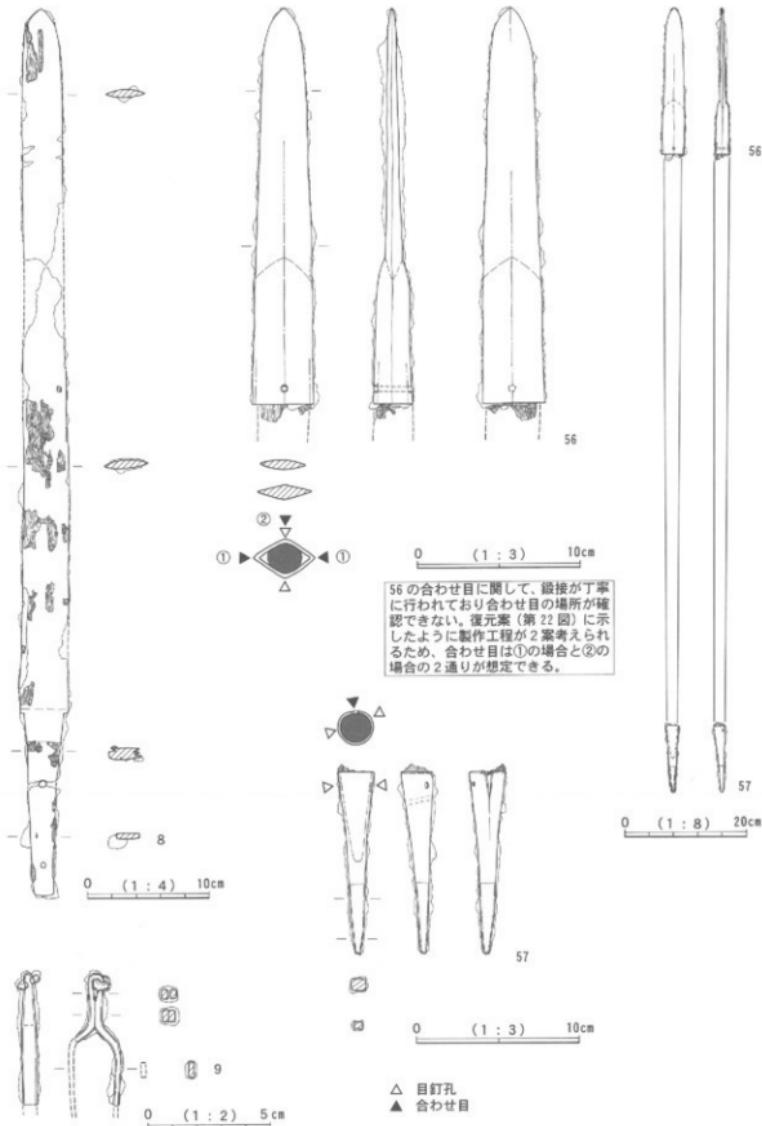
鉄 鏹 (第 18 ~ 21 図, 図版 23・24・26 ~ 28, 第 11 表) 細身尖根式の片刃箭式長頸鎌 1 種類のみ 38 本 (鐵身数, 10 ~ 55) が切先を南側に向け銛着した状態で出土した。この出土状態から木質や金具などは出土しなかったが、有機質の矢筒に一括して納められた状態で副葬されていたと推測する。

鎌身は比較的長い逆刺を有し、茎関は台形関である。一部鎌のように関端部が突起する個体が確認できるが、棘関 (方形突起) ではない。完存し、全長が判明する鎌の全長は 16.5 ~ 17.5 cm、平均 16.9 cm をはかる。鎌身長は 2.4 ~ 3.7 cm をはかり、平均 3.0 cm、鎌身幅は 7 ~ 9 mm をはかり、平均 8 mm である。頭部長は 7.8 ~ 10.2 cm をはかり、平均は

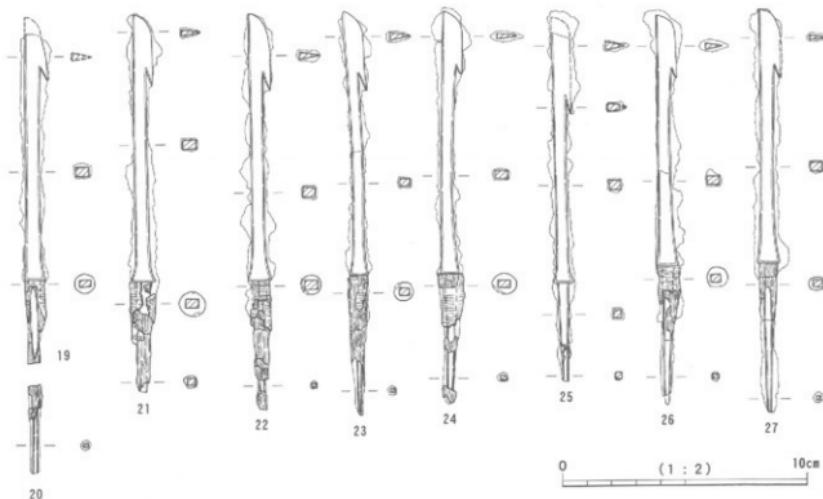
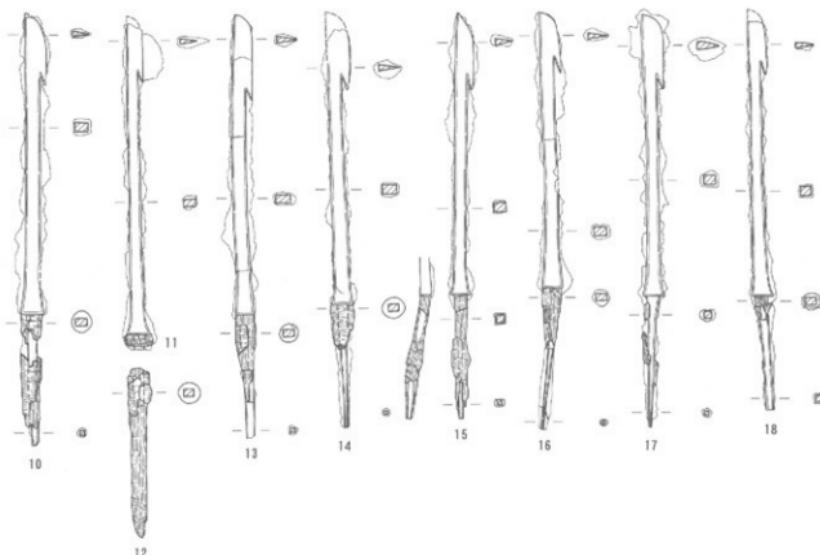
9.0 cm、頭部幅は 4 ~ 6 mm をはかり、平均 5 mm である。茎が完存するものは僅少であるが茎長は 5.1 ~ 6.9 cm をはかり、平均は 5.8 cm、茎幅は 4 ~ 6 mm をはかり、平均 5 mm である。逆刺 (腸抉) は 3 ~ 9 mm をはかり、平均は 6 mm である。なお、第 18 図には鎌身長と頭部長の散布図を示した。頭部長は、鎌身のほぼ 2.5 ~ 3 倍である。各部位の全長に対する割合は、鎌身が 2 : 5、頭部が 1 : 2、茎が 1 : 3 である。茎には、矢柄が遺存するものが多く、矢柄は木製柄



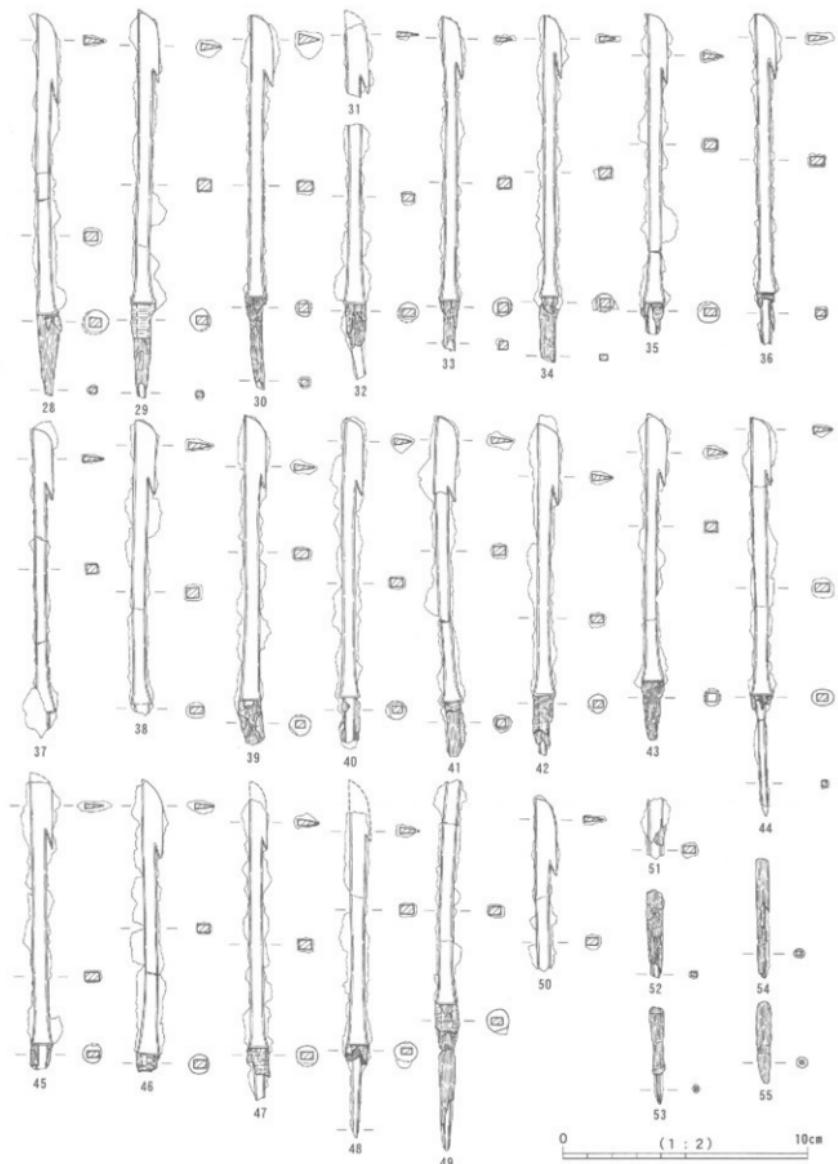
第 18 図 寺山 14 号墳出土鐵鎌計測値散布図



第19図 寺山14号墳第2主体部遺物実測図①(鉄劍はか)



第20図 寺山14号墳第2主体部遺物実測図②(鉄錠①)



第21図 寺山14号墳第2主体部遺物実測図③(鉄錐②)

を取り付け、その上に樹皮を螺旋状に巻きつけて固定している。

鉄鉢・石突（第19図、図版23・25） 鉄鉢、石突ともに棺外西側から出土した。出土位置から判断して、同一の鉢に伴う鉢先と石突である蓋然性が高い。

鉄鉢（56）は鉢身に木質などの有機質は遺存していないことから、剥き身の状態で副葬された可能性が高い。鉄鉢は全長24.2cm、鉢身長16.6cm、鉢身最大幅3.5cm、厚さ1.0cm、袋部長8.9cm、同幅3.3cm、同厚さ2.4cm、鉄板厚3mmをはかる。身部断面はやや薄い菱形（鑄造り）で、一部鎬が確認できぬ部分もある。鉢身（刃部）は袋部との境界部分まで確認できる。鉢身と袋部の境界は無闇である。袋部の断面は菱形を呈し、袋尻は直基式（直裁）である。鉢身と袋部の境界部分は呑口状（三角形）に造成されている。

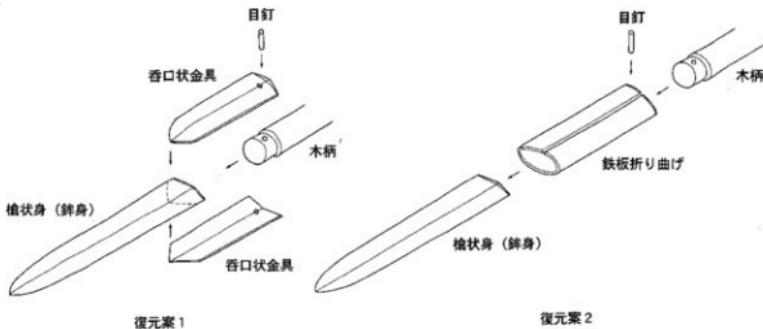
X線写真を観察すると、袋部内面奥側は直線的であり、袋内面は「コ」字形を呈するように見える。内法は長さ6.9cm、幅3.2cm、厚さ1.8cmをはかる。また、袋尻から9mmのところに目釘孔が穿たれ、直径約3mmの目釘が残存する。袋の合わせ目は非常に丁寧に鍛接されており、X線写真を用いても確認し難く、刃部側左右ともに鍛接している（想定①、復元案①）か、あるいは袋上部で鍛接している（想定②、復元案②）か判断できない。

鉢袋内には木柄が遺存しており、分析の結果、樹種はカバノキ属であることが判明した（第4節参照）。木柄は横長の楕円形であり、鉢袋に入る部分を一回り細めている。袋内は直径1.8cm、袋外は直径2.4cmをはかる。

上記の観察結果から判断した鉄鉢の製作方法復元案2例を第22図に示した。復元案1は鎗状身と、先が呑口状に加工された2枚の上下の袋部部品を鍛造し、柄を袋に納め、袋と柄を鉄製の目釘で固定していると想定したものである。復元案2は、鎗状身を一枚の鉄板で包み込んだ後袋上部で鍛接し、身と袋の境界部分を鍛接するために呑口状（三角形）に叩き、目釘を合わせ目に打ち込んだと想定した。

石突（57）は棺外西側、先端を北側に向けた状態で出土した。全長11.1cm、断面は先端から4.4cmまでは横長長方形を呈し、長辺最大9mm、短辺最大7mmをはかる。袋部断面は円形であり、内径1.9cm、外径2.2cmをはかる。目釘孔は合わせ目と約70度ずらして両側に穿孔される。目釘はX線写真を観察すると目釘孔よりも袋内奥側で確認できる。直径3mm程度の鉄製である。

木柄は鉢側と同様袋内側に入る部分を一回り細く加工している。樹種は分析できないが、鉄鉢柄と同様である可能性が高い。



第22図 寺山14号墳出土鉄鉢構造模式図

(4) 築造時期

墳丘から出土した土師器の破片は小片であることから時期を特定することはできないが、高杯の稜線が明瞭であること、脚部が中空であり、短脚であることなど、全体的な特徴から5世紀後半～6世紀前半（須恵器陶邑田辺編年TK47型式～TK10型式併行期）に位置づけることができる（鈴木敏1999, 松井1995）。同様に、土師器碗もその時期に位置づけることが可能と考える。一方、第2主体部から出土した鉄鎌は、5世紀後半（TK23型式併行期）～6世紀前半（MT15型式併行期）に位置づけることができる。逆刺が比較的長いこと、頭部長がTK23併行期とされる静岡県庵原山多田大塚4号墳（静岡県教委編2001）や、TK23～TK47型式に位置づけられる袋井市石ノ形古墳（袋井市教委編1999）などから出土した片刃箭鎌とほぼ同形、同大であることからTK23～TK47型式併行期に位置づけ可能である（第5節結語参照）。また、後期に入ると副葬が激減する鉄劍が副葬されること、特殊形態の鉄鎌が5世紀代に位置づけられる可能性が高いことから第2主体部は5世紀後半に位置づけられる可能性が高い。したがって、14号墳は5世紀後半代（TK47型式併行期）に築造された古墳である可能性が高い。

第1主体部と第2主体部の時期的な前後関係は墓壇の切り合い関係が不明であること、第1主体部から遺物が出土していないことから不明と言わざるを得ない。しかし、第1主体部が古墳の全形から見た場合、中心に近いことから考えて、第1主体部が先に築造されたと考えることが可能である。第2主体部も周溝から出土した土器は時期差を認めることができないことから、第1主体部とほぼ同時期に埋葬されたと推測する。

（註2）この石棺の中にも別の木棺が納められた可能性は低く、この埋葬施設を「棺」と想定するが、ここでは同様の構造を有する埋葬施設が「（石棺系）小脛穴式石室」という名称で呼ばれる（福永1992）ことから、報告に際しては「小脛穴式石室」として記述する。

（註3）なお、第13図に示したように、北側の天井石は僅かに西側に横ずれしている。一方、側壁は東側に傾いており、東側に向かい張り力が加えられている。この横ずれに伴い天井石は西側に移動したと推測する。この際に天井石と箱形の基礎石の間に使用されていた平積み板石が数枚石棺内部に落ち込んだと推測できる。

（註4）このような形狀の遺物は複数の用途が想定されており、その名称・用途は特定されておらず（宇野1985, 鈴木一1999a, 七原1983, 吉田2001, 渡辺1986など）、全く別な機能をもったものが形状という特徴により同一のカテゴリーにまとめられている可能性が高いことが指摘されている（鈴木一1999a）。また、各部位の名称も研究者間で統一されていない。ここでは、各部位の名称に関して、吉田和彦氏の名称に準拠する（吉田2001）。

3. 2区の調査成果

(1) 遺構 (第24図, 図版10)

確認調査時の試掘溝では、木棺直葬の墓壙のような落ち込み、および黄褐色土と黒色土の互層が、それぞれ2箇所で確認されたため、2基の古墳が存在することを想定し発掘調査を進めた。しかし、発掘調査の結果、遺構と想定した落ち込みは擾乱であることが判明し、また黄褐色土と黒色土の互層は地山の堆積であることが判明した。したがって、2区においては古墳およびその他の遺構は確認できなかつたため調査を終了した。

しかし、表土中(①層)から遺物(須恵器、灰釉陶器)が出土していることから判断すると、何らかの遺構が調査区内に存在していたことは明らかである。その遺構は、後述するように、須恵器杯蓋(58)が出土し、14号墳とほぼ同時期に比定できることから、横穴式石室採用以前の堅穴系埋葬施設をもつ古墳であった可能性が高い。

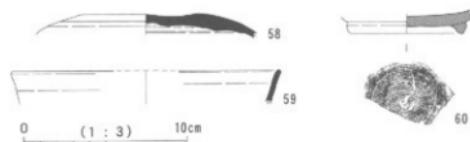
また、奈良時代の須恵器、灰釉陶器が出土していることから古墳以外の遺構の存在した可能性も十分に想定できる。

①出土遺物 (第23図, 図版24-2, 第10表)

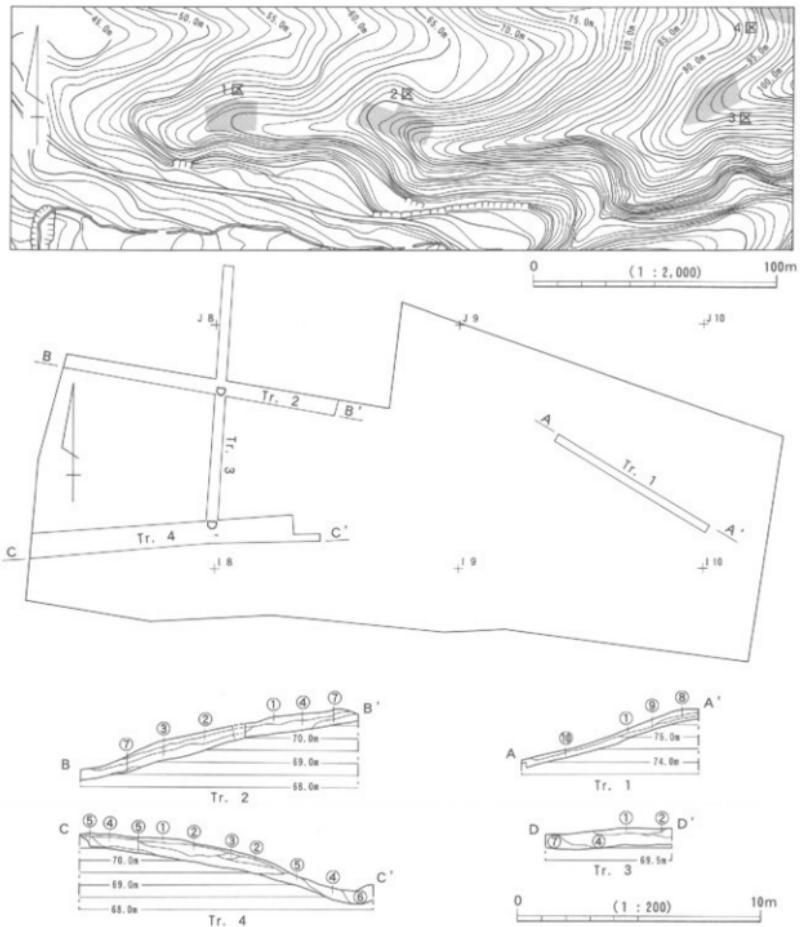
須恵器および灰釉陶器が出土して
いる。

須恵器 58 は須恵器杯蓋の天井部片である。天井部には残存する部分全体的にヘラ削りが施されていることから、遠江編年Ⅲ期前葉の杯蓋である可能性が高い。59 は須恵器杯身の口縁部片である。小片であるため詳細は不明であるが、有台杯の可能性が高く、8世紀代の所産と考える。

灰釉陶器 60 は灰釉陶器碗の底部片である。底部下面には成形時の糸切り痕が看取でき、高台は低く、三角形がつぶれたような形状を呈する。松井編年Ⅲ-1期、9世紀末~10世紀前半に位置づけることが可能である(松井 1989)。



第23図 2区出土遺物実測図



- | | | |
|------------|---------|-------------|
| ①赤褐色シルト質細砂 | SYR3/6 | 表土 |
| ②黄褐色シルト質細砂 | 2.SYS/3 | 改植土 |
| ③黄褐色シルト質細砂 | 2.SYS/3 | (黒褐色土塊を含む。) |
| ④黒褐色シルト質細砂 | 10YR3/1 | (炭化物若干含む。) |
| ⑤赤褐色シルト質細砂 | 5YR4/6 | (小繊化若干含む。) |
| ⑥黒褐色シルト質細砂 | 5YR2/2 | 地山 |
| ⑦に、ぶい黄褐色細砂 | 10YR5/3 | 地山 |
| ⑧暗褐色シルト質細砂 | 10YR3/4 | 地山 |
| ⑨黄褐色細砂 | 2.SYS/3 | 地山 |
| ⑩明黄褐色細砂 | 2.SY6/6 | 地山 |

第24図 2区試掘溝配置図・土層図

4. 3 区（13 号墳）の調査成果

（1）墳丘

①立地と墳丘の現状（第9図）

13号墳は14号墳の東約200m、丘陵斜面の尾根筋上、標高96.5～98.0m付近の平坦面に位置する。調査前にはこの部位に高まり、および周溝のくぼみを確認することができた。また、墳丘南側は著しく崩落しており、埋葬施設は確認できるものの、その南側部分が崩落し残存していないことが予想された。

②墳丘・周溝（第25～27図、図版11～13）

墳丘は自然地形を巧みに利用して築造される。周溝は東側のみ丘陵を切断し、南北方向に直線的に掘削される。北側から西側は削り出すことにより周溝に替え、墳裾を形成している。東側の周溝最大幅は約1.9m、深さ0.4mをはかる。

墳丘は東側の周溝が直線的に掘削されているため逆D字形に近い不整形な円墳である。墳丘規模は現状の周溝上端で南北5.6mをはかるが、石室墓壙の墓道先端部分までが墳丘と仮定した場合は7.8m以上に復元できる。一方、東西は約6.2mをはかる。

墳丘断ち割り調査の結果、盛土を確認することはできない。現状での墳丘の見かけ上の高さは、東側周溝底面が97.0m、西側周溝（削り出し）の下端が標高96.8m付近を巡り、墳頂部が約97.4mであることから、約0.4～0.6mと低平である。

また、周溝北東側に底面よりやや浮いた状態で集石が確認された。出土した石材は、すべて円礫（河原石）であり、大きさも後述する横穴式石室に使用された石材とはほぼ同大であること、地山には石室に使用されたような大きさの石材は確認できることを考慮すると、石室再利用時に持ち出され、この部分に放置されたものと想定できる。なお、集石部分から遺物など出土していない。

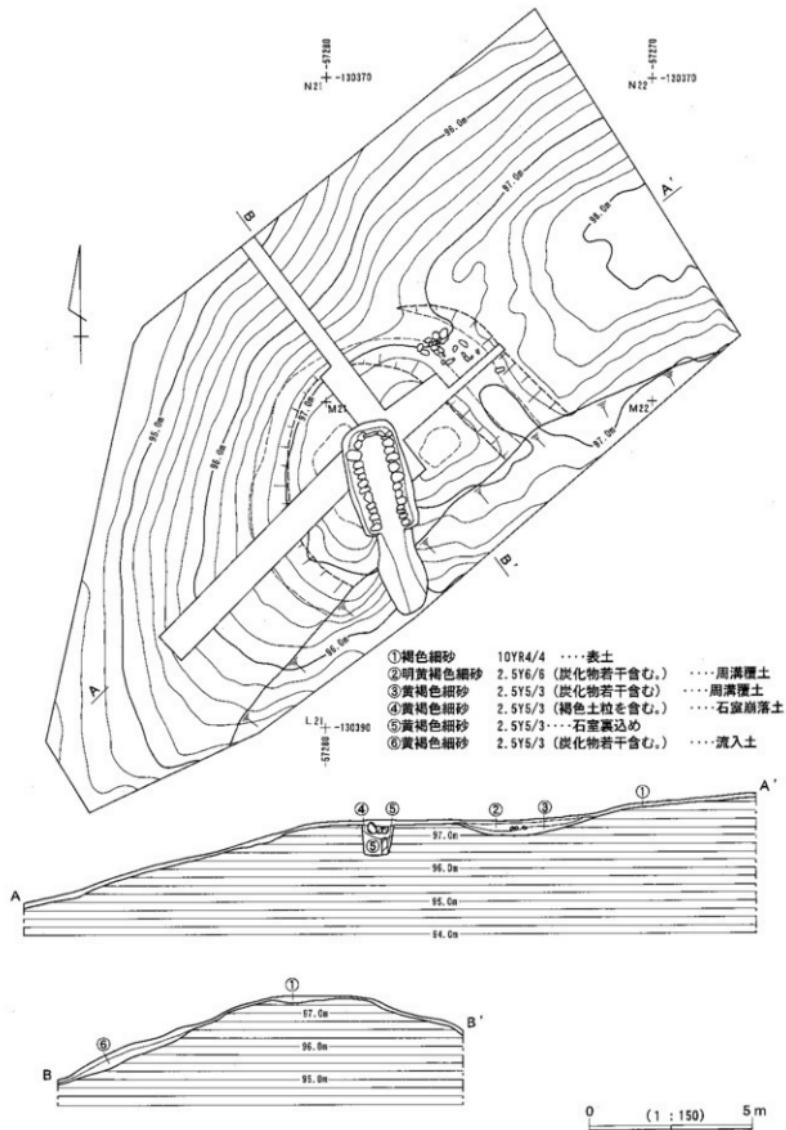
③墳丘出土遺物（第28～30図、図版29～1・2・3）

墳丘表土およびその周辺からは縄文土器、須恵器、土師器、銅鏡、砥石が出土している。いずれも原位置を保持していない。

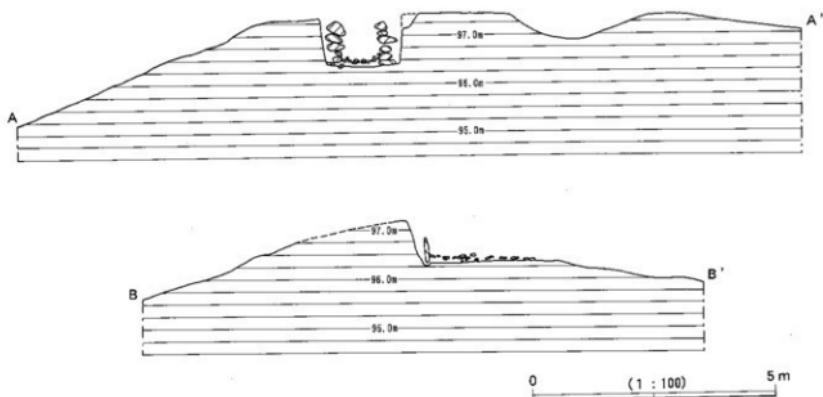
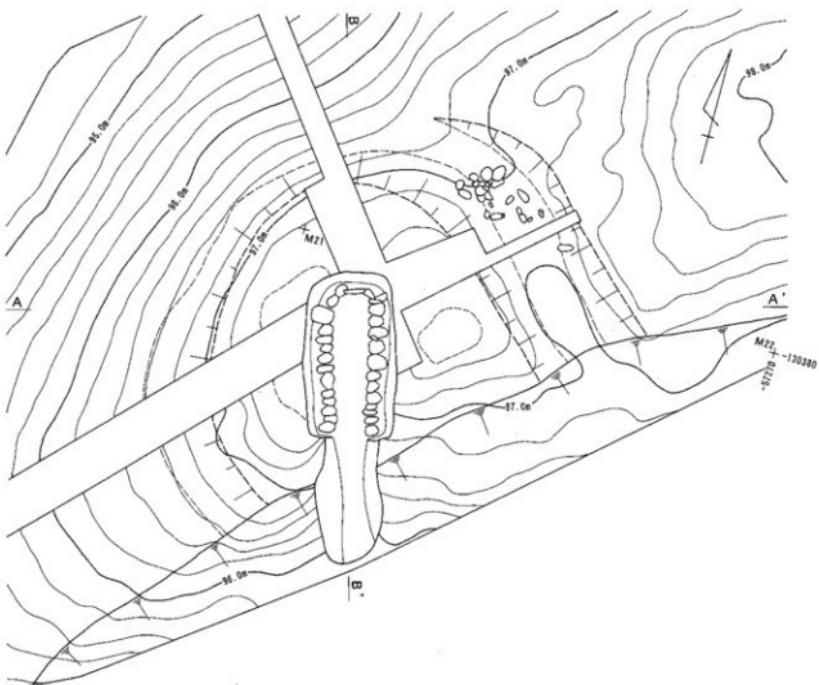
61は縄文土器深鉢の波状口縁部破片である。口縁部外面には2条の凹線文が巡らされる。この特徴から縄文時代後期末の寺津下層式に比定できる可能性が高い（註5）。62は須恵器台付長頸壺の底部片である。高台は低く、底面は平坦に仕上げられる。63は土師器杯の口縁部破片であり、口縁部は底部から直線的にたちあがり、端部は丸く仕上げられている。表面の摩滅が著しいため、赤彩は確認できない。

65は凝灰岩製の砥石である。一方の小口部分が欠損する。残存長7.4cm、小口幅2.3cm、最大幅2.4cm、小口部厚1.8cm、最大厚2.1cmをはかる。研磨面は使用により中央がやや窪んでおり、平滑である。小口部、下面是平滑に仕上げられているが、両長手には研磨が加えられておらず製作時の裁断の痕跡が斜めに残存している。裁断の痕跡が直線的であり、平滑に調整されていないこと、他の古墳時代～中近世までの遺跡から出土した砥石の形状と比較すると65はかなり均整であることから判断して、比較的新しい時期（近代以降）の遺物である可能性が高い（註6）。

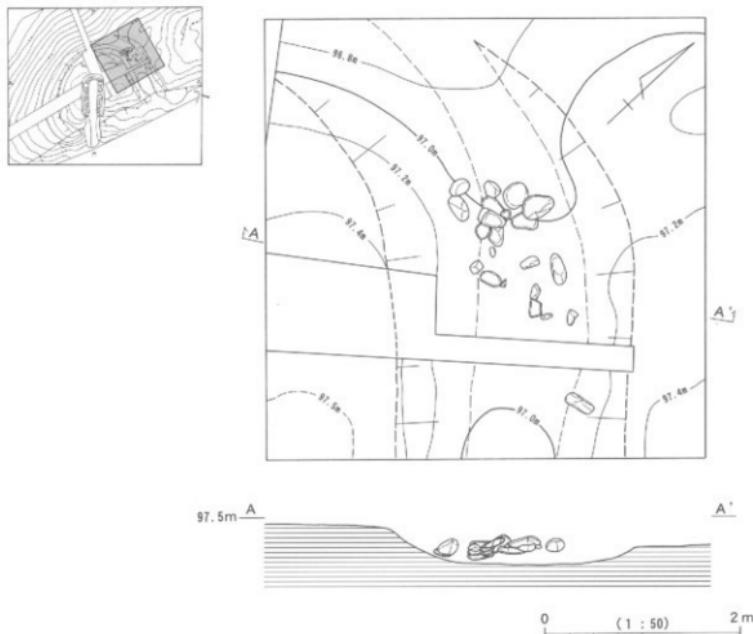
64は銅鏡「寛永通寶」の一文鏡である。直径2.2cm、孔幅一辺0.6cmをはかる。鋳上がりがやや劣悪であり、文字の一部がつぶれている。



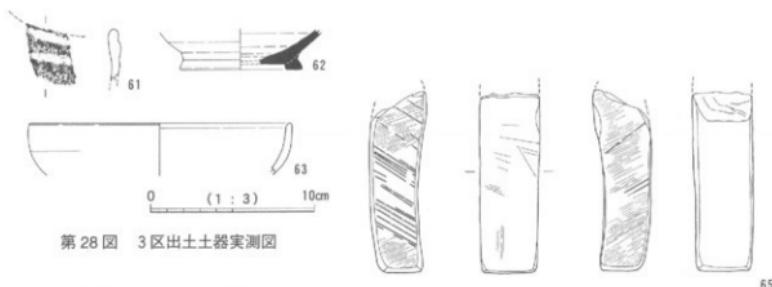
第25図 3区地形測量図・土層図



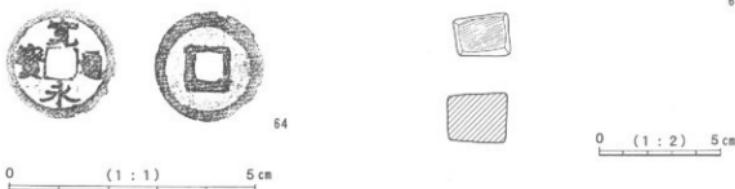
第26図 寺山13号墳地形測量図・断面図



第27図 寺山13号墳周溝集石出土状況

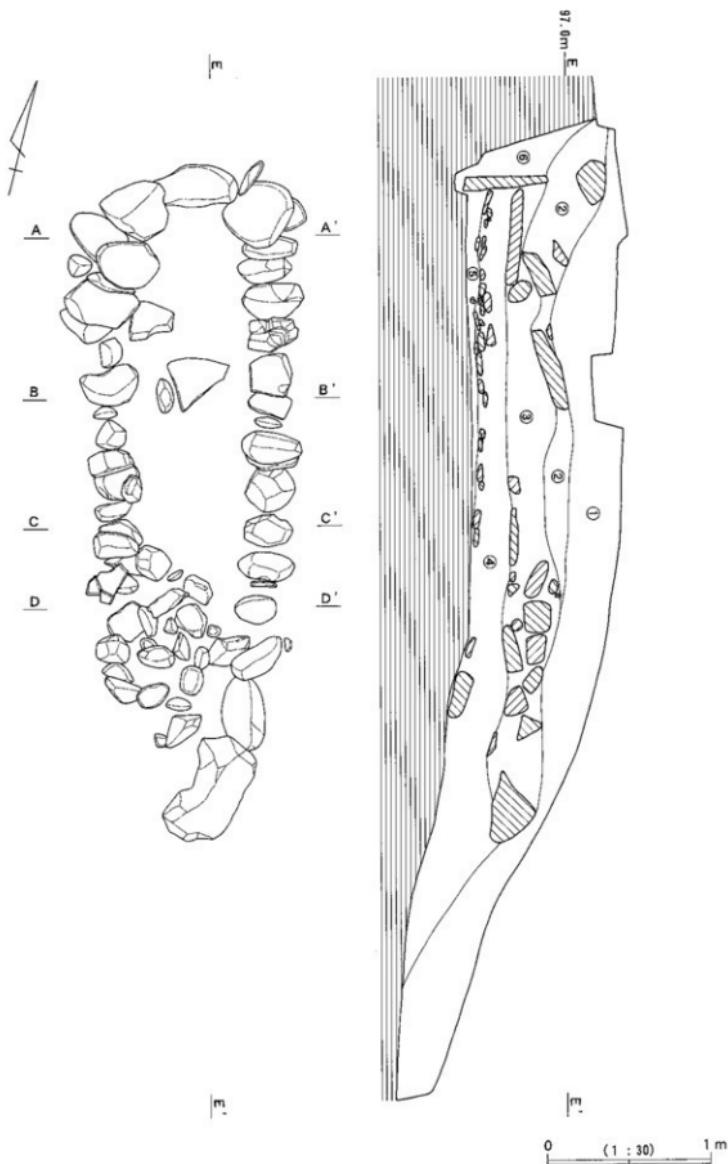


第28図 3区出土土器実測図



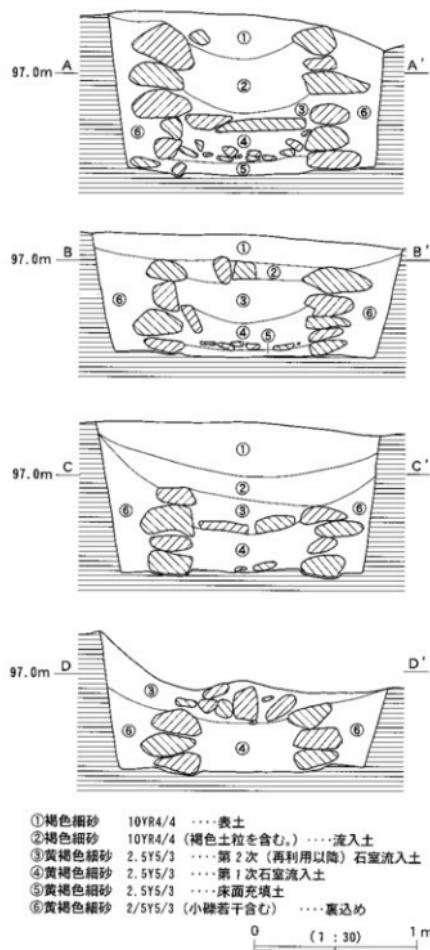
第29図 3区出土銅錢実測図

第30図 3区出土砥石実測図



第31図 寺山13号墳横穴式石室検出状況図・土層図①

(2) 墓葬施設



第32図 寺山13号墳横穴式石室土層図②

②横穴式石室 (第34・35図, 図版15~18)

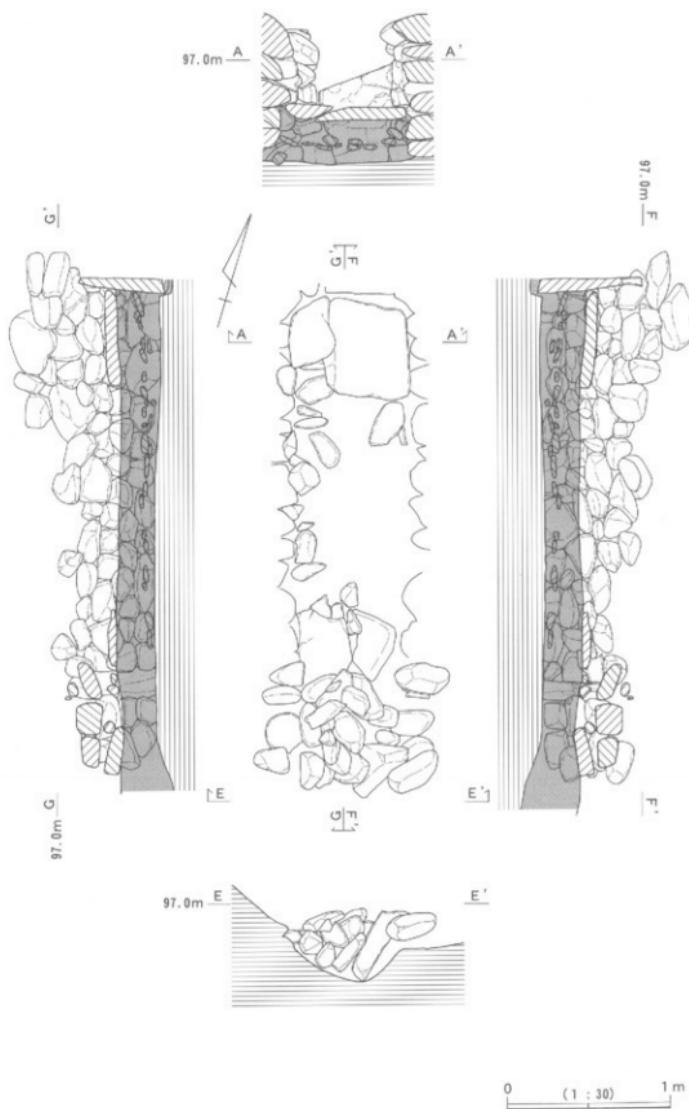
墓壙 (第35図, 図版18) 墓壙は地山を掘り込み、標高約96.5m付近まで掘削している。平面形はいわゆる「羽子板形」であり、構築された石室は墓壙の方形部分に納まり、その南側の細長い溝は墓道に当たる。

13号墳の埋葬施設は、墳丘の中央やや西よりに築造された、円礫を使用した疑似両袖式横穴式石室である。石室は丘陵の主軸方位を意識することなく、尾根筋にはば直交し、南に向けて開口する。これは敷地川の平地部分とは全く別方向に開口しており、開口部から南側にある小尾根に邪魔されて敷地川が形成した平地部は全く望むことはできず、決して見晴らしが良好であるとはいえない。明らかに見晴らしよりも開口方位を優先・重視した蓋然性が高い。検出時には、天井石は失われており、側壁および奥壁を確認した。

①再利用時 (第33図, 図版14)

築造当初の床面より約20cm上位に、床石と考えられる板石がほぼ水平に確認され、また羨道部分において集石が出土した。遺物はこの面において全く出土していないことを考慮すると、石材が偶然に水平に落下した可能性も否定できないが、水平に板石が存在することを評価して、ここでは再利用されたと仮定して報告する。

南側の集石は、羨道入口部分に側壁とほぼ同じ大きさの石材が使用されている。床石は落下した天井石を利用したと考えられ、奥壁側と玄門部分で確認でき、ほぼ水平に置かれている。この水平に置かれた石材が天井石と推測することから、天井は崩落し、上部は開放していたと想定でき、この場合は竪穴状の遺構として使用したものと考える。



第33図 寺山13号墳横穴式石室再利用時実測図

墓壙は全長 6.0 m、残存高 1.0 m をはかる。石室部分は、同長 3.45 m、同奥壁側幅 1.70 m、同中央幅 1.9 m、同玄門側 1.7 m をはかる。墓道は残存長 2.55 m、同玄門側幅 1.05 m、同羨門部幅 1.0 m をはかる。基底石を据えるための溝はなく、奥壁および立柱石部分のみすり鉢状に小型の土坑が掘削されている。それ以外の部分には、基底石とほぼ同大の石材の圧痕が確認できるが、本来浅くすり鉢状に掘削されていたのか、側壁石材の重量により沈下したのか判断できない。石材と圧痕の間に裏込めは確認できないことから、前者の可能性が高い。

石室（第 34・35 図、図版 15～18）

全長 3.0 m、最大幅 0.75 m をはかる玄室が単室の擬似両袖式横穴式石室である。奥壁から右側壁で 2.30 m、左側壁で 2.35 m のところに立柱石を据えている。主軸方位は N-15°-W をとり、ほぼ真南に向けて開口する。

玄室 玄室の平面形は奥壁側、玄門側と比較して中央が僅かに幅広であるが全体的にみると胴張形ではない。左右両側壁ともに玄門より直線的に伸び、奥壁より約 0.2 m の位置で急激に幅を狭める。したがって、玄室平面形は、長方形の奥窄まり形とするのが妥当である。玄室長 2.35 m、同奥壁部幅 0.57 m、同中央部幅 0.7 m、同袖部幅 0.65 m、残存高 0.95 m をはかる。奥壁幅 ÷ 玄室中央幅は約 80 %、袖部幅 ÷ 玄室中央幅は約 93 % である。また、玄室最大幅 ÷ 玄室長は 30 % であり、細長い玄室といえ、木棺を使用した場合には並置はほぼ不可能である。また、玄室の持ち送りは残存状況の最も良好な奥壁側で左右両側壁とともに約 10° 内側に傾く。

天井石は、石室内の埋土から確認できず、再利用時の羨道入口部分の集石および床石に使用されている。奥壁近くに再利用された平板な天井石と考える石材の幅は 50 cm であり、閉塞石に使用された石材の幅も 50 cm である。側壁の持ち送り状況を考慮すると、天井石が側壁と重なる部分が左右それぞれ 10 cm 程度と仮定すると、築造当初の玄室中央部の高さは 1.4 ~ 1.6 m 前後に復元できる。

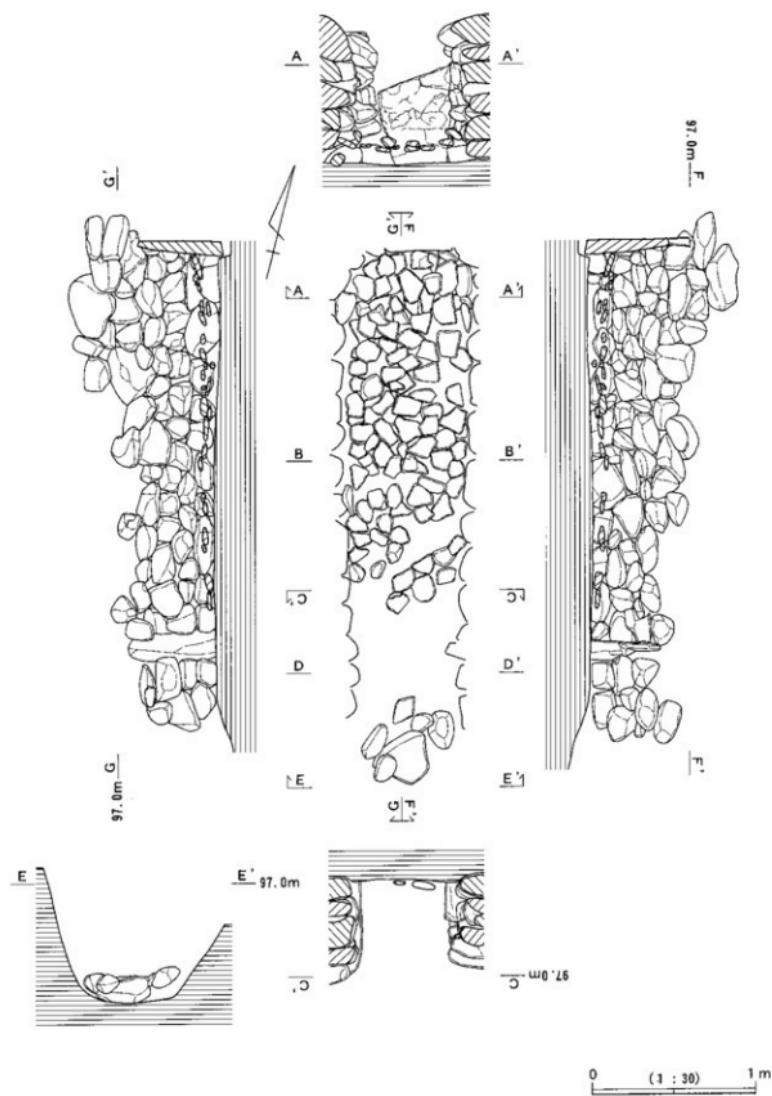
奥壁は 1 段 1 枚のみ遺存しているが、石室再利用時に奥壁側に利用された板状の石材が奥壁であったとすれば、2 段各 1 枚であった可能性がある。奥壁は大型の鏡石（板石）を使用している。この鏡石は台形状であり、下部幅 30 cm、上部幅 45 cm、高さ 55 cm をはかる。側壁部分と比較して 25 cm 低いため、2 段で構成されていた奥壁の上段の鏡石が崩落したことを想定できる。

側壁の壁体は、基本的に河原石を小口積みして構築しているが、その大きさは同大ではない。なお、記述に際しては奥壁から玄門をみて右側を右側壁（西側壁）、左側を左側壁（東側壁）とする。右側壁は最大で 6 段、高さ 0.95 m、左側壁は最大で 6 段、高さ 0.9 m 残存している。両側壁とともに基底石から上段まで基本的に小口を内側に向けて積載されている。各段ともにほぼ同一の高さで目地が通っている。側壁と奥壁との関係は、側壁の石材が奥壁を抉むように積載されている。

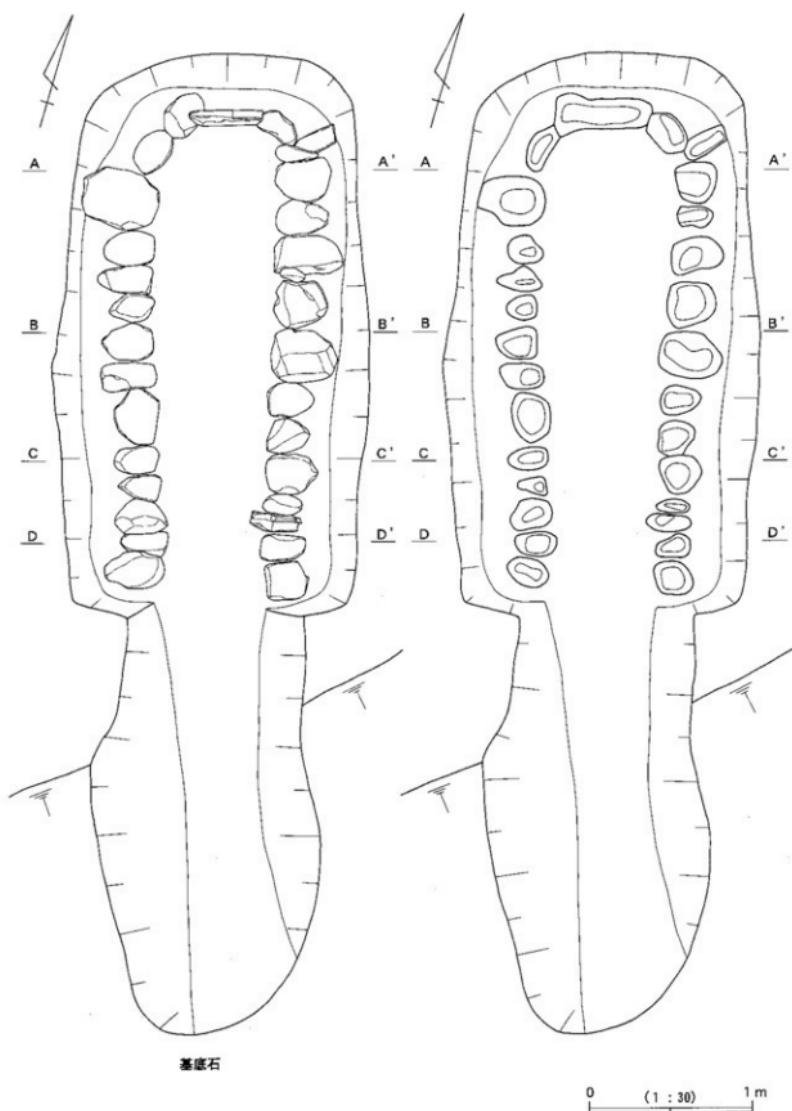
羨道 羨道は、基本的に玄室側壁と同様、小口を内側に向ける小口積みである。羨道長 0.65 m、立柱石部分幅 0.54 m、羨道先端部幅 0.64 cm をはかる。立柱石は墓壙の括れ部分よりも 0.5 m 北側に据えられている。立柱石は右側壁側が大型の筒状の川原石を使用しており、左側壁側は奥壁と同様に板石を使用している。この立柱石は左右ともに側壁に取り込まれ境界とされており、玄室側壁と羨道側壁は一體的な構築はなされていない。

床石 床石は玄室部分のみ敷設される。石材は 10 ~ 15 cm 程度の小型の平坦な河原石を用いており、一部重なりがあるものの基本的には 1 面である。床石は墓壙よりも 5 cm ほど高く、側壁基底石の中央の高さに位置する。

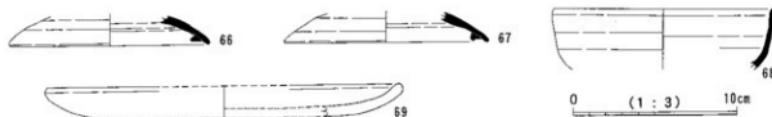
基底石 基底石も川原石を使用しているが、腰石のような大型の石材を使用せず、基本的に第 2 段目以上とほぼ同大の石材を使用している。基本的に小口部分が内側に向けられる。



第34図 寺山13号墳横穴式石室展開図



第35図 寺山13号墳横穴式石室基底石・基壇実測図



第36図 寺山13号墳横穴式石室出土遺物実測図

(3) 出土遺物 (第36図、図版29、第10表)

石室内からは原位置を保持した状態で出土した遺物はない。

横穴式石室の狭道埋土中から土師器盤が1点、石室裏込め土内上部から須恵器かえり付蓋2点、杯身(無台杯身?)1点が出土した。66~68は裏込めから出土しているが、再利用時に掘り上げた土砂の中に含まれていたものが何らかの理由で裏込めと想定する位置に紛れ込んだか、あるいは近接する位置に古墳が存在しており、その古墳から流れ込んだ土砂を裏込めとして利用した可能性もある。

66・67は、須恵器のかえり付蓋である。つまみ部分は両個体ともに残存していない。口径は約12cmであり、かえりは口縁部より内側に隠れている。68は須恵器無台杯身か有台杯身の口縁部破片である。口径が66・67よりも大きい。69は土師器の赤彩された盤であり、口縁部は丸く仕上げられている。

(4) 築造時期

築造時期は、石室内から原位置を保持して出土した遺物がないことから明確ではないが、裏込めから出土した須恵器は口径が12cmとやや大型であること、かえりが口縁部の内側に入り込んでいることなどを考慮すると、遠江編年IV期後半段階(陶邑田辺編年TK46型式併行期)に位置づけることができることから、7世紀後半以降に比定できる。追葬に関しては、出土した須恵器・土師器に時期差が認められないことから、積極的には認定できない。

また、再利用されたとの仮定が正しければ、明確な根柢はないものの、その床面に石室の天井石が利用されていること、またこの板石は築造時の敷石より約20cm上位に位置していることから、石室築造から長期間年月を経ている可能性が高い。また、3区では銅鏡「寛永通寶」が出土していることを考慮すると近代以前の一時期に再利用された可能性が高い。

(註5) 袋井市教育委員会 松井一明氏のご教示による。

(註6) 柴田 稔氏のご教示による。柴田氏によれば、この直線的な裁断痕は機械切断による痕跡の可能性が高いということである。したがって近代以降の遺物である可能性が高い。

5. 4区（11・12号墳）の調査成果

4区では分布調査時には古墳の存在は確認されていなかった。しかし、確認調査前の踏査時にこの部分に瘤状の高まりを2箇所で確認した。したがって、当該箇所にも確認調査を実施することとなった。確認調査の結果、踏査時の所見のとおり東西に並ぶ2基の古墳を確認し、西側の古墳を11号墳、東側の古墳を12号墳とした。

（1）11号墳

①墳丘

1 立地と墳丘の現状（第9図）

11号墳は深く入り込んだ谷を挟んで13、14号墳の築造された尾根と対峙する北側の別尾根上の緩斜面、標高約93.8～95.2m付近に位置している。11号墳は調査前や傾斜のある丘陵斜面地に起伏の少ない瘤状の高まりとして視認することができ、その高さから墳丘はかなりの部分が流出していることが予測できた。この想定は確認調査からも明らかとなり、現地表面から10cm程度で埋葬施設と想定する掘り込みを確認した。

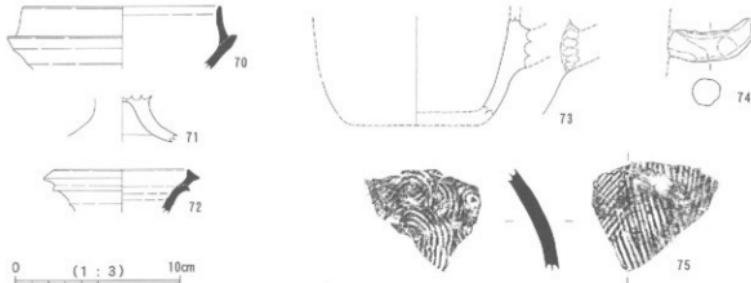
なお、11号墳の一部（墳丘北側）は調査対象範囲外である。

2 墳丘・周溝（第38～40図、図版19・20）

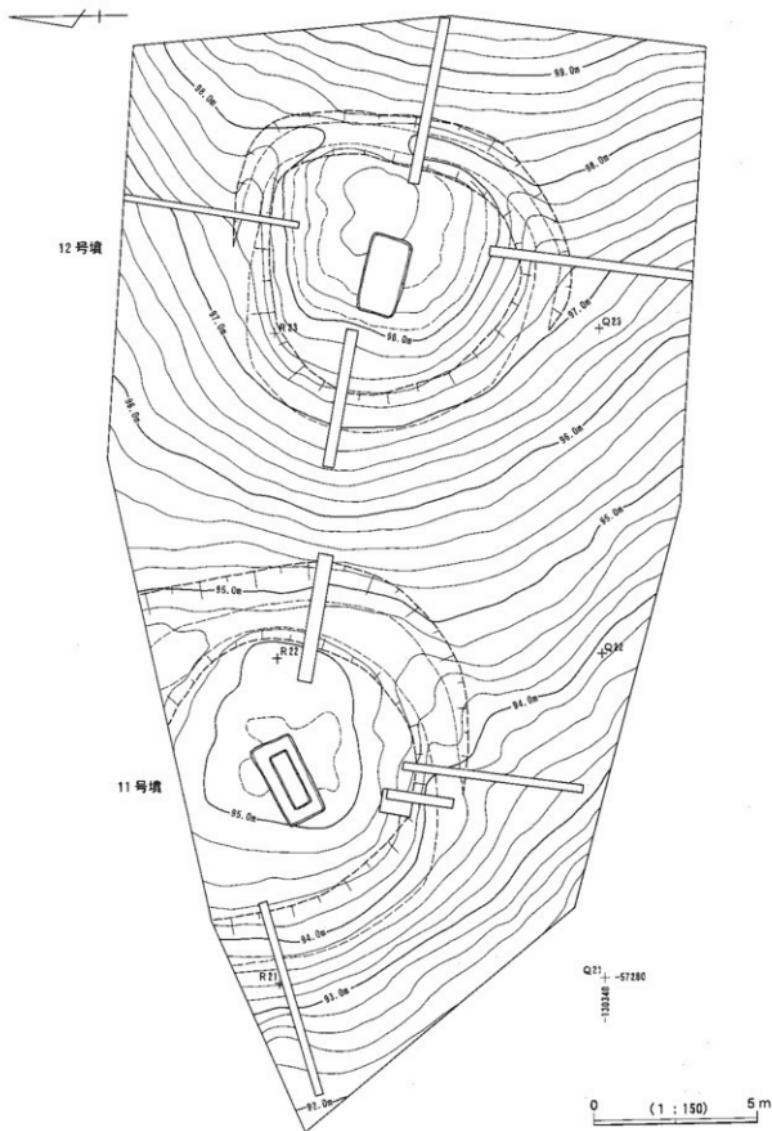
墳丘断ち割り調査の結果、盛土は既に流出していることが判明した。墳丘は自然地形を巧みに利用し、丘陵を削り出して築造されている。周溝は東側を中心に行「コ」字形に掘削し、南側から西側は地山を削り出すことによって周溝に替えている。周溝は東側で最大幅約3.0m、深さ0.4mをはかる。

11号墳の墳形はやや不整形な円墳であり、東西8.2m、南北7.6m以上をはかる。11号墳の見かけ上の高さは西側の削り出し端部が93.8m付近、墳丘中央が95.1m付近であることから、1.4m程度である。

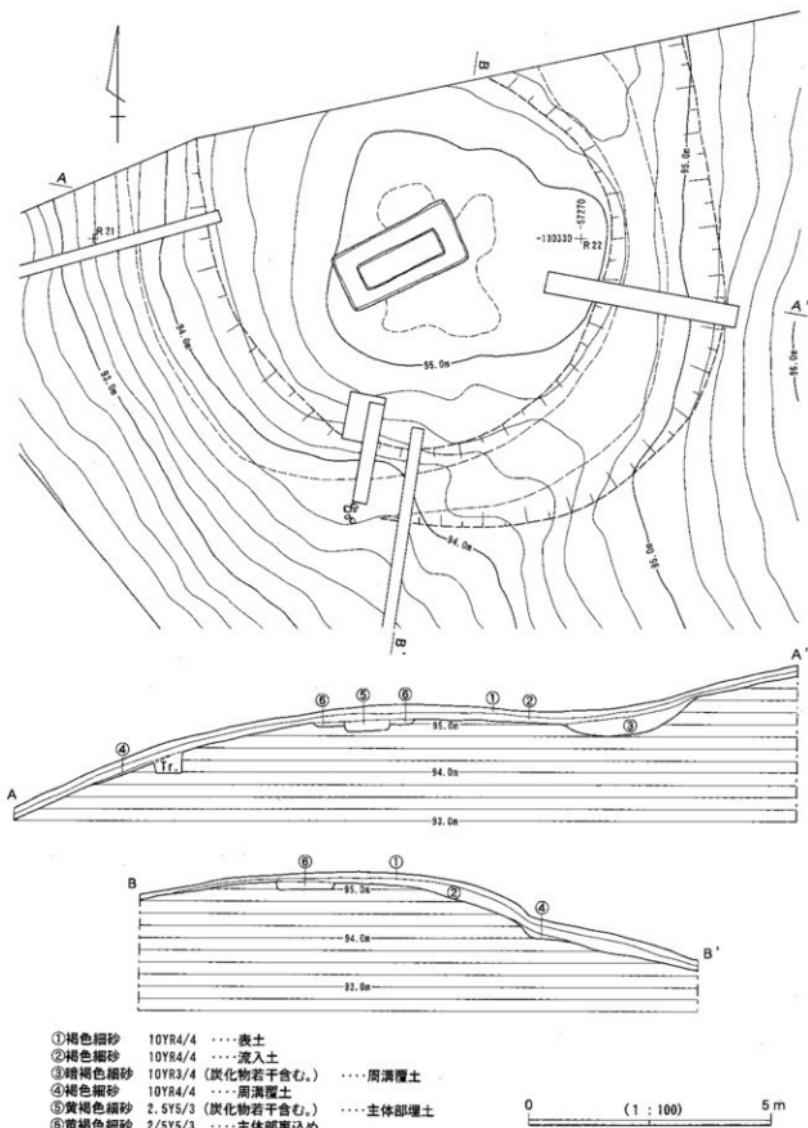
墳丘南側の削り出した平坦面（標高93.8～93.9m）から、土師器杯4点（76～79）が出土している。出土状態は、口縁部を上に向かた正置の状態で置かれていた。斜面地のためやや下に落ち込んでいるが、本来は正方形に並置されていた可能性が高い。また、墳丘上の表土から、須恵器・土師器（70～75）が出土している。



第37図 寺山11号墳表土出土遺物



第38図 4区地形測量図

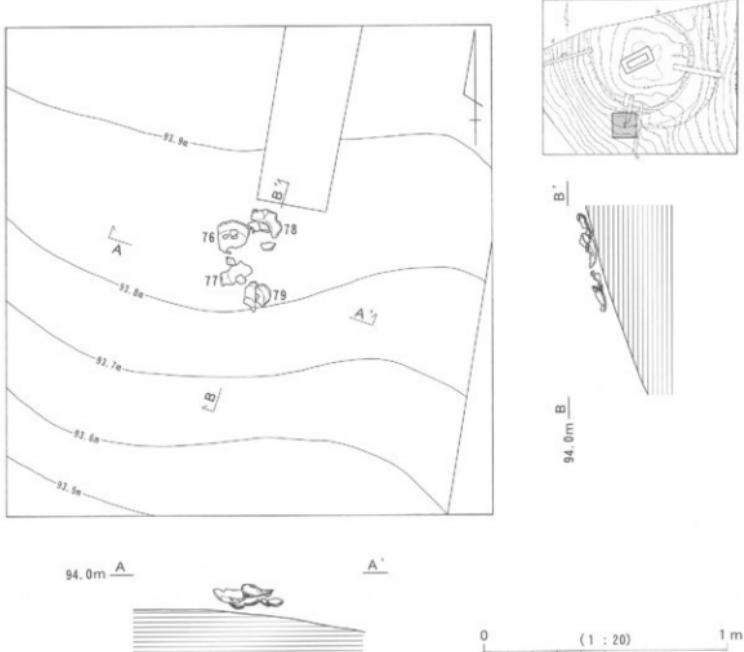


第39図 寺山11号墳地形測量図

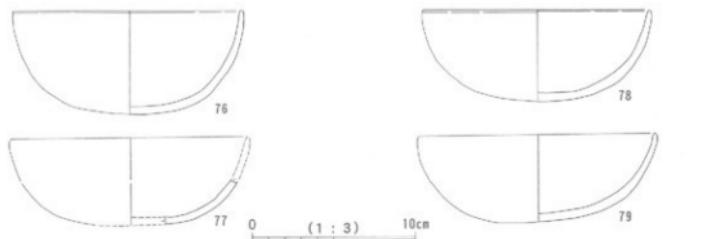
3 墳丘・周溝出土遺物（第37・41図、巻頭図版4、図版23・29、第10表）

墳丘表土からは須恵器、土師器が、周溝から土師器4点出土した。

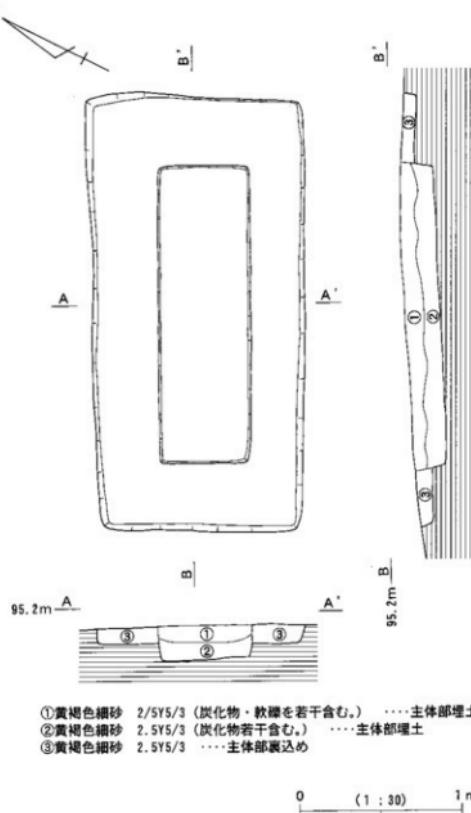
須恵器 70はやや内傾気味に直立するたちあがりをもつ杯身である。口縁端部には段ではなく、丸く仕上げられている。残存部分の底部にはヘラ削りが確認できないことから、その範囲は底部の2/3以下であると推測する。口径は12.2cmをはかる。72には平瓶口縁部の破片であり、口縁端部は外傾する平坦面に仕上げられ、口縁直下には明瞭な稜線が確認できる。この部分を擬口縁状に成形した後、口縁部



第40図 寺山11号墳周溝南側遺物出土状況図



第41図 寺山11号墳周溝南側出土遺物実測図



第42図 寺山11号墳主体部実測図・土層図

ともに平面形は矩形である。下段の規模は全長1.8m、幅0.56m、深さ0.1mをはかる。上段は全長2.7m、幅1.3m、深さ0.1mをはかるが、墳丘の流出を考えれば、さらに上位より掘り込まれていた蓋然性が高い。墓壙の底面は水平であることから、箱形木棺を直葬したものと推測する。

副葬品は全く出土していない。

③築造時期

11号墳の築造時期にかんして、墳頂部から出土した須恵器、土師器は表土からの出土であり、11号墳の築造時期を推測する手がかりとしての信頼性が低い（註7）。墳丘南側では原位置を保持した状態で出土した4点の土師器杯から考えると、須恵器の遠江編年Ⅰ期後半（陶邑田近編年TK47型式）～Ⅲ期前葉（同TK10型式）に伴う土師器に形状が類似するが、把手付椀はこれよりも新しく位置づけられる可能性が高いことから、11号墳の築造時期は須恵器遠江編年Ⅱ期～Ⅲ期前葉、6世紀前半に

を付加している可能性がある。75は須恵器甕の胴部破片であり、外面はやや目の粗い平行タタキ、内面はやや目の粗い同心円タタキが施される。

土師器 71は土師器高杯の脚部片で、「ハ」字形に垂下する形状を呈する。脚部内側は中空である。73は把手付椀であり、把手を取り付く部分の破片である。接合時の指での圧着痕が確認できる。74は把手付椀の把手部分である。73、74は接合しない。76～79は墳丘の南側削り出した平坦面から口縁部を上に向かた正置の状態で四角形に並べられた状態で出土した半球形の杯である。残存状況が劣悪であるが、口縁部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部でやや内彎する。口縁端部は丸く仕上げられている。底部は丸底を呈する。口径は13.5～14.5cm、器高は5.2～6.4cmとほぼ同大である。

②埋葬施設（第42図、図版20）

11号墳の埋葬施設は、墳丘のほぼ中央に納められた木棺直葬である。主軸方位はN-65°-Eをとり、ほぼ北東-南西方向を向く。

墓葬は二段墓壙であり、上下段

位置づけられる可能性が高い。

なお、72～75は土師器杯よりも新しく（遠江Ⅲ期中葉～Ⅳ期前半以降）位置づけられることから、調査区外に横穴式石室を内蔵する古墳があり、その古墳からの流れ込みか、あるいは築造後のなんらかの祭祀に伴う遺物である可能性が高い。

（2）12号墳

①墳丘

1 立地と古墳の現状（第9図）

12号墳は、11号墳と同一尾根上に位置し、11号よりも2～4m高い位置（標高97.0～98.6m）に立地している。

調査前は11号墳と同様、やや傾斜のある丘陵斜面地に瘤状の高まりとして認識することができた。その形状から墳丘は尾根の上部側に周溝を掘削し、その土砂を西側に積載した斜面地に特徴的な古墳と想定できた。

2 墳丘・周溝（第38・43図、図版19・21）

11号墳同様、墳丘断ち割り調査の結果、墳丘の盛土は既に流出していることが判明した。墳丘は自然地形を巧みに利用し、地山を削り出して築造されている。周溝は丘陵を切断し北東から東側をへて南東まで「コ」字形に掘削され、それ以外の部分は削り出しによって周溝に替えている。周溝は最大幅約1.5m、深さ0.4mをはかる。

12号墳の墳形は東側周溝が直線的に掘削されることに起因して、「D」字形に近いやや不整形な円墳である。墳丘規模は周溝の上端で東西約7.5m、南北約7.1mをはかる。現状での見かけ上の高さは西側の削り出し端部が標高97.0m付近で、墳丘中央部が98.6m付近であることから約1.6mであり、低平な古墳といえる。

3 墳丘および周溝出土遺物（第44図、図版30、第10表）

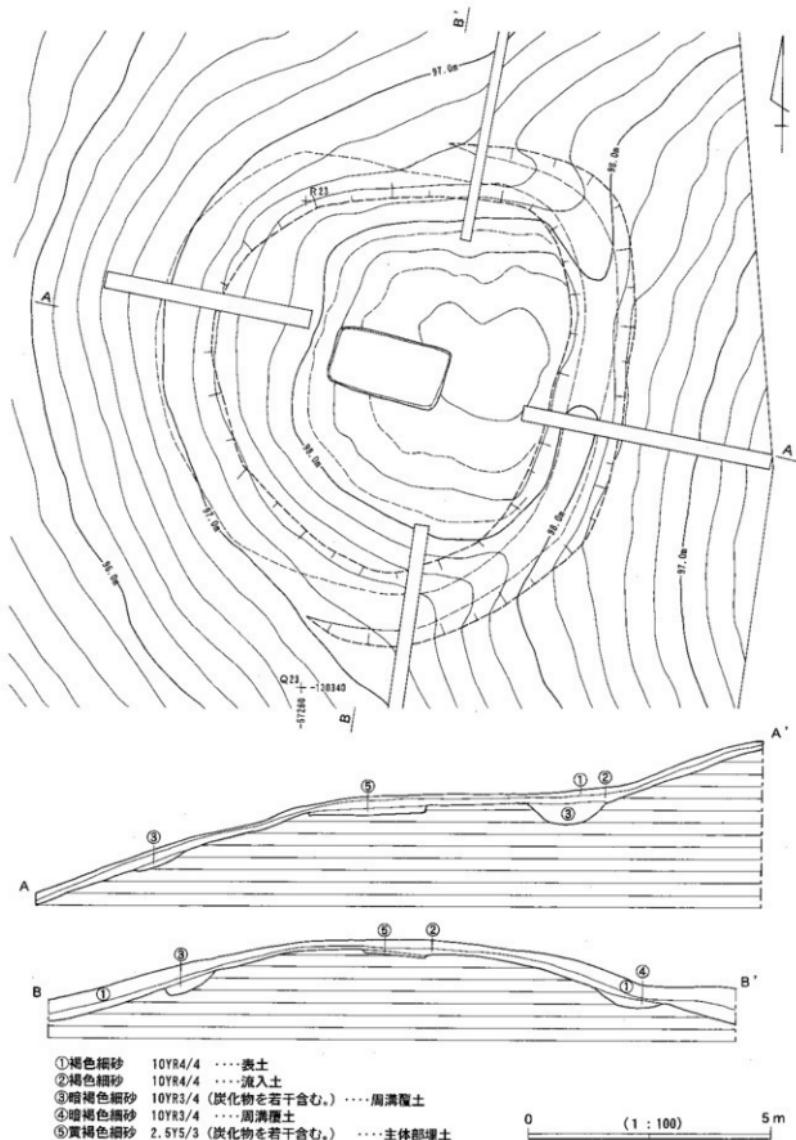
墳丘上の表土中より土師器高杯1点（86）、周溝北東側の周溝底部直上から土師器壺片2個体分（80～85）が出土した。

高杯（86）は胴部で「く」の字形に屈曲したあと、外方に向けて直線的に広がる形態を呈し、口縁端部は丸く仕上げられている。14号墳の墳丘表土中から出土した土師器高杯（第10図1）に類似する。壺片（81～85）は接合しないが、出土位置や色調、胎土などの特徴から判断すると同一個体である可能性が高い。81は頸部～口縁部の破片であり、頸部で「く」の字形に屈曲した後、外方に向かい直線的に広がり、口縁端部は丸く仕上げられている。82～84は胴部片であり、外面は継方向のハケメ、内面は横方向のヘラ削りが看取できる。85は胴最下部片であり、破片下部には横方向のハケメが観察できる。壺口縁部片（80）は、81～85とは色調、胎土の特徴が異なることから別個体である。形状はほぼ口縁部片（81）と同形態であり、頸部で「く」の字形に屈曲した後、外方に向かい直線的に広がり、口縁端部は丸く仕上げられている。

②埋葬施設

1 墓壙・木棺（第45図、図版21）

12号墳の埋葬施設は墳丘のはば中央に地山を掘削して、木棺を直葬したものである。主軸方位は



第43図 寺山12号墳墳丘測量図・土層図

N - 105° - E をとり、ほぼ東西を向く。

墓壇の平面形は隅丸長方形であり、その規模は全長約 2.38 m、幅 1.34 m、深さ約 10 cm をはかる。墓壇の底面が平坦であることから、使用された木棺は箱形木棺と推測する。土層を観察すると、墓壇内の上層を 2 層に区分できる可能性があることから、墓壇の内側部分（第 45 図第①層）が木棺の痕跡を示唆するものと判断した。その形状は東西に長い長方形であり、規模は長辺 1.75 m、短辺 0.75 m をはかる。

2 遺物出土状況（第 45 図、図版 21）

埋葬施設中央やや東より鉄剣が切先を南西へ向けて、その茎付近より刀子茎片が出土した。鉄剣は切先が破断した状態で、刀子は茎のみの出土であった。

頭位は鉄剣の切先が西側を向くことを根拠として、東頭位と想定する。

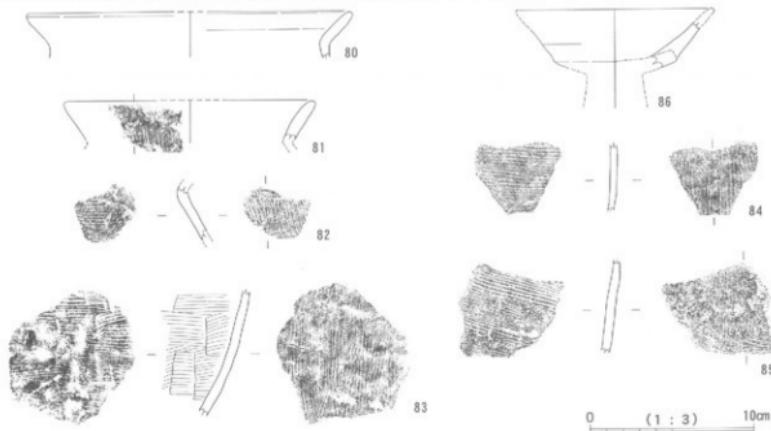
3 埋葬施設出土遺物（第 46 図、図版 30）

鉄剣 1 振（87）、鉄製刀子 1 点（88）が出土した。2 点ともに錆化が進行し、一部が剥離し始めるなど遺存状況は必ずしも良好とはいえない状況にある。

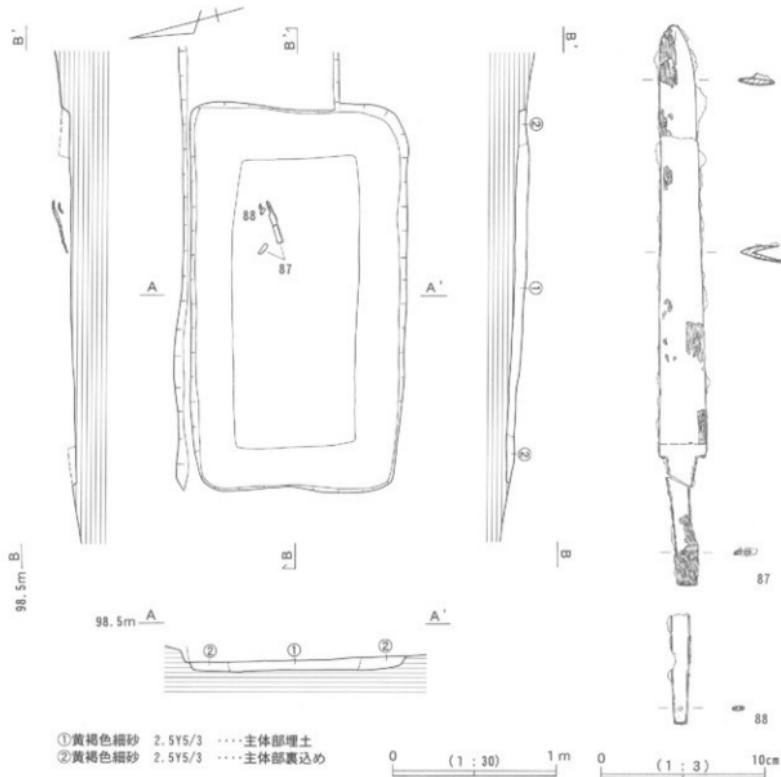
鉄剣 87 は鍛造された鉄剣であり、全長 34.0 cm をはかる。剣身には鏽が確認できず、断面は平造り（凸レンズ状）である。剣身長 26.2 cm、同幅 2.9 cm、同厚さ 4 mm をはかる。関はほぼ均等の直角両開であり、4 ~ 5 mm をはかる。茎は茎尻に向かってやや幅を狭める形態を呈し、断面は横長長方形である。茎尻は隅丸の一文字尻である。茎長 7.7 cm、関側幅 1.8 cm、茎尻側幅 1.1 cm、厚さ 2 mm をはかる。目釘孔は茎尻より約 2.0 cm のところに 1 孔確認でき、直径 2 mm をはかる。目釘は遺存していない。

剣身および茎部分には両面に木質が錆着し、その木目は刃部に平行する。この木質は関より 8 mm 刃部側のところから、茎尻より 4.3 cm の間 4.5 cm の範囲には木質が両面ともに遺存しないことから、この部分に木製以外の有機質の柄緑装具が取り付けられていた可能性もある。

鉄製刀子 鍛造された刀子の茎（88）である。茎尻に向かいやや先細る形状である。残存長 6.5 cm、関側幅 1.1 cm、茎側幅 0.75 cm をはかる。断面は横長長方形であり、厚さ 2 mm をはかる。茎尻側より 8 mm のところで直径 3 mm の目釘孔が確認できるが、目釘は遺存しない。両面ともに木質は錆着していない。



第 44 図 寺山 12 号墳墳丘・周溝出土遺物実測図



第45図 寺山12号墳主体部実測図・遺物出土状況図

第46図 寺山12号墳主体部
出土遺物実測図

③築造時期

12号墳の築造時期は、出土した土師器高杯の特徴が14号墳の墳丘から出土したものと類似することから、須恵器遠江編年Ⅰ期前半（TK47型式）～Ⅲ期前葉（TK10型式）に位置づけられる可能性が高い、5世紀末～6世紀前半に築造された古墳である蓋然性が高い。

（註7）表土中より出土した須恵器杯身、土師器把手付椀は遠江編年Ⅱ期～Ⅲ期前葉に位置づけることが可能であるが、11号墳よりも斜面の上部にある12号墳がこの時期に位置づけられることから、これらの遺物は12号墳からの流れ込みの可能性もあり、どちらの古墳に伴う遺物か確定することはできない。

6. 5区の調査成果

(1) 遺構 (第48図、図版22)

位置 丘陵の頂部、最高点標高約119mをはかり、社山城と片瀬城を結ぶ延長線上に位置している。この地点からは一宮川が流れる平野部分、太田川が開削した磐田原台地東縁から小笠山丘陵の間の平野部を見渡すことができる。また、北西側は現在、新平山工業団地となっている丘陵部や仲明古城跡が確認でき、砦や狼煙台として最適の場所にあるといえる。

遺構 しかし、明確な遺構は確認できなかった。この理由としては、丘陵北側の風雨あるいは地滑りによる浸食が著しく進行しており、調査区北側には大きな谷が入り込んでいる。したがって、丘陵頂部の存在していた平坦面が既に崩落し、そこに存在したであろう遺構も消失した可能性が高い。また、確認調査当時、削り出しと考えていた南側斜面途中の平坦面は、地滑りにより形成された平坦面であることが判明した。

したがって、表土除去終了後、地形測量、遺物の取り上げを実施し、調査を終了した。

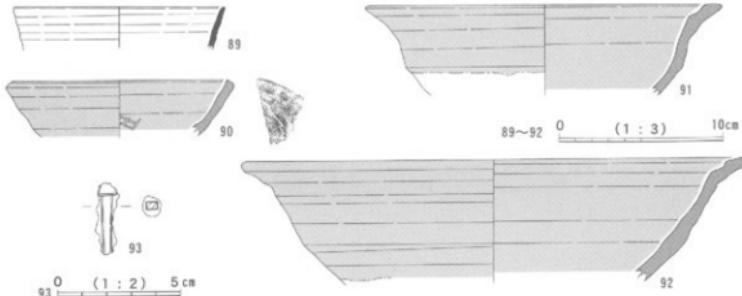
(2) 出土遺物 (第47図、図版30、第10表)

表土中より須恵器、古瀬戸、鉄製品が出土した。

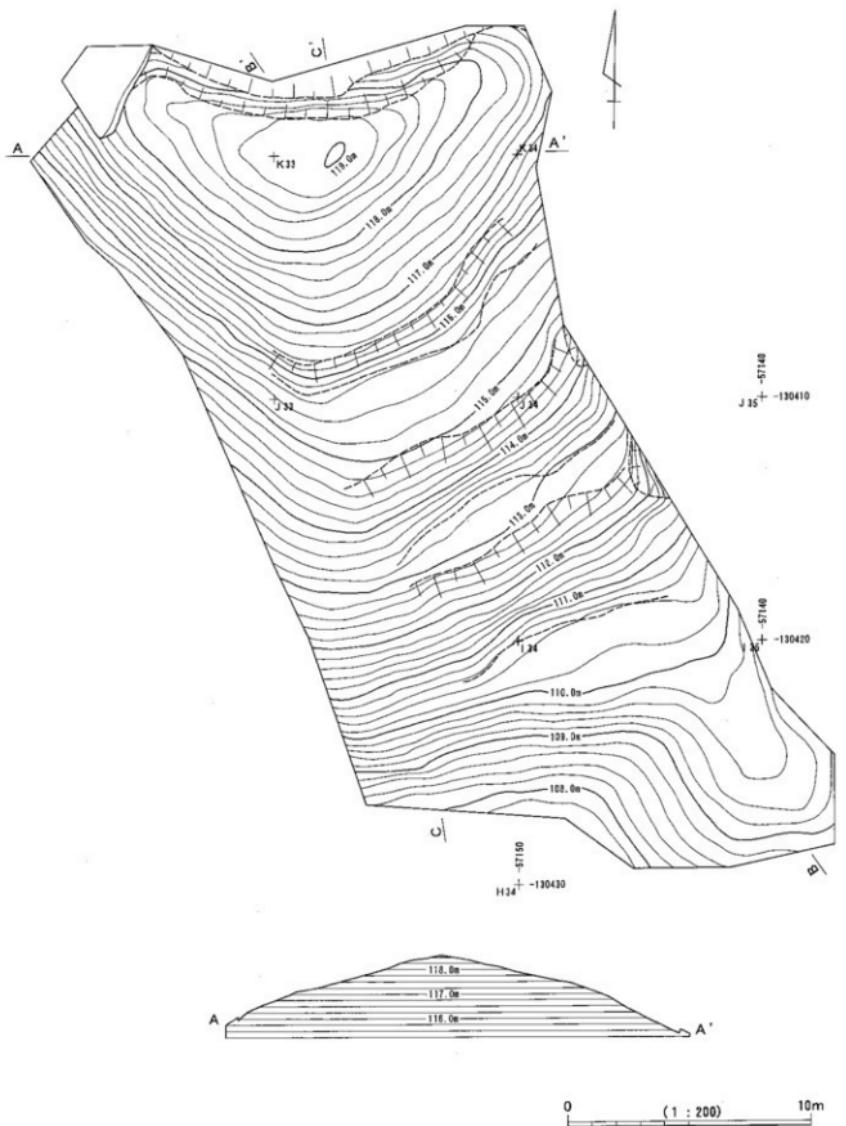
不明鉄製品 93は残存長2.9m、幅0.8cmの破片である。上部より5mmの部分が間のように段が確認できることから鉄釘の頭部～茎の破片である可能性が高い。断面は方形である。

須恵器 89は有台杯の口縁部片の可能性が高い。奈良時代の所産と考えられる。

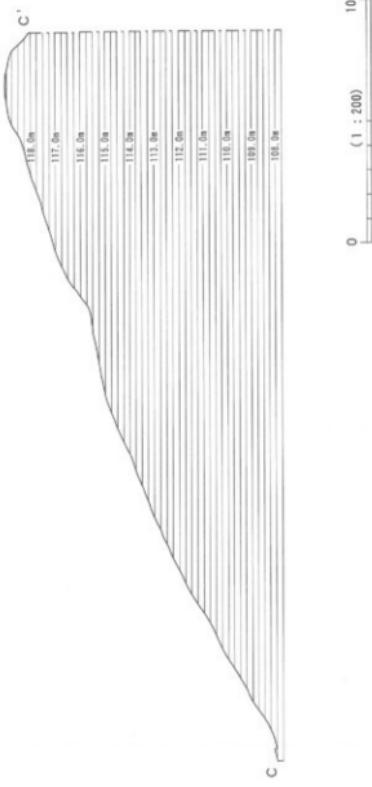
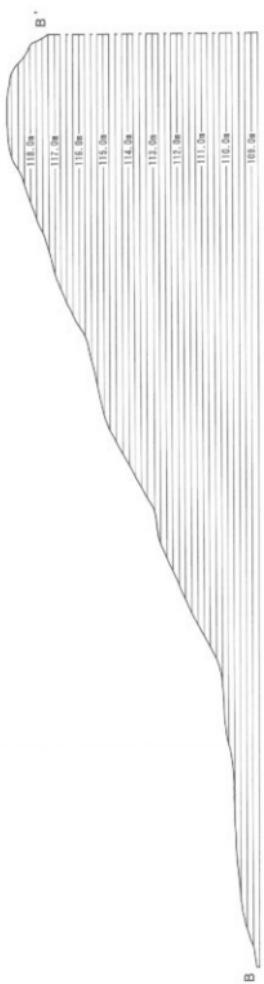
古瀬戸 91・92は折縁深皿、90は卸皿の底部～口縁部片である。内面下部に線刻で斜格子状に刻目(鉢部分)をつけている。口縁端部は、角張り、平坦面を形成しているが、内側は小さく摘み上げられている。釉薬は破片全体に塗布されている。91・92は折縁深皿の胴部～口縁部破片であり、胴部は底部と胴部の境に明瞭な屈曲があり、口縁部は外折したあと一端厚さを増すが、端部は先細る傾向にある。端部上面は平坦に仕上げられる。釉薬は灰釉であり、底部外周の稜の部分以外全面施されている。古瀬戸の3点はその形態的特徴から藤沢編年中IV期に位置づけることが可能である(藤沢1996)。



第47図 5区出土遺物実測図



第48図 5区地形測量図・断面図



0 (1 : 200) 10m

第10表 寺山古墳群出土土器観察表

番号	国版	調査区	遺構・層位	種別	器種	反転率	口径(cm)	器高(cm)	色調	時期	その他
10	24	1 1区	14号埴表土	土師器	高杯	5%反	12.6	3.5	黄橙色	6C前半	
10	24	2 1区	14号埴表土	土師器	高杯	30%反			橙色	6C前半	
10	24	3 1区	14号埴表土	土師器	高杯	30%反			橙色	6C前半	
10	24	4 1区	14号埴表土	土師器	高杯	30%反			橙色	6C前半	
10	24	5 1区	14号埴表土	土師器	高杯	20%反			褐色	6C前半	
10	24	6 1区	14号埴表土	土師器	深鉢	5%反	11.0	3.4	黄橙色	6C前半	
10	24	7 1区	14号埴 周溝西側	土師器	碗	10%反	12.4	4.2	橙色	6C前半	
23	24	58 2区	表土	須恵器	杯蓋	30%反			灰黄色	6C前半	
23	24	59 2区	表土	須恵器	杯身	5%反		2.0	灰黄色	奈良?	
23	24	60 2区	表土	灰釉 陶器	碗	30%反		1.6	灰黄色	9C末~ 10C前半	底部径 6.7cm
28	29	61 3区	表土	縄文土器	深鉢	5%以下			橙色	縄文後期	寺津下層式
28	29	62 3区	表土	須恵器	長頸瓶	10%反		2.4	灰黄色	8C前半?	底部径 7.2cm
28	29	63 3区	表土	土師器	杯	10%反	15.8	3.2	黄橙色	7C後半	赤彩か?
36	29	66 3区	13号埴 石室裏込め	須恵器	返蓋	20%反	12.4	1.8	灰黄色	7C後半	天井・自然釉
36	29	67 3区	13号埴 石室裏込め	須恵器	返蓋	20%反	12.6	1.8	灰黄色	7C後半	天井・自然釉
36	29	68 3区	13号埴 石室埋土	須恵器	杯身	5%反	13.4	3.7	灰白色	7C後半	
36	29	69 3区	13号埴 石室埋土	土師器	盤	10%反	21.6	2.0	黄橙色	7C後半	内外面赤彩
37	29	70 4区	11号埴表土	須恵器	杯身	20%反	12.2	3.8	灰黄色	6C前半	受部径 14.0cm
37	29	71 4区	11号埴表土	土師器	高杯	20%		2.7	橙色	6C前半?	
37	29	72 4区	11号埴表土	須恵器	平瓶?	5%反	9.5	2.6	灰黄色	7C	内面・自然釉
37	29	73 4区	11号埴表土	土師器	把手付碗	10%反		6.0	橙色	6C前半	
37	29	74 4区	11号埴表土	土師器	把手付碗	10%			橙色	6C前半	長さ 5.3cm
37	29	75 4区	11号埴表土	須恵器	甕	5%以下			灰黄色	7C?	
41	29	76 4区	11号埴 周溝南側	土師器	杯	30%反	14.1	6.3	橙色	6C前半	
41	29	77 4区	11号埴 周溝南側	土師器	杯	20%反		2.8	橙色	6C前半	
41	29	78 4区	11号埴 周溝南側	土師器	杯	30%反	14.0	5.8	橙色	6C前半	
41	29	79 4区	11号埴 周溝南側	土師器	杯	30%反	14.2	5.3	橙色	6C前半	
44	30	80 4区	12号埴 周溝北東	土師器	甕	5%以下		2.7	黄橙色	6C~7C	
44	30	81 4区	12号埴 周溝北東	土師器	甕	5%以下		2.3	黄橙色	6C~7C	
44	30	82 4区	12号埴 周溝北東	土師器	甕	5%以下			黄橙色	6C~7C	
44	30	83 4区	12号埴 周溝北東	土師器	甕	5%以下			黄橙色	6C~7C	
44	30	84 4区	12号埴 周溝北東	土師器	甕	5%以下			黄橙色	6C~7C	
44	30	85 4区	12号埴 周溝北東	土師器	甕	5%以下			黄橙色	6C~7C	
44	30	86 4区	12号埴表土	土師器	高杯	10%反		2.8	橙色	6C前半	
47	30	89 5区	表土	須恵器	杯身	5%反	13.0	2.6	灰白色	8C後半?	
47	30	90 5区	表土	古瀬戸	銅皿	5%反	13.2	3.4	灰黄色	14C中頃	
47	30	91 5区	表土	古瀬戸	折縁 深皿	30%反	21.0	5.5	灰黄色	14C中頃	
47	30	92 5区	表土	古瀬戸	折縁 深皿	30%反	31.0	7.5	灰黄色	14C中頃	

第11表 寺山14号墳第2主体部出土鐵鎌觀察表

拂図	図版	遺物番号	保存処理前重量(g)	状態	全長(cm)	鎌身長(cm)	鎌身幅(cm)	逆刺長(cm)	頭部長(cm)	頭部幅(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)
20	26	10	22.414	茎欠損	(17.5)	(2.7)	0.9	(0.4)	9.8	0.6	5.4	0.5
20	26	11	12.983	茎欠損	(13.3)	(2.3)	0.7	0.5	10.2	0.5	(0.7)	0.6
20	26	12	3.679	茎片	(6.9)	—	—	—	—	—	6.9	0.4
20	26	13	16.632	茎欠損	(17.3)	3.4	0.8	0.5	9.2	0.6	(5.1)	0.5
20	26	14	14.064	茎欠損	(16.3)	(2.3)	0.9	(0.5)	9.3	0.6	(5.0)	0.4
20	26	15	14.343	完存	16.6	3.1	0.8	0.7	9.0	0.5	5.1	0.5
20	26	16	15.894	ほぼ完存	17.0	2.6	0.8	0.6	9.4	0.5	5.7	0.5
20	26	17	17.512	完存	16.8	3.0	0.9	0.6	9.0	0.5	5.3	0.5
20	26	18	13.905	鎌身・茎欠損	(15.9)	(2.2)	0.7	0.6	9.6	0.5	(4.8)	0.5
20	26	19	15.401	鎌身・茎欠損	(13.5)	(1.9)	0.9	0.5	(0.7)	0.5	(3.5)	0.5
20	26	20	1.202	茎片	(3.6)	—	—	—	—	—	(3.6)	0.5
20	26	21	18.612	茎欠損	(15.4)	2.9	0.8	0.6	8.6	0.6	(4.5)	0.6
20	26	22	18.295	茎欠損	(16.2)	3.7	0.9	0.8	8.4	0.5	(5.3)	0.5
20	26	23	13.236	完存	16.5	3.2	0.8	0.7	8.2	0.4	5.7	0.4
20	26	24	12.164	茎欠損	(16.0)	2.5	0.8	0.4	8.5	0.5	(5.3)	0.4
20	27	25	15.951	茎欠損	(14.8)	3.9	0.7	0.9	7.8	0.5	(4.0)	0.5
20	27	26	16.378	茎欠損	(15.5)	2.5	0.8	0.3	8.0	0.6	(5.3)	0.5
20	27	27	17.505	ほぼ完存	16.5	2.8	(0.8)	0.5	8.1	0.6	6.1	0.5
21	27	28	16.215	茎欠損	(15.5)	3.6	0.9	0.9	9.4	0.5	(3.3)	0.6
21	27	29	16.754	茎欠損	(15.7)	(2.4)	0.8	(0.2)	9.5	0.6	(3.8)	0.5
21	27	30	17.462	茎欠損	(15.3)	(2.6)	0.9	0.4	9.2	0.5	(3.7)	0.5
21	27	31	2.272	鎌身・頸部 ・茎欠損	(3.0)	(2.6)	0.9	(0.4)	(0.8)	0.5	—	—
21	27	32	11.339	鎌身・茎欠損	(14.4)	—	—	—	(7.4)	0.6	(3.0)	0.6
21	27	33	12.476	茎欠損	(13.7)	2.4	0.8	0.6	9.7	0.5	(2.0)	0.5
21	27	34	15.566	茎欠損	(14.2)	(2.4)	0.7	(0.8)	9.8	0.5	(2.6)	0.4
21	27	35	15.691	茎欠損	(13.0)	2.7	0.8	0.5	9.6	0.5	(1.2)	0.6
21	27	36	12.810	茎欠損	(13.5)	2.6	0.8	0.7	9.5	0.6	(2.1)	0.5
21	27	37	11.179	茎欠損	(12.3)	2.8	0.8	0.7	9.4	0.5	(0.6)	(0.2)
21	27	38	14.552	茎欠損	(12.0)	3.0	0.9	0.6	9.2	0.6	(0.4)	0.6
21	28	39	17.444	茎欠損	(13.4)	2.8	0.9	0.5	9.2	0.6	(1.8)	0.4
21	28	40	16.461	茎欠損	(13.1)	(3.0)	0.8	0.5	8.7	0.5	(1.8)	0.4
21	28	41	14.932	茎欠損	(13.9)	3.4	0.9	0.5	8.7	0.5	(2.2)	0.5
21	28	42	14.419	茎欠損	(13.5)	3.3	0.9	0.6	8.6	0.5	(2.4)	0.5
21	28	43	13.705	鎌身・茎欠損	(13.2)	(2.8)	0.8	0.6	8.6	0.5	(2.3)	0.5
21	28	44	15.280	茎欠損	(15.9)	(2.7)	0.8	(0.4)	9.2	0.6	(4.5)	0.5
21	28	45	13.159	鎌身・茎欠損	(11.7)	(2.6)	0.9	0.9	8.7	0.6	(1.0)	0.5
21	28	46	15.299	茎欠損	(11.8)	(3.2)	0.8	(0.5)	8.5	0.5	(0.7)	0.5
21	28	47	14.925	鎌身・茎欠損	(12.3)	(2.1)	0.7	0.5	8.5	0.6	(2.1)	0.5
21	28	48	14.365	鎌身・茎欠損	(13.3)	(1.0)	(0.8)	(0.1)	8.7	0.5	(2.2)	0.5
21	28	49	13.213	鎌身欠損	(15.1)	—	—	—	(9.1)	0.6	(2.3)	0.5
21	28	50	6.417	頸部・茎欠損	(7.0)	(2.9)	0.9	(0.4)	(4.4)	0.5	—	—
21	28	51	2.505	茎片	(2.5)	—	—	—	—	—	(2.5)	0.6
21	28	52	1.593	茎片	(3.6)	—	—	—	—	—	(2.6)	0.4
21	28	53	1.124	茎片	(3.9)	—	—	—	—	—	(2.7)	0.4
21	28	54	1.925	茎片	(4.9)	—	—	—	—	—	(2.8)	0.3
21	28	55	0.675	茎片	(3.4)	—	—	—	—	—	(2.9)	0.2

括弧内は残存値。

第4節 寺山14号墳出土鉢柄の樹種について

寺山14号墳の第2主体部から鉢が1点出土した。この鉢の袋部には柄の木質が極めて良好に遺存していた。そのため、木質部から小片を採取しプレバラート標本を作製し、生物顕微鏡で検鏡することで樹種同定を行った。

古墳から出土する鉄製品や青銅製品には木材、布などの有機質遺物が断片的に遺存することがある。木材などの有機質遺物は、地下水位以下に埋没した遺跡から出土することが一般的で、乾燥や湿潤を繰り返す丘陵上に位置する古墳から出土することは稀である。古墳などの埋没環境では、木材を腐らせる微生物（木材腐朽菌）が活動するための十分な酸素と水が供給されるため、木材は土壤中で分解され消滅してしまう。しかし、今回のように金属部分に密着した木材は、微生物に分解される前に鉛などの鉱物質のものが沈着し、硬質化することで形状が保たれることがある。掲載した顕微鏡写真では確認できないかもしれないが、水漬出土木材の細胞組織によく見られる木材腐朽菌等の菌糸が今回のプレバラートではほとんど観察できなかったことは、この材が埋没後かなり早い時期に鉱物質化したことを見示すものではないだろうか。

試料は、写真14が示すように $2.5\text{ cm} \times 1.5\text{ cm}$ の袋部内部のほぼ全体に遺存しているが、複数に割れて隙間に土砂や鉛が入り込んでいる。木取りは、年輪の形状から心持丸太材ではなく削材を棒状に削りだしたものであることが分かる。

樹種同定のためのプレバラート標本の作製は研磨法で行い、断面方向の異なる木口2点、柾目2点、板目1点の計5点を作製した。遺跡から出土する水漬けの出土木材のプレバラート標本作製では、通常、試料が柔らかいためカミソリ刃で直接遺物から薄い切片を削りだすハンドセクション法による。しかし、炭化材、漆製品の漆塗膜、鉱物質化した今回のような硬い材では、いわゆる刃が立たないので研磨法によることが多い。研磨法とは、試料小片を透明なエポキシ樹脂に埋め込んだ後、透過光で検鏡できる厚さまで研磨する方法である。作業工程は、目の荒い150番の耐水サンドペーパーから研磨し、番数を上げてゆき2000番までサンドペーパーの上で研磨する。その後、研磨粉（アルミパウダー）4000番を溶かした水を含ませた柔らかい布の上で最終的な鏡面仕上げの研磨をする。なお、作製した標本は当研究所清水整理事務所保存処理室で保管している。

樹種同定の方法は、上記の工程で作製したプレバラート標本を生物顕微鏡によって40～400倍で観察し現生標本および文献資料と比較しながら行った。以下に同定に利用した材の解剖学的特徴を示す。

カバノキ属 *Betula* カバノキ科

道管の配列：散孔材、道管は中～小型。直径は最大で接線径 $100\text{ }\mu\text{m}$ 、放射径 $140\text{ }\mu\text{m}$ 。配列は、単独あるいは放射方向に2～数個が接合して均一に、密度がやや低く散在する（写真15）。道管の穿孔板は階段状で、bar（横線）の数は10本前後である。間隔はやや広め（写真18・19）。道管側壁の壁孔は微細で、交互状に配列し、壁孔の壁の部分が連なって螺旋肥厚のように見える（写真19）。



写真14 鉢柄の木質の遺存状態

放射組織：放射組織は同性で、1～5細胞列、30

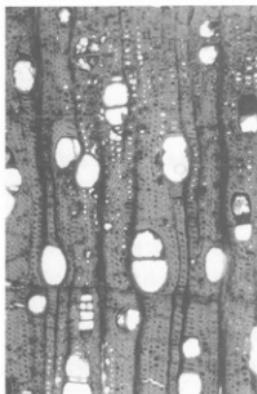


写真 15 木口 70×

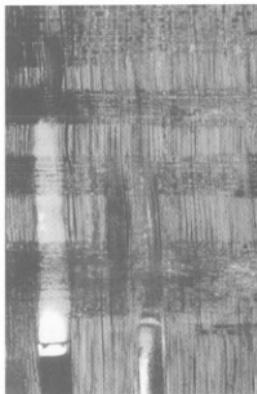


写真 16 桟目 70×

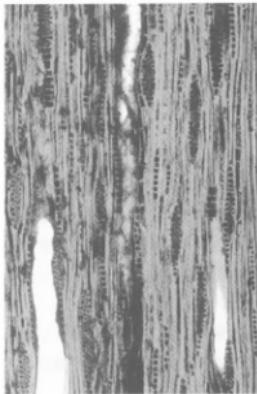


写真 17 板目 70×



写真 18 桟目 200×

階段穿孔の bar の正面

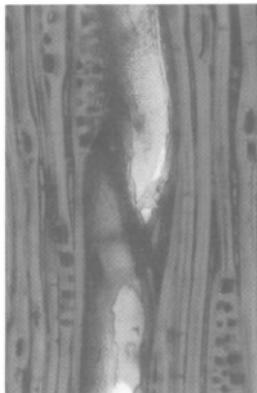


写真 19 板目 200×

階段穿孔の bar の断面



写真 20 桟目 200×

道管と射出組織との壁孔

細胞高。道管と射出組織との壁孔は小さく密集する（写真 20）。

以上の形質によりカバノキ属の材と同定した。

カバノキ属にはダケカンバ、ミズメ、ウダイカンバ、シラカンバなどの種があり、材構造は似ていて種の識別は困難である。いずれの材も建築材、器具などに広く使われる粘りのある硬い良質な木材である。県内では大井川町藤守遺跡から古墳時代後期の棒状加工木（削材）と自然木（丸太材）が出土している（静文研 2002）ほか、静岡市小鹿杉本堀合坪遺跡から平安時代の野球用バットのグリップに似た用途不明木製品（削材）が出上している。また、梓弓のアズサはミズメだといわれている。

最後に、樹種同定結果については、東北大学大学院理学研究科の鈴木三男教授に最終確認と貴重なご指導をいただいた。ここに記して、深く感謝申し上げます。

第5節 結語－寺山古墳群の位置づけ－

1. 寺山14号墳第1主体部について

寺山14号墳第1主体部はいわゆる「石棺系小堅穴式石室」であり、木棺直葬が主体となる遠江の堅穴系埋葬施設の中では極めて特異な存在といえる。ここでは、まずこの「小堅穴式石室」の位置づけについて考えてみることとする。

最初に、その構造を再度確認しておこう。第1主体部は板状の石材を箱形石棺状に構築し、この上に小型の板石を2段平積みした後で天井石を架構したものであり、上空から見た場合あたかも堅穴式石室のようにみえるものである。近接する豊岡村五反田遺跡出土の箱形石棺とされるものや小笠町代ノ谷古墳の箱形石棺とされるものなど未公表のためいくつかの詳細は不明であるが、確認できた範囲ではこのような構造の堅穴系埋葬施設は遠江で唯一の事例である。一般的に寺山14号墳のような小堅穴式石室

第12表 遠江・駿河における「箱形石棺」・「小堅穴式石室」出土古墳地名表

古墳名	所在地	棺形態	規模	頭位	副葬品	時期	文献
寺山14 第1主体部	磐田郡 豊岡村	石棺系 小堅穴式石室	1.95×(0.3~0.5) ×0.3 m (復元内法)	北	不明 (周溝・埴丘)土師器 杯5・楕1・深鉢1	5世紀後半 (TK23~TK47)	本書
上神増E1	磐田郡 豊岡村	板状石材を用いた箱形櫛部		東西	玉類	6世紀前半 (TK10)	大谷1998・99 現在資料整理中
五反田遺跡 中の1基	磐田郡 豊岡村	箱形石棺か			未公表のため不明		向坂、柴田両氏の ご教示による
文殊堂8 第3主体部	尾智郡 森町	箱形石棺		南北	鉄斧	5世紀中葉~ 後半	大谷2000、田 村2001 現在資料整理中
高代山3	掛川市	箱形石棺	1.9×(0.3~0.4)× 0.3 m (内法)	北	鉄刀1・鉄鎌1・ 刀子1	5世紀中葉~ 後半	掛川市教委1970
高田ヶ原2	小笠郡 菊川町	箱形石棺			未公表のため不明		静岡県教委1986 中の文章による
高田ヶ原 6・7次1	小笠郡 菊川町	小堅穴式石室	1.44×(0.45~ 0.57)×(0.50~ 0.58)m (内法)	北	瑪瑙勾玉1・碧玉管 玉9・緑色凝灰岩管 玉2・ガラス丸玉 8・ガラス小玉19	5世紀後半~ 6世紀前半	菊川町教委1994
高田ヶ原 6・7次2	小笠郡 菊川町	箱形石棺	1.6×0.48×0.25 m (内法)	東西	鉄鎌2	6世紀前半	菊川町教委1994
高田ヶ原 6・7次3	小笠郡 菊川町	箱形石棺	0.93×0.25×0.2 m (内法)	北	なし	6世紀前半?	菊川町教委1994
代ノ谷古墳	小笠郡 菊川町	箱形石棺			未公表のため不明		静岡県教委1986 中の文章による
高草20	藤枝市	箱形石棺	1.6×0.4×0.3 m (内法)	東西	(周溝)土師器杯1・ 壹1・須恵器高杯1	TK23~TK47	藤枝市教委1981
萩ヶ谷A10	藤枝市	小堅穴式石室	1.75×0.5×0.4 m	東西	(周溝)須恵器杯身1	MT15	藤枝市教委1980
釣瓶落2	藤枝市	小堅穴式石室 (堅穴系横口式石室の可能性あり)	3.0×1.5×0.9 m		馬具(環状鏡板付 帶)・鉄刀2・鉄 鎌・管玉20・須恵器 杯蓋3・杯身3・高 杯1・楕2・脚付三 連壇1・壹1・提瓶 1・土師器杯1	TK10~MT85	藤枝市教委1983
多田大塚4	田方郡 韭山町	板状石材を用いた櫛部	3.9×1.5×0.5 m	北	鏡1・横矧板鏡留短 甲1・鉄刀1・鉄 鎌・金具1・鐵鎌 23・金銅裝f字形 鏡板付帶1対・刀子 2	TK23	静岡県教委2001

このほかに箱形石棺の可能性が指摘されるものは、豊岡村大手内1号墳第2主体部と掛川市高代山4号墳がある。前者は鉄製板状穴窓が出土していること、大手内古墳群では板石を立てて腰石となる横穴式石室が存するところから、これは横穴式石室と判断された。後者は、破壊が著しく判断不可能であるが、周囲で板状の石材が確認されていることから箱形石棺の可能性が高く、主軸は東西である。

は堅穴式石室と箱形石棺の融合形態と想定されることが多い。遠江地域での横穴式石室導入以前の大小の堅穴式石室や箱形石棺をみると、大型堅穴式石室は4世紀末頃の磐田市松林山古墳、5世紀前半の掛川市各和金塚古墳のみであり、2m以下の小堅穴式石室は菊川町高田ヶ原遺跡6・7次調査1号墳がある。一方、箱形石棺としては菊川町高田ヶ原6・7次調査2・3号墳や掛川市高代山3号墳など数例を列挙することができる（第12表）。大型の堅穴式石室以外の小堅穴式石室や箱形石棺で寺山14号墳よりも以前に築造されたものは高代山3号墳のみである（第49図）。高代山3号墳と各和金塚古墳は近接しているが、それぞれ5世紀後半の築造と5世紀前半の築造であり時期差がある。また、寺山14号墳とは距離が離れている。したがって、寺山14号墳の（箱形石棺系）小堅穴式石室が、遠江地域の埋葬施設の伝統の中で複数の埋葬施設の融合や影響により創出されたとは考えにくい。

では、寺山14号墳第1主体部の成立にはいかなる要因が考えられるだろうか。

まず、東海地方に目を向けると、伊勢・志摩地域や三河地域でも箱形石棺は確認されているものの、時期的に寺山14号墳の築造時期（TK23～TK47型式併行期）を降るものが多く、また構造的に類似する石棺系小堅穴式石室も存在していない（註1）。東海地方西部からの影響は考えにくい。

つづいて、近畿地方では播磨・但馬地域などで小堅穴式石室や箱形石棺が確認されており、この両地域では伝統的墓制である。これらの中には寺山14号墳の築造時期を巡るものや構造的に類似するもののが多数確認できる。これら的小堅穴式石室を分析した福永伸哉氏は小堅穴式石室を大きく小型の堅穴式石室と（箱形）石棺系堅穴式石室に分類し、さらに後者を長側壁、短側壁の構造から4区分している。寺山14号墳はこのうち石棺系小堅穴式石室a類（類例として兵庫県養久山1号墳第6主体部）に比定できる。また、近畿地方においては畿内とされる地域には箱形石棺や小堅穴式石室は少なく、その北西部外縁地域に多いといえる（福永1992、清家2001）。したがって、寺山14号墳の成立に当たってはまず近畿地方のうち北西部の播磨・但馬地域からの影響を考えることができる。

さらに西の瀬戸内海沿岸地域でも同様の構造を有する小堅穴式石室が多数存在すると想定するが、徳島では確認できないようである（註2）。また、北部九州地域でも確認される（中間1986）。

したがって、寺山14号墳第1主体部（石棺系小堅穴式石室）は、遠江をはじめとする東海地方の墓制の伝統ではなく、さらに西の近畿地方北西部、瀬戸内海沿岸、北部九州地域との関係により成立した可能性が高い。遠江地域の伝統的な墓制ではない箱形石棺にも同様のことを想定できるだろう。

つぎに、遠隔地で石棺系小堅穴式石室が存在する理由についてはいかなる事由が想定できるか。

近畿地方北西部から北部九州地域との関連を遠江地域などの遺構や副葬品から考えてみると、遠江・駿河地域では5世紀後半代における北部九州に遅原をもつ堅穴式横口式石室の伝播は現状では確認できないが、寺山14号墳が築造された5世紀後半には、三河地域の愛知県岡崎市経ヶ峰1号墳、幡豆郡幸田町青塚古墳や幡豆郡幡豆町中ノ郷古墳に北部九州地域から伝播した堅穴式横口式石室が導入される（土生田1988）。また、経ヶ峰1号墳は、最新式の甲冑セットを有することから畿内中枢との強い紐帯が想定されている一方、金銅装内湾楕円形鏡板付簪や弓金具は畿内地域には類例が少なく、韓半島との関連性が強いこと、透孔鉄鏃は北部九州地域に起源があることを想定し、当古墳の被葬者の交流範囲が、畿内中枢部だけでなく、畿内中枢部を経ず韓半島を視野に入れ、北部九州地域との密接な関連性があったことが指摘される（鈴木2002）。また、同様の透孔鉄鏃は浅羽町五ヶ山B2号墳からも出土しており、この古墳も北部九州地域との繋がりを想定できる。4事例を例挙したに過ぎないが他にも北部九州地域と関連する数多くの事例が存在しており、箱形石棺が石棺系小堅穴式石室をはじめ東海地方は中期段階においても畿内中枢部を介在しない北部九州地域から瀬戸内海沿岸、近畿北西部とのつながりを想定することは十分可能となる。このような情勢の一環として、遅源地は確定できないが、寺山14号墳の石棺系小堅穴式石室は伝播・成立した可能性が高い。

	大型豎穴式石室	小豎穴式石室	石棺系小豎穴式石室	箱形石棺	櫛 棚
前期	1 				
中期前半	1 			7 	
中期後半	3 	2 	6 	8 	9
後期前半	4 	5 	8 	9 	11 豊岡村上神堀 E 1
後期後半		藤枝市釣瓶落2 (豎穴系横口式 石室か)	7 	10 	1～3 (1 : 200) 4～12 (1 : 100)

1 碧田市松林山 2 静岡市(旧清水市)三池平 3 揖川市各和金塚 4 菊川町高田ヶ原6・7次1

5 藤枝市萩ヶ谷A10 6 豊岡村寺山14 7 揖川市高代山3 8 菊川町高田ヶ原6・7次2

9 菊川町高田ヶ原6・7次3 10 藤枝市高草20 11 蓼山町多田大塚4

第49図 遠江・駿河における豎穴式石室・箱形石棺編年図

また、近畿地方の小堅穴式石室を分析した福永氏はこのような石棺系堅穴式石室の本貫地を大きく飛び越えて点在する理由としては、この種の埋葬施設を使用する他地域の集団と深い関係をもつ被葬者集団が採用したものとし、具体的にはこのような石棺系堅穴式石室を採用する出自集団からの婚姻などによる移入を想定している（福永 1992）。また、福永氏の研究をさらに進展させた清家章氏は畿内の箱形石棺に主眼を置き、箱形石棺を諸属性により数種類に分類し、それらから出土した人骨の親族関係を明らかにしたうえで、同一形式の箱形石棺には同一血縁集団が埋葬されていることを示し、箱形石棺の形式差は集団の差異を表示するものと結論づけた（清家 2001）。両者の意見を総合すると小堅穴式石室や箱形石棺の形態差は集団の差異を示し、それらの移入に当たっては婚姻などによる墓制伝統の導入が考えられる。

遠江地域は近畿地方北西部から北部九州地域と距離的に離れていること、第1主体部には人骨が遺存しておらず人骨等による比較は不可能であり、婚姻等による移入の可能性は断言できない。しかし、東遠江地域で6世紀中葉以降、北部九州地域の影響を受けて成立する横穴墓出現（松井 2001b）以前の5世紀後半～6世紀前半における遠江地域と近畿地方北西部や北部九州地域との交流を考える資料の一つであり、寺山14号墳第1主体部は北部九州地域から近畿地方北西部との畿内中枢部を介在しない小首長間の交流によって成立した可能性が高い。

（註1）（青山町教委・青山町遺跡調査会 1995）における伊賀地域の集成をみると、寺山14号墳第1主体部と同様の構造を有するものは存在しない。また、筆者が調査できた範囲では、伊勢、尾張、美濃、三河地域の他の古墳群でも確認できない。

（註2）栗林誠治氏の集成（栗林 2002）における徳島県内（阿波地域）のいわゆる「阿波式石棺」の中には、寺山14号墳と同様の石棺系小堅穴式石室は確認できない。

2. 寺山14号墳第2主体部出土遺物について

（1）鉄鎌について

時期的位置づけ

寺山14号墳第2主体部からは細身長頸片刃箭式鉄鎌が出土している。寺山14号墳からは表土中より土師器が出土するものの破片のため、それからは5世紀後半～6世紀前半の一時期としか時期を狭めることができない。したがって、ここでは鉄鎌から第2主体部の時期を推測する。

遠江・駿河で一般的に横穴系埋葬施設が導入され、堅穴系埋葬施設が衰退する6世紀前半（TK10型式併行期）以前に片刃箭式鉄鎌が出土した古墳は下記のとおりであり、時期ごとに第50図に示した。

5世紀前半～中葉に位置づけられる磐田市磐田67号墳（寺谷坂上2号墳）、同堂山古墳、掛川市各和金塚古墳、藤枝市五州岳古墳は頸部が短頭である（註3）。したがって、この段階には比定できない。

つづく、5世紀中葉～後葉（TK216～TK208型式期）の豊岡村大手内A3号墳例では長頭化している。しかし、寺山14号墳出土のものと比較すると、鎌身部（5cm）が大きく、その頸部に対する割合が大きいため、寺山14号墳出土鉄鎌をこの時期に位置づけることには躊躇する。

5世紀末葉（TK23～TK47型式期）では磐田市明ヶ島5号墳、袋井市石ノ形古墳、掛川市不動ヶ谷17号墳、韮山町多田大塚4号墳より鉄鎌が出土している。明ヶ島5号墳第2主体部では全長約15～17cm、鎌身長2.0～3.5cm、頸部長8～9cm、逆刺長5mm以上をはかる。石ノ形古墳西主体部では完形品は出土していないものの、鎌身～頸部まで残存する個体は頭部長約8～9cm、鎌身長2.5～3.5cmであり、逆刺が6～8mmと長い。多田大塚4号墳は全長約17cm、鎌身長約3cm、頭部長約8～9cm、逆刺長7mmであり、石ノ形古墳同様逆刺が長いが、明ヶ島5号墳例とは同様である。寺山14号墳の

	須恵器出現以前 (5世紀前葉前半)	TK73～TK216 (5世紀中葉)	TK216～TK208 (5世紀後葉前半)	TK23～TK47 (5世紀後葉～末)	MT15～TK10 (6世紀前半)
片刃箭頭	 1 (Scale=1:4)	 2  3  4  5 長頸化		 6  7  8  9  10  11 逆刺の短化	

1 豊田 67号(豊田市) 2 各和金塚(掛川市) 3 五州岳(藤枝市) 4 堂山(磐田市)
 5 大手内A 3号(豊岡村) 6 明ヶ島5号(磐田市) 7 石ノ形(袋井市) 8 多田大塚4号(箕山町)
 9 寺山 14号(豊岡村) 10 不動ヶ谷17号 11 清水ヶ谷1号(掛川市)

第50図 遠江・駿河における片刃箭頭の変遷

ものは、この時期のものとほぼ同一の規格を有する。また、この時期は細身式の組成で片刃箭頭式が主体を占める時期であるといえる。

つづく、6世紀前半(MT15～TK10型式)段階には出土数が少ないため断言できない(註4)が、箭身間が直角化している。前代の影響を強く残すTK43型式段階の大東町松ヶ谷横穴墓のものでも逆刺は確認できるものの、TK23～TK47型式段階と比較すると短い。寺山14号墳出土鉄鎌は、この時期のものとは異なる。

したがって、寺山14号墳出土の片刃箭頭は片刃箭式鉄鎌のみの出土であり、石ノ形古墳、多田大塚4号墳、明ヶ島5号墳出土の長頸片刃箭式鉄鎌と形態、法量ともにほぼ同様であることから、TK23～TK47型式に位置づけるのが最も妥当である(註5)。

鉄鎌の副葬に関して

東海地方の中古古墳出土の鉄鎌を分析した鈴木敏則氏は、古墳規模と鉄鎌の副葬種類・量に格差があることを指摘する(鈴木敏1998)。氏の分析によれば、多種多量の鉄鎌が副葬される古墳は大型墳が多く、小種少量(30本前後)を副葬する古墳は20m前後以下の古墳が多いことが指摘されている。この分析結果では、豊岡村大手内A3号墳、磐田市明ヶ島5号墳とならんで、寺山14号墳は「小型墳」型に位置づけることが可能であり、鉄鎌副葬の傾向に合致する古墳である。

しかし、群集墳内の他古墳との比較を行うと、寺山古墳群内のはば同時期の3基では寺山14号墳は副葬品の内容・量からいようと、最上位に位置づけることが可能であり、大手内A3号墳、明ヶ島5号墳も群中では優位な古墳といえる。したがって、中期古墳の中でみた場合、鉄鎌を30本以上副葬する古墳は小型古墳ではあるものの、群中では優位な古墳といえる。

(註3) ここでは、頭部長が頭身長の2倍以上のものを長頭鎌とする。

(註4) 遠江の事例では、この時期に位置づけられる古墳からは片刃箭頭の出土が前代に比して極端に減少する(静岡埋文研編2003)。一方、6世紀後半段階(TK43型式併行期)以降には片刃箭式鉄鎌は主要組成を占めることから、片刃箭式鉄鎌は6世紀前半段階に一時的に減少し、5世紀末葉の段階とは様相を異にしている。

(註5) 上記の鉄鎌による時期的な位置づけに関して、鉄劍から確認しておきたい。確認できた範囲では遠江において5～6世紀前半に营造された古墳のうち鉄劍が出土した古墳は41基を数えるが、5世紀前半が6基15%、中葉が9基22%、後半代が15基37%、6世紀前半が5基12%(このほか5世紀後半から6世紀前半代の一時期に位置づけられるもの6基)と、時期が判明する36基のうち5世紀代が約8割5分を占める。6世紀代に位置づけられる鉄劍は5古墳から出土しているのみであり、このことからも鉄劍出土古墳が5世紀代に多く、6世紀に入ると減少することが判明する。したがって、鉄鎌の年代を寺山14号墳の年代としてよいだろう。

(2) 鉄鉢について

寺山14号墳第2主体部から出土した鉄鉢は、杉本宏氏の「槍身矛」(杉本1991)であり、古墳時代において特殊な形態の鉢といえる。このような身が薄く、刃と袋の間に明瞭な闊がなく、袋部断面が菱形の「槍身鉢」は全国で十数例出土している(第13表、註6)。

①「鎗身鉢」の分類

この「鎗身鉢」の形態的特徴を列挙すると、①袋部断面が菱形(あるいは杏仁形)であり、鉢身と比較して短い(鉢身の1/2程度以下)、②鉢身と袋部の間に明瞭な闊が確認できない(無闊)、③鉢身の断面が薄い菱形あるいは平造り(杏仁形、凸レンズ状)である、④袋部の先端が呑口状あるいは山形である、⑤袋部付近の木製柄の断面形状は楕円形(杏仁形)である(後述の槍身鉢B類は袋部がこの形状)、の5点を列挙することができる。

柄先が呑口状のものや、⑤のような特徴をもつ鉢は古墳時代前期に既に確認されている(菊地1996)。それらは鉢身に先端が呑口状に加工された木製の柄をつけたもので、古墳時代前期~中期を通じて数多く確認される。このような木製柄の先端部分が、鉄製鉢の影響を受けて袋部に変換されたものと考えることができる。

鎗身鉢は袋部の製作技法から2つに分類することができる。

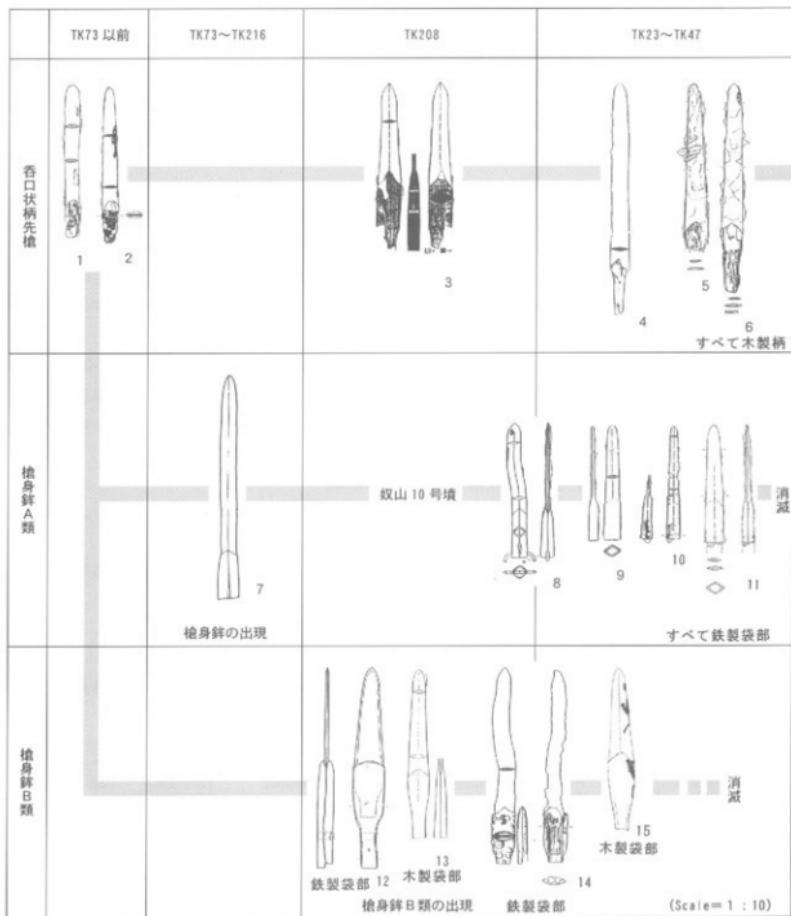
- ①袋部を、鉄板を折り曲げて鍛接するか、2枚の袋部部品を鍛接するもの(鍛接式、A類)。下記のB類と異なり、袋部は直線的である(第22図参照)。
- ②袋部を別造りにして目釘等で鉢身と固定するもの(別造り式、B類)。B類は、袋部を別造りするだけでなく、目釘を多数用い、袋尻が屈曲して、一段細くなるという特徴を有する。

②「鎗身鉢」の変遷過程(第51図)

鎗身鉢の全体的な流れを示すと以下のように変遷する。5世紀前半に鉄製袋をもつ「鎗身鉢」が産み

第13表 鎗身鉢出土地名表

古墳名	所在地	形態(直径mm)	推進施設	縦断面	その他の	時期	文献	形態
静岡県 磐田市 寺山16-第2	円墳(復元S×10.5)	木棺蓋部 (鷺山形 木棺)	木棺蓋部 鉄劍1・ 鉄製側沿金具1・ 鐵鑄28・ 鉄製槍身鉢1・ 鉄製石斧1	土加藤新井 5・小忍保 鉢1・鷺1	TK23 TK47	~	丰曾	A類
八重原1 千葉県 夷隅津	円墳(37.2)	木棺蓋部	鷺(槍身鉢1)・ 横板側沿金具1・ 三角板側沿金具1・ 鉄刀2・ 鉄錐49・		TK206	妙山・田中 1989		B類
二子坂 孤山 (葛城)	石川県加 賀郡	前方後円墳	鉄鉢(槍身鉢行引1)・ 鉄錐1・ 鉄錐1・ 輪内付背1・ 横板側沿金具1・ 鉄錐2・ 勾玉1・ 管2・ ガラス丸玉2	円筒埴輪	TK308 TK23	青木推動会 1997 石川考古学 2005		B類
御荷子塚 一ノ塚	大阪府高 槻市	前方後円墳 (66)	土手	三角板側沿金具1・ 鉄毛刷(輪内付背1)・ 鉄錐100以上・ 鉄刀1・ 鉄錐1		TK73	集中市教委 1990	A類
宇治二子山 南	京都府宇 治市	円墳(34) (方鏡の可能性 もあり)	箱舟形 直底	鏡1・ 三角板側沿金具(輪内付背1)・ 横板側沿金具1・ 鉄錐2・ 三脚1・ 鏡130・ 鏡11・ 土字形輪内付背1・ 込金具1・ 鉄錐3・ 羅1・ 鉄2・ 刀87件・ 手刀4以上	(除外)	TK308	宇治市教委 1991	B類
後出3-第2	奈良県宇 陀郡大宇 陀町	円墳(13)	木棺蓋部	鏡1・ 横錐12・ 内側横板側沿金具(輪内付背1)・ 鉄刀4・ 鉄錐1・ 鉄錐1・ 刀子金具1・ 鉄錐1・ 刀子1・ 不明鋳製品3	土加藤新井 5・ 横2・ 鏡1・ 刀1・ 刀2・ 刀1	TK205 TK23	櫻考研 2003	B類
峯ノ坂	奈良県 生駒郡 三郷町	円墳(15)	横穴式 石室	鏡(槍身鉢)1・ U字形金具4・ 鉄錐3・ 直刀4・ 刀子1・ 鉄刀2・ 不明鋳製品	円筒埴輪	5世紀 後半	板 1999	A類
船石2	佐賀県 三養基郡 佐賀村	円墳(12)	横穴式 口式石室	鉄錐1・ 鉄錐4・ 工具2・ 不明鋳製品8・ 鉄1	横板側沿 4-年寄1- 鏡1	TK208 以降	上村市教委 1983	A類
新屋-笠置山10 (津壁塚10) (前方後円墳)	福岡県 宗像市 津壁町	前方後円墳 (70)	横穴式 口式石室	鉄錐11・ 石錐1・ 挂軸小札約3000枚・ 絹手金銀器小札51枚・ 金銀器51枚・ 横板側沿金具1・ 横板側沿金具10・ 鉄錐1対・ 横板側沿金具10・ 横板側沿金具10・ 横板側沿金具10・ 横板側沿金具10・ 横板側沿金具10・ 横板側沿金具10・ 横板側沿金具10	横板側沿 4-年寄1- 鏡1	5世紀 後半	福岡県教委 1977 および 井川徹氏のご 教示による。	A類
島内45	宮崎県 えびの市	横穴墓	横穴墓	鉄錐2・ 鏡(槍身鉢)1・ 横錐37以上・ 直刀6・ 刀子4		5世紀 後半	えびの市教委 2001	A類



- 1 長法寺南原(京都) 2 豊中大塚(大阪) 3 川上(番川) 4-14 狐山(石川) 5-6 高井田山(大阪)
 7 御獅子塚(大阪) 8 船石2(佐賀県) 9 峯ノ坂(奈良) 10 島内65号(宮崎) 11 寺山14号(静岡)
 12 谷重原1号(千葉) 13 宇治ニ子山南(京都) 15 後出3号(奈良)

第51図 鎌身鉢編年図

出される。その後5世紀代に少量生産される（註7）が、6世紀前半以降の古墳では現状で確認できないことから、この特殊な形態の鉢は鎌の衰退とともに5世紀代で存在意義を失い廃れたものと想定する。

A類（鍛接式） 現状で鎌身鉢A類最古のものは、大阪府豊中市御獅子塚古墳第2主体部より出土した鉢であり、5世紀前半～中葉（TK73型式）に位置づけられている。この鎌身鉢は図示されていないものの、袋部は非常に短く、逆に鉢身は長い形態である（註8）。つづく、TK208型式期には福岡県津屋崎町奴山10号墳出土鉄鉢があり、鎌身鉢が6本出土している（註9）。ただ、豊富な遺物が出土して

おり、複数の時期があることから若干時期的に降る可能性もある。また、船石 2 号墳も古墳の築造は TK208 型式期であるが追葬が確認でき、若干時期が降る可能性がある。TK23～TK47 型式期には寺山 14 号墳、奈良県三郷町峯ノ坂古墳、宮崎県島内 65 号横穴墓を挙げることができ、法量がほぼ同一である。A 類は図化されていない個体があるなど明確ではないが、時期が降るにつれ小型化し、袋部と鉢身の長さがほぼ同一に近づく傾向にある。

B 類（別造り式、袋部屈曲） 現状で B 類が出土した古墳は 4 古墳であり、袋部が鉄製のもの（千葉県八重原 1 号墳、石川県二子塚狐山古墳）と木製のもの（京都府宇治二子山南墳、奈良県後出 3 号墳）がある。このうち時期が明確なのは千葉県八重原 2 号墳、宇治二子山南墳、後出 3 号墳出土ものであり、前二者は TK208 型式期、後出 3 号墳例は TK208～TK23 型式期に比定できる。狐山古墳例は、副葬品全体の様相からすると TK208～TK23 型式期に位置づけることが可能である。

鉢身と袋部の別造り系は、均等直角闊で茎を有する鉢と木製の柄をもつものが、鉢の影響を受けて、槍の柄の先端の装着部分のみ別造りの鉄製あるいは木製の袋に転化させたものである。出現当初より鉄製、木製の別造り袋部が製作されたと考えられ、狐山古墳例はさらに劍身に蛇行が加えられたものである。B 類は 4 古墳の副葬品からみると TK208 型式期の一時期に一括して製作されたと考えることができ、狐山古墳例や後出 3 号墳例はほぼ同時期かやや遅れて副葬されたと推測する。

③「鎗身鉢」の位置づけ

製作地および生産体制について

鎗身鉢は現状では 10 古墳 15 点確認でき、西は宮崎、福岡県から東は千葉県まで点々と分布している。また、韓半島では鉢は非常に多く副葬される遺物であるが、鎗が副葬されることが少ないと関連するように、鎗の特殊形態である鎗身鉢は出土していない（註 10）。

10 古墳のうち出土する数量が最も多いのは福岡県津屋崎町奴山 10 号墳の 6 本であり、唯一複数出土している古墳（TK208 型式の築造、追葬あり）である。しかし、鎗身鉢の初現は大阪府御獅子塚古墳第 2 主体部の事例から、A 類で中期中葉、TK73 型式期に位置づけることが可能である。B 類はやや遅れ中期後半、TK208 型式期に出現する。

また、鎗身鉢 A・B 類ともに存在するのは畿内地域である。さらに、鎗身鉢には鉢身が蛇行するものがあり、明らかに蛇行剣の影響を受けていることが想定できる。蛇行剣の製作場所は古い段階のものは畿内地域での製作が想定されている（北山 1999）ことから、やはり鎗身鉢が産み出される土壤は畿内地域にあったといえる（註 11）。蛇行剣も新式の段階になると地方生産が行われた可能性があり（北山 1999）、寺山 14 号墳は古い段階の鎗身鉢の影響を受けて地方で製作された可能性も残るが、一般的な鉢の形態ではなく全国的にみても出土量が少ないと、さらに同時期の 3 点ともに法量がほぼ均一であることから、製作地（畿内地域）からもたらされた遺物である可能性が高い。

また、その生産体制は蛇行状鎗身鉢が存在することから、蛇行剣製作者集団と同一あるいはそれに近い製作者集団を想定できる（註 12）。

鎗身鉢副葬古墳について

槍身鉢が出土した古墳規模や各地での位置づけをみると、50～70 m 級の前方後円墳 2 基（御獅子塚古墳、奴山 10 号墳）、30～40 m 級の円墳で豊富な遺物を有する古墳 2 基（宇治二子山南墳、八重原 1 号墳）があり、地域の首長墓に位置づけられる古墳が存在する。また、鎗身鉢は 10 基からの出土であるが、13 m の小型の円墳、30 m を超える中型の円墳、前方後円墳の 4 基から甲冑が出土し、そのほかの古墳でも装身具類（2 古墳からの出土のみ）が少なく鐵鎌などの武器が卓越しているといえ、被葬者の武人的性格が窺える。

なかでも御獅子塚古墳は、豊中大塚古墳（大阪府豊中市核塚古墳群）の被葬者に続き、畿内中枢部から西方へ向かう交通の要衝や、河内湖を利用した水運を掌握した首長と想定され、木棺に鎧を用いるなど外来的な文化を積極的に取り入れた先進的な首長像が想定される（豊中市教委編 1990）。また、奴山10号墳は5世紀中葉以降勃興する玄界灘を利用した交易を掌握した首長像（宗像君）が想定される（福岡県教委編 1977）。鎧身鉢は前方部の埋葬施設（竪穴系横口式石室）からの出土であるため、直接結びつけることができないが、「宗像君」と関係の深い被葬者像を描くことができる。

さらに、後出3号墳（櫻考研 2003）は13mの円墳でありながら、二つの埋葬施設で計3領の短甲、複数の刀剣類、多数の鉄鎌を有するなど武器・武具の副葬が顕著であり武人的色彩が強く、かつ副葬品も豊富であることから後出古墳群の中心的な被葬者と考えられる。

これらの中小首長墓に位置づけることができる古墳は伝統的勢力というよりも新興の勢力と考えられている古墳が多く、且つ先進的な遺物を有し、武器・武具が豊富に副葬されるところに特徴がある。

古墳規模からみると寺山14号墳は10mと小型であるため、地域の首長墓に位置づけられる古墳とは様相が異なるが、地域内部では新たな場所に築造されており、小型でありながらも先進的な吊金具を伴う鉄劍（鈴木一 1999a）、鉢、鉄鎌38本を保持することから他の鎧身鉢副葬古墳の特徴と一致し、新興の、武人的性格を強く有する古墳であると考えることができる。

鎧身鉢の意義について

鎧身鉢B類のように袋部を別造りするなど、鉢の一般的な造りを踏襲していない点、該期の鉢は袋部を円形あるいは多角形に作るのに対し、菱形に成形する点などを考えれば、ただ単に鉢の影響を受けたと済ますことはできない。鎧身鉢A類すべての事例を確認しているわけではないが、袋部の鉄板の合わせ目はそれがわからないほど丁寧に鍛接している。また、八重原1号墳例や宇治二子山南墳例、狐山古墳例などは柄だけでなく、袋部の固定にも多数の目釘を使用している。鉢と柄のみの固定であるならば、他の鉢同様に1箇所目釘で固定すれば十分であるところを、この2者は明らかに多数の目釘を使用して固定する鎧と柄（4枚作り）の目釘の使用法を意識、踏襲しているものと考える。したがって、鎧身鉢は粗製の造りはしていないのである。また、上述したように鎧身鉢の初現期であるTK73～TK208期における古墳には御獅子塚古墳や奴山10号墳、宇治二子山南墳、八重原1号墳など地域の首長墓に位置づけられる古墳に副葬されていることからも、単なる粗製とは言い難い。

では、なぜ特殊ともいえる形態の鉢が創出されたのであろうか。鎧身鉢には鉢身が蛇行状に屈曲する事例が2例（佐賀県船石2号墳、石川県孤山古墳）存在しており、その製作に当たっては蛇行剣製作者集団との関連が窺える。蛇行剣が出現した意義は、古墳時代中期に入り刀剣のうち鉄刀が顕著になり、それが副葬品の主体を占め剣的地位が低下していく過程で、それを打開するために剣に屈曲を加えることにより新たな意味を与え、剣の再生を目指したことにあるとされる（北山1999）。この蛇行剣の創出は5世紀前半と考えられており、鎧身鉢の出現とほぼ一致している。したがって、鎧も鉢が主流となる刺突系の武器にあって、地位の低下した鎧に新たな意味を付与するために袋部を鉄あるいは木で造作するという新たな工作を加え、鉢に近づけることで、袋部をもつ「槍」としてその意味を新生した可能性を想定したい。

つまり、鎧身鉢は鎧が鉢の影響を受けてただ簡略に製作されたわけではなく、造りは丁寧であり、鎧への新たな意義を与える目的（鎧の新たな象徴的な意味づけ）で製作された可能性が高い。また、鎧とともに鎧身鉢も副葬されなくなるなど鉢の形状は呈しているものの存在する意味としてはあくまでも「鎧」であったのである。

(註6) 韓半島や古墳時代前期に位置づけられる奈良県高取町タニグチ1号墳でも袋部を有する鎧状身の鉢が出土しているが、

鉢の影響を受けたことは判明するものの、袋部の合わせ目が一目瞭然であり、ここでいう「鎌身鉢」の形状とは異なる。したがって、ここでは初現的な位置づけをすることも可能であるが、合わせ目を丁寧に歯接し、袋部先端を呑口状に加工の中期以降のものと見做すため今回は参考程度に留める。また、タニゲチ1号墳と同形態の鉄鉢が古墳時代後期の奈良県守忍海H13号墳より出土している。

さらに、三重県鈴鹿市経塚古墳から「鎌身鉢」と類似する鉢が出土しているが、袋部の断面が楕円形とされているため、今回の集成からは除外している。

なお、鎌身鉢の集成にあたっては、浜松市博物館 鈴木一有氏に多くの資料をご教示いただいた。深謝します。

(註7) 田中新史氏は八重原1号墳の報告の中で鉢の普及に伴い鉄鉢に鉄鉢の影響が見られ、八重原1号墳例のような鎌身鉢が5世紀代に特徴的に存在することを指摘している(田中1989)。

(註8) 図は豊中市教委編1990の写真図版と出土状況図をもとにトレース。大阪府立近つ飛鳥博物館で開催された「未盗掘古墳の世界 想葬時のイメージを探る」展(2002年開催)において袋部断面の形状が菱形であることを確認した。

(註9) 特別展開催時に展示された奈良山(津屋崎)10号墳の遺物を閲覧された大阪大学 藤井章徳氏のご教示による。

(註10) 大韓民国慶北大学校 高田實太氏より鶴見島では①～⑥の特徴をもつ鉢「鎌身鉢」は出土していないとのご教示を得た。

(註11) 鮎行剣の初現的形態が豊中大塚古墳から出土し、鎌身鉢の初現的形態が同一古墳群(桜塚古墳群)中の御獅子塚古墳から出土したことは、製作地を推定する上で重要なと考える。

(註12) 鎌身鉢と鮎行剣が同様の性格を有することは、古墳の規模からもいえる。両者ともに武人の色彩が強い古墳から出土するが、鮎行剣が出土している宮崎県西都市児屋根塚古墳(110m)を除いて、その規模が70m以下の古墳に限られ、大型古墳には副葬されず、中小古墳に副葬されるという類似点が確認できる。

3. 寺山古墳群の位置づけ

(1) 敷地川流域における寺山古墳群の編年的位置

ここでは、敷地川流域における寺山古墳群の編年的位置づけについて、簡単にみておきたい。

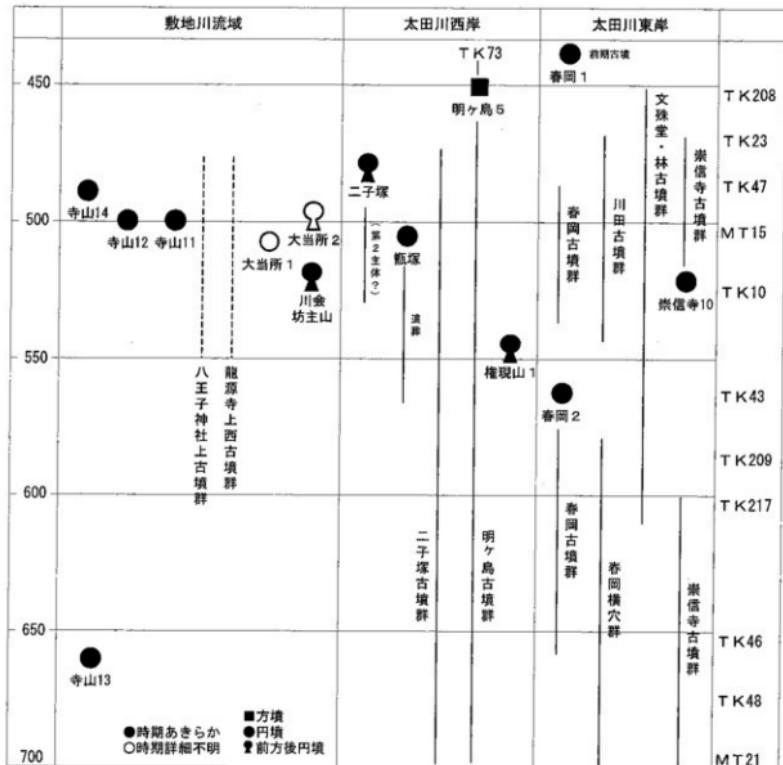
今回調査した4基の古墳の時期的位置づけは、寺山14号墳は上記のとおり中期後半～末葉、5世紀後半(TK23～TK47型式期)に、13号墳は終末期後半、7世紀後半(TK46型式期)に、11・12号墳は5世紀末葉～6世紀前半(TK47～MT15型式期)に位置づけることが可能である。

近接する大当所1・2号墳は発掘調査がなされておらず、且つ出土遺物が存在しないことから明確な時期は不明であるが、およそ5世紀後半～6世紀前半に位置づけられている。遠江において20m級の小規模な前方後円墳が築造されるのは6世紀前半が多いことを考慮すると、大当所2号墳は6世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

つづいて、敷地川流域の古墳についてみると、川会坊主山古墳は約30mをはかる前方後円墳で、埋葬施設は礫部あるいは粘土部とされ、鏡3面、鉄刀、玉類、埴輪が出土している(袋井市教委編1993)。表採された埴輪から6世紀前半(MT15型式期)に位置づけられる(鈴木敏2001)。また、龍源寺上西古墳群は全く調査が実施されていないことから不明であるが、5世紀後半～6世紀前半の10m前後の古墳からなる群集墳と考えられている。八王子神社上古墳群は前方後円墳を含む古墳群であるが、龍源寺上西古墳群と同様の年代が与えられている。

したがって、寺山14号墳は敷地川上・中流域で最も早く築造された古墳の一つである。上記したように寺山古墳群の形成は地域内部での要因だけでなく、畿内や瀬戸内、北部九州とのつながりをもつ小首長により築造された14号墳をもって群形成を開始したものと考えることができる。また、時期的にみると遠江では初期群集墳の築造が活発となる時期であり、初期群集墳形成の一環の流れの中で形成された古墳群の一つであるといえる。

一方、寺山13号墳は単独で7世紀後葉～末葉に築造されている。6世紀前葉の古墳からは100年以上も隔てて築造されていることから、被葬者集団については初期群集墳とは異なると考えるが、単独で築造される意義については、他の7世紀後半以降に単独で築造される古墳とともに考える必要がある。また、副葬品も少なく、特徴もないことから時期的な位置づけに留めておきたい。



第52図 敷地川流域における古墳・古墳群の変遷 (註13)

(2) 寺山14号墳被葬者の性格とその意義

前述したように寺山14号墳第1主体部は遠江の伝統的な墓制から創出されたものではなく、近畿地方北西部、瀬戸内海周辺や北部九州地方からの影響による成立と推測した。一方、第2主体部は鎌身鉢の副葬から畿内との関連（下賜品か）を想定できる。最後に寺山14号墳の成立要件を石棺系小堅穴式石室、鎌身鉢以外から外的要因と、また地域内部における出現要因を検討してその被葬者像を明らかにした上で、寺山古墳群発掘調査報告をお伝えしたい。

まず、小堅穴式石室や鎌身鉢以外の外的要因についてみておく。寺山14号墳第1・2主体部は遠江では珍しく北頭位を採用する。遠江における甲冑出土古墳を中心に古墳時代中期の埋葬施設の頭位を分析した鈴木一有氏は、甲冑出土古墳を中心に東西頭位をとる傾向にあることを指摘し、それが遠江の伝統的頭位の可能性があることも示唆する。また、北頭位が目立つのは、磐田市松林山古墳や掛川市各和金塚古墳など大型で畿内色の強い古墳が採用するからであり、遠江においては決して北頭位が優位な状況を示さないことを指摘する（鈴木一 1999b）。この指摘を受けて、まず天竜川右岸～原野谷川・逆川

流域の中・東遠江地域の中期から後期前半における堅穴式埋葬施設の主軸方位が判明している古墳を分析すると寺山14号墳を除いて東西頭位は208例中143例約70%、南北頭位は65例約30%である。したがって、北頭位を採用する古墳は30%であるものの、皆無ではなく一定量存在する。しかし、やはり当該地域では東西頭位が主体である。また、地域外部からの影響により成立したと考える箱形石棺の埋葬頭位についてみると、第12表に示したように、掛川市高代山3号墳、菊川町高田ヶ原6・7次調査3号墳は南北頭位を採用している。また、森町文殊堂8号墳第3主体部も、第1・2主体部（木棺直葬）が東西頭位を探るのに対し、箱形石棺（第3主体部）は南北頭位を採用している。このように箱形石棺をみると南北頭位が優位である状況が窺えることから、やはり寺山14号墳をはじめとする石棺系小堅穴式石室や高代山3号墳をはじめとする南北頭位を採用する箱形石棺の遷源地は特定できないが、北頭位・石棺の伝統をもつ地域との交流やそこからの伝播により成立したと考えることが可能である。

つづいて、遺物からみてみる。第2主体部からは鉄剣吊金具が出土している。5世紀代の吊金具は甲冑出土古墳や、九州地方の小型古墳に出土例が多いこと（註14、鈴木一 1999a）、またその分布の特徴から朝鮮半島南部地域からの情報移入によってもたらされたことが指摘される（鈴木一 1999a）。したがって、小型古墳ながらも寺山14号墳が吊金具を所有する意味は、第1主体部が北部九州地方や瀬戸内地方の影響を受けて成立した事象と同一現象と考えることが可能であり、直接あるいは間接かは断定できないが、北部九州地域とのかかわりによって、先進的な遺物（吊金具）を入手した可能性が指摘できる。

最後に、寺山14号墳が築造されたTK23～TK47型式期の天竜川以東～原野谷川・逆川流域という地域内部の情勢について簡単にみておく。

この時期には、磐田原台地において大型墳が台地東南部から、西北部（豊岡村血松塚古墳）と東縁部（磐田市二子塚古墳）に分布を移すことが指摘されている（白澤1993）。また、天竜川以東～原野谷川・逆川流域では二子塚古墳や袋井市石ノ形古墳などをはじめ、大型古墳が旧東海道沿に分布を移すことも指摘されている（白澤1993）。これに伴う現象として、小型の円墳、方墳、木棺直葬を主体とする初期群集墳（磐田市明ヶ島古墳群、同二子塚古墳群、同池之谷古墳群、袋井市春岡古墳群、森町文殊堂・林古墳群など）が複数盛行している。さらに、太田川平野には他地域と比較して鉄製甲冑、金銅装f字形鏡板付轡、金銅装剣菱形杏葉、馬鐶、鈴杏葉、鉄製内湾梢円形鏡板付轡などの馬具が数多く出土している。また、中期中葉までは、各和金塚古墳以外はすべて磐田原台地東南部から東南部の大之浦周辺に集中していた甲冑が、その地域では副葬されなくなり、太田川上流域の森町林2号墳や文殊堂11号墳、原野谷川・逆川合流地点付近の袋井市石ノ形古墳に副葬され、その地域を変化させている。

つまり、大型墳や、馬具・甲冑などの分布状況からみて、それまで中心的存在であった磐田原台地南部～東南部から磐田原台地東縁～原野谷川流域に有力古墳が移動する。これは墓域の移動というよりは、後者には6世紀前半で20m～30m前後の前方後円墳が数多く築造されるなど、太田川平野に基盤を持った新興の勢力が新たな墓域に築造したと考えるのが妥当である。

以上のような状況を鑑みると、太田川平野の勢力が伸張するにしたがい、寺山14号墳は袋井市石ノ形古墳、磐田市二子塚古墳など新たな首長勢力の勃興や明ヶ島古墳群、二子塚古墳群、文殊堂・林古墳群などの初期群集墳の成立と軌を一にして出現したのである。

寺山14号墳は約10mの不整形な円墳であり、副葬品も鉄剣1振、鉄鎌1種38本、鉄鉢1本と決して豊富とはいえない。また、太田川の支流である敷地川上流域という奥まった位置に所在する。しかし、その成立に当たっては、太田川平野周辺に位置する集団の勢力拡大と軌を一にし、同種多数の鉄鎌をもつ武人的な性格を持って、畿内や北部九州を含めた西日本各地とつながりをもち、活躍した新興の小首長像を描くことができる。

（註13）春岡1号墳の時期的位置づけに関しては、袋井市教育委員会 白澤 崇氏の御教示による。

（註14）吉田2001や宍戸1984の一覧表をみれば明らかとなる。

参考文献

報告・報告書（報告書、報告と論文は別々に記載。）

- 青山町教育委員会、青山町遺跡調査会編、発行 1995 「七ヶ城遺跡 七ヶ城古墳群 様ヶ森遺跡調査報告書」
- 庵原村教育委員会 1961 『三池平古墳』
- 磐田市 1992 『磐田市史』史料編
- 磐田市教育委員会 1995 『遠江堂山古墳』
- 磐田市埋蔵文化財センター編 2003 『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 宇治市教育委員会編、発行 1991 『宇治二子塚古墳発掘調査報告書』
- えびの市教育委員会 2001 『島内地下式横穴墓群』
- 大阪大学南原古墳調査団 1992 『長法寺南原古墳の研究』
- 大谷宏治 1998 「農園村合代島の群集墳-上神増E古墳群-」[『研究所報』77 静岡県埋蔵文化財調査研究所]
- 大谷宏治 1999 「珍しい主体部をもつ古墳の調査」[平成11年度静岡の原像を探る発掘調査報告会] 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2000 「文殊堂古墳群：古墳の主体部から甲冑が出土」[『研究所報』84]
- 掛川市教育委員会編、発行 1970 『高代山古墳群』
- 掛川市教育委員会編、発行 1974 『水垂ニツ池古墳群』
- 掛川市教育委員会編、発行 2001 『不動ヶ谷遺跡・不動ヶ谷古墳群』
- 掛川市教育委員会編、発行 1981 『各令冢古墳調査調査報告書』
- 櫻原考古学研究所編 2003 『後出古墳群』 奈良県教育委員会
- 柏原市教育委員会編、発行 1996 『高井田山古墳』
- 上峰村教育委員会編、発行 1983 『船石遺跡』
- 菊川町教育委員会編、発行 1994 『高田ヶ原遺跡第6次・第7次発掘調査報告書』
- 静岡県 1992 『静岡県史』資料編3 考古3
- 静岡県教育委員会編、発行 1986 『静岡県埋蔵文化財発掘調査報告書小笠町朝日神社古墳 浜松市三方原学園内4号墳』
- 静岡県教育委員会編、発行 2001 『静岡県の前方後円墳-個別報告編-』 『静岡県の前方後円墳-資料編』
- 静岡県埋蔵文化財研究所編、発行 1997 『小笠山綜合運動公園内遺跡群 居村古墳群 居村遺跡 若作古墳群(F地区) 上石野古墳群』(『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書』95集)
- 杉山晋作・田中伸史 1989 「古墳時代研究-1 小糸町津市所在八重原1号墳・2号墳の調査-」 古墳時代研究会
- 田村隆太郎 2001 「丘陵上に展開する様々な古墳群-森町・林古墳群ほか-」[平成13年度静岡の原像を探る発掘調査報告会]
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 帝室博物館 1937 「加賀國沼田郡物使村字二子塚所在須坂古墳」[帝室博物館学報] 9 古墳発掘品調査報告
- 豊岡村教育委員会編、発行 1996 『大手内E古墳群』(静岡県豊岡村)
- 豊岡村教育委員会編、発行 2000 『大手内古墳群』(静岡県豊岡村)
- 豊中市教育委員会編、発行 1987 『攝津島中大坂古墳』
- 豊中市教育委員会編、発行 1990 『御殿子塚古墳』
- 長尾町教育委員会発行 1991 『川上・丸井古墳発掘調査報告書』
- 坂 清 1999 「峯ノ坂遺跡第2次調査概要報告」[奈良県遺跡調査概報 1998年度(第二分冊)] 櫻原考古学研究所
- 福岡県教育委員会編、発行 1977 『新原・奴山古墳群』
- 袋井市教育委員会編、発行 1998 「袋井の前方後円墳-袋井の首長墓を考える-」
- 袋井市教育委員会編、発行 1999 『石ノ形古墳』
- 藤枝市教育委員会 1980 『日本住宅公社藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』II 古墳時代編
- 藤枝市教育委員会 1981 『原古墳群会津畠支群高草地区』
- 藤枝市教育委員会 1983 『若王子・鈴瓶落古墳群』
- (第4節)
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編、発行 2002 『藤守遺跡』

論文

- 石川考古学研究会 2001 『石川県考古資料調査・集成事業報告書 補遺編』
- 白井 熊 1985 「古墳出土鉢の分類と編年」[『日本古代文化研究』2 古墳文化研究会]
- 宇野慎敏 1985 「攝子考」[『末永先生米壽記念獻呈論文集』乾 実永先生米壽記念會]
- 菊池芳朗 1996 「前期古墳出土刀劍の系譜」[『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会]
- 北山峰生 1999 「劔刺された蛇形劍-意義と特質に関する予察-」[『石ノ形古墳』 袋井市教育委員会]
- 栗林誠治 2002 「ア波式石棺」[『阿波式石棺』再考]「論集徳島の考古学」 徳島考古学論集刊行会
- 宍戸信悟 1984 「厚木市上依知1号出土毛抜き形鉄器について」[『神奈川考古』19 神奈川考古同人会]
- 柴田 稔 1993 「考古編」[『豊岡村史』資料編3 考古・民俗 豊岡村(静岡県磐田郡)]

- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編・発行 2003 「研究紀要」10号 特集：古墳時代後期の鉄器
- 白澤 崇 1993 「川会坊主山古墳と大門塚古墳出現の背景」「袋井の前方後円墳」 袋井市教育委員会
- 杉本 宏 1991 「南墳の調査 4 南墳まとめ」(字市教委編 1991 所収)
- 鈴木一有 1999a 「御葬遺物にみる先進性と特殊性」「五ヶ山B2号墳」 浅羽町教育委員会
- 鈴木一有 1999b 「五ヶ山B2号墳の被葬者像」「五ヶ山B2号墳」 浅羽町教育委員会
- 鈴木一有 2002 「経ヶ峰1号墳の再検討」「三河考古」15 三河考古刊行会
- 鈴木敏則 1996 「出土金真製品まとめ 2. 鉄器」「宇摩遺跡群」 静岡県菊川町教育委員会
- 鈴木敏則 1998 「鉄器について」「千人塚古墳、千人塚平・宇摩坂古墳群」 浜松市教育委員会
- 鈴木敏則 1999 「遠江の古墳時代中期土器様式（山ノ花様式）」「東国土器研究」5 東国土器研究会
- 鈴木敏則 2001 「埴輪」「静岡県の前方後円墳」総括編 静岡県教育委員会
- 清家 章 2001 「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」「古代学研究」152 古代学研究会
- 田中新史 1989 「八重原1号墳の調査 出土遺物 鉄」「古墳時代研究Ⅲ-千葉県君津市所在八重原1号墳・2号墳の調査-」 古墳時代研究会
- 中間研志 1986 「堅穴式石室・石棺系堅穴式石室」「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告」6 甘木市所在柿原古墳群の調査Ⅱ 福岡県教育委員会
- 七原恵史 1983 「攝子について」「佐原古墳群-第5号墳・第6号墳の調査」
- 土生純之 1988 「西三河の横穴式石室について 石室の系統」「西三河の横穴式石室資料編」 愛知大学日本史専攻考古学部会
- 福永伸哉 1992 「近畿地方の小堅穴式石室-長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって-」「長法寺南原古墳の研究」 大阪大学南原古墳調査團
- 藤澤良祐 1996 「中世瀬戸窯の動態」「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界 資料集」
- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯群における須恵器陶器生産の一考察」「静岡県の窯業遺跡」 静岡県教育委員会
- 松井一明 1994 「遺物について」「坂尻遺跡-遺物・総括編」 袋井市教育委員会
- 松井一明 1995 「遺物について」「坂尻遺跡-遺物・総括編-」 袋井市教育委員会
- 松井一明 2001a 「横穴墓の開始と終末」「東海の横穴墓」 静岡県考古学会
- 松井一明 2001b 「滋川における横穴墓の伝承と展開」「静岡県考古学研究」33 静岡県考古学会
- 吉田和彦 2001 「毛抜形鉄器」の機械・用途認定に向けての基礎的研究（1）」「史学論叢」31 別府大学史学研究会
- 渡辺康弘 1986 「古代刀子の形について」「史観」115 早稲田大学史学会
- (第4節)
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「圓説木材組織」 地球社
- 島地 謙・伊東隆夫編 1998 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣
- 鈴木三男・能城修一 1997 「石川条里遺跡出土木製品の樹種」「石川条里遺跡 第3分冊」 長野県埋蔵文化財センター
- 岡田文夫 1995 「古代出土漆器の研究-顕微鏡で探る材質と技法-」 京都書院

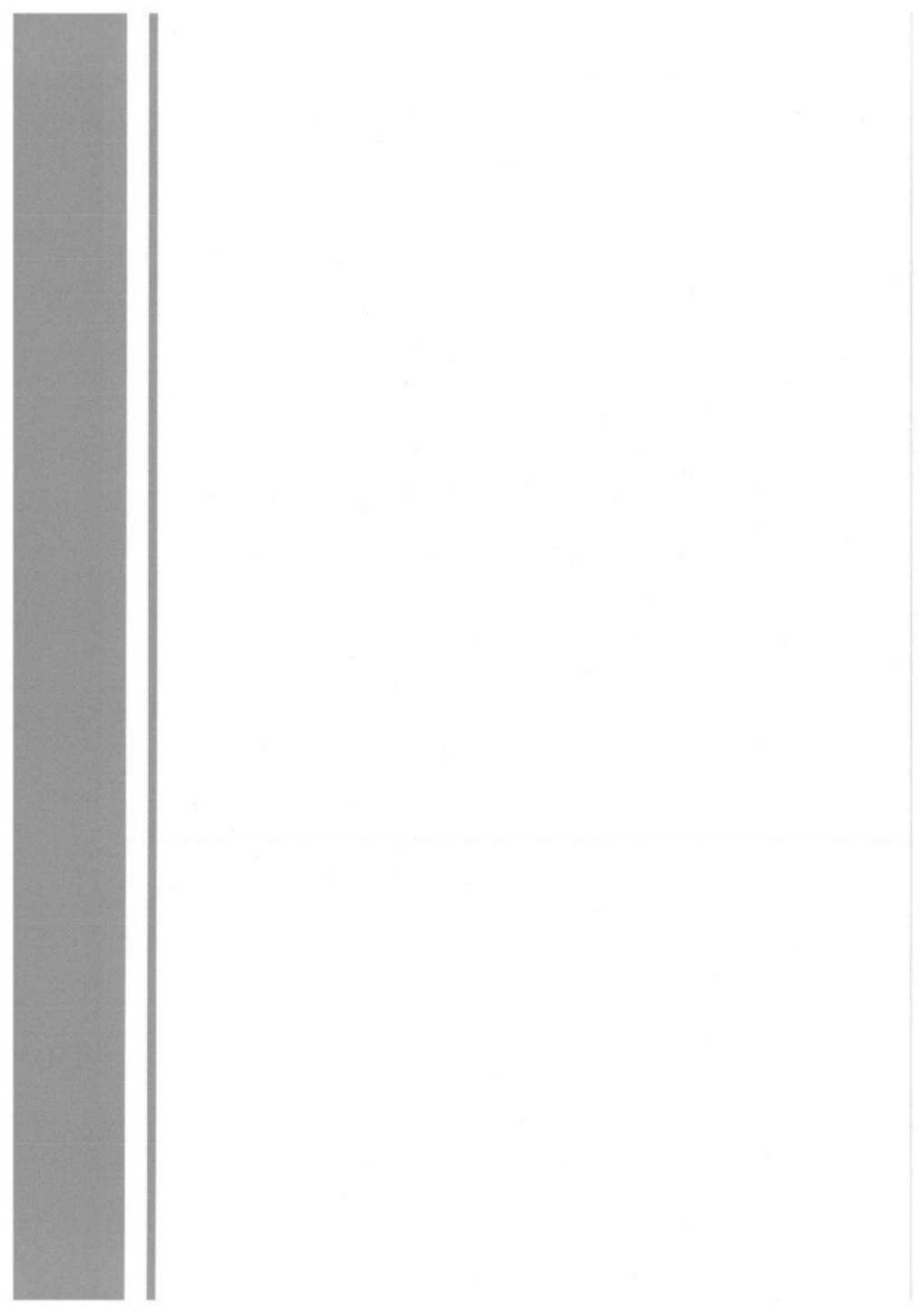
(図の出典)

- 第 49 図 横林山古墳（磐田市 1992)、三池平古墳（庵原村教委 1961)、各和金塚古墳（磐川市教委 1981)、高田ヶ原 6・7 次 1～3 号墳・森ヶ谷 A 10 号墳・高代山 3 号墳・高草 20 号墳・多田大塚 4 号墳（第 12 表の文献より）
- 第 50 図 磐田 67 号墳（磐田市 1992)、各和金塚古墳（鈴木敏 1998)、五州岳古墳（静岡県 1992)、大手内 A 3 号墳（豊岡村教委 2000)、明ヶ島 5 号墳（磐田市理文センター 2003) 石ノ形古墳（袋井市教委 1999)、多田大塚 4 号墳（静岡県教委 2001)、不動ヶ谷 17 号墳（掛川市 2001)、清水ヶ谷 1 号墳（掛川市教委 1974)
- 第 51 図 長法寺南原古墳（大阪大学南原古墳調査団 1992)、豊中大塚古墳（豊中市教委 1987)、川上古墳（長尾町教委 1991)、孤山古墳（石川考古学研究会 2001)、高井田山古墳（柏原市教委 1996)、後出 3 号墳・船石 2 号墳・峯ノ古墳・島内 65 号地下式横穴墓・宇治二子山南墳・八重原 1 号墳（第 13 表の文献より）

現地調査および本書の作成に当たっては、次の方々に有益なご指導・ご助言を賜りました。ここに銘記して深謝申し上げます。（敬称略・五十音順）

北山峰生 斎藤香織 寒川 旭 柴田 稔 白澤 崇 鈴木一有 鈴木三男 高田貴太 竹内直文
谷口安曇 豊島直博 廣川達麻 深谷 淳 藤井章徳 古谷 級 松井一明 向坂鋼二 室内美香
磐田市埋蔵文化財センター 豊岡町教育委員会 森町教育委員会

図 版



図版 1

寺山古墳群



豊岡村周辺の航空写真①（南より）

図版 2

寺山古墳群 ▼



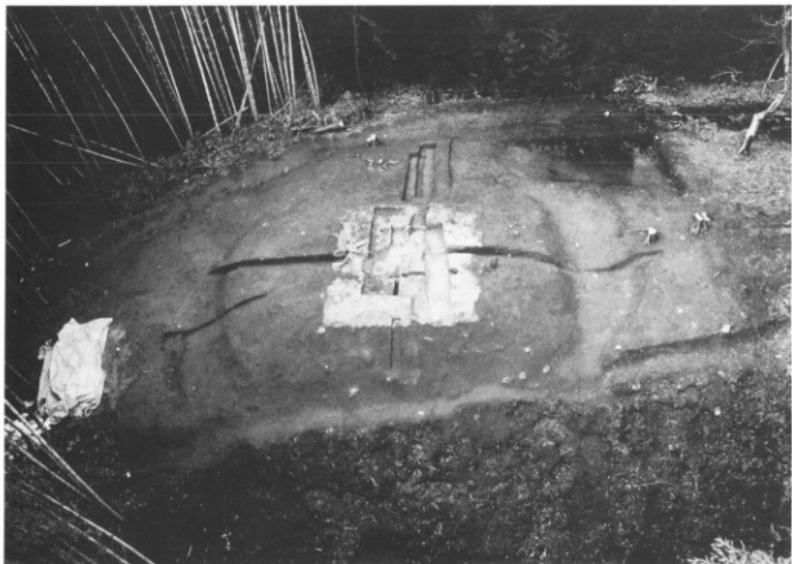
豊岡村周辺の航空写真(2) (北より)

図版 3

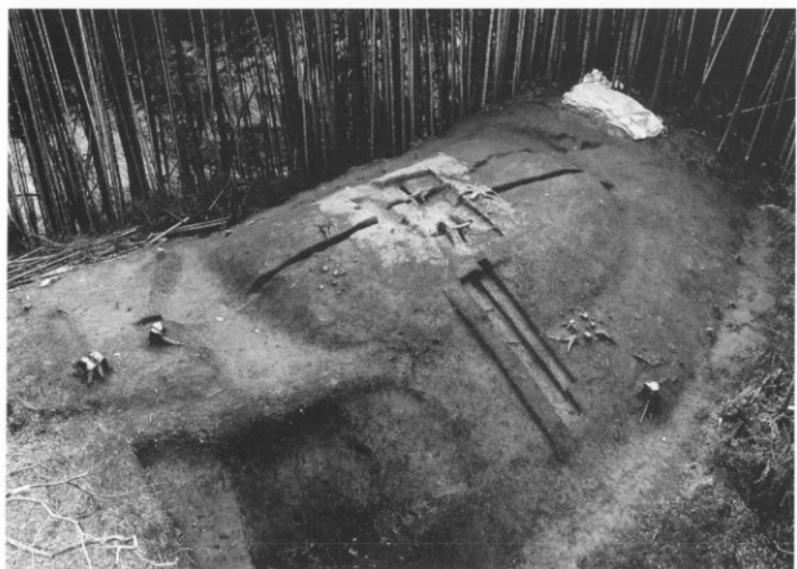


寺山古墳群空中写真（西より）

図版 4



1 寺山 14 号墳全景写真（南より）



2 寺山 14 号墳全景写真（北東より）



1 寺山 14 号墳第 1 主体部検出状況（東より）



2 寺山 14 号墳第 1 主体部天井石除去後の状況（東より）

図版 6



1 寺山 14 号墳第 1 主体部天井石除去後の状況（南より）



2 寺山 14 号墳第 1 主体部天井石除去後の状況（北より）



3 寺山 14 号墳第 1 主体部平積み石除去後の状況（東より）



1 寺山 14 号墳第 2 主体部遺物出土状況（東より）



2 寺山 14 号墳第 2 主体部遺物出土状況（北より）



3 寺山 14 号墳第 2 主体部遺物出土状況（南より）

図版 8



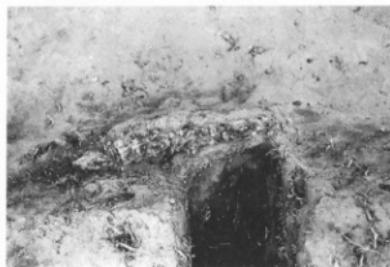
1 寺山 14 号墳第 2 主体部鉄剣出土状況（東より）



2 寺山 14 号墳第 2 主体部鉄鎧出土状況（西より）



3 寺山 14 号墳第 2 主体部鉄製石突出土状況（東より）



4 寺山 14 号墳第 2 主体部鉄鉢出土状況（西より）



5 寺山 14 号墳第 2 主体部土層堆積状況（南より）



6 寺山 14 号墳第 2 主体部土層堆積状況（北より）



7 寺山 14 号墳周溝西侧土層堆積状況（北より）



8 寺山 14 号墳周溝東側土層堆積状況（北より）



1 寺山 14 号墳埋葬施設完掘状況（東より）



2 寺山 14 号墳完掘状況（東より）

図版 10



1 2区完掘状況①(東より)



2 2区完掘状況②(西より)

図版 11



1 3・4区全景（西より）



2 寺山 13号墳全景写真（北東より）

図版 12



1 寺山 13号墳全景（南より）



2 寺山 13号墳全景（俯瞰）



1 寺山 13 号墳周溝北東集石出土状況（南東より）



2 寺山 13 号墳横穴式石室検出状況（南より）

図版 14



1 寺山 13 号墳横穴式石室再利用時の状況（東より）



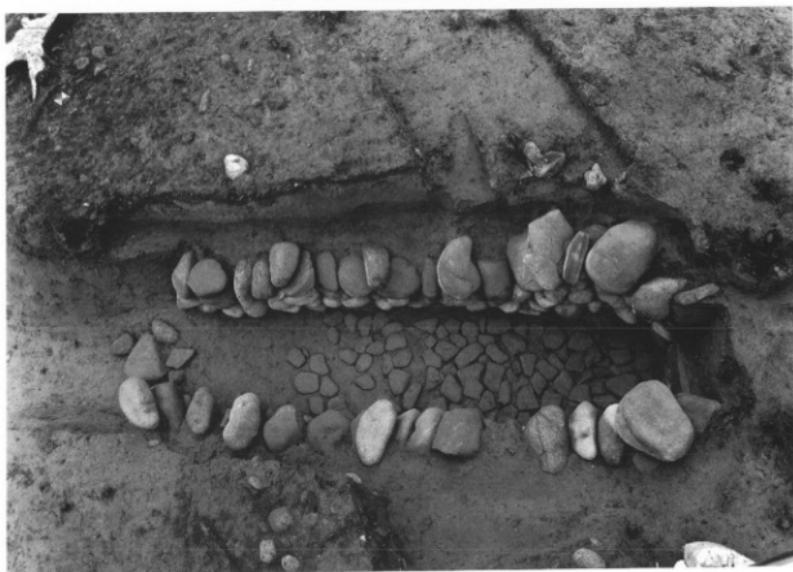
2 寺山 13 号墳横穴式石室再利用時の状況（南より）



3 寺山 13 号墳横穴式石室
再利用时集石出土状况（北より）



1 寺山 13 号墳横穴式石室完掘状況（南より）



2 寺山 13 号墳横穴式石室完掘状況（東より）

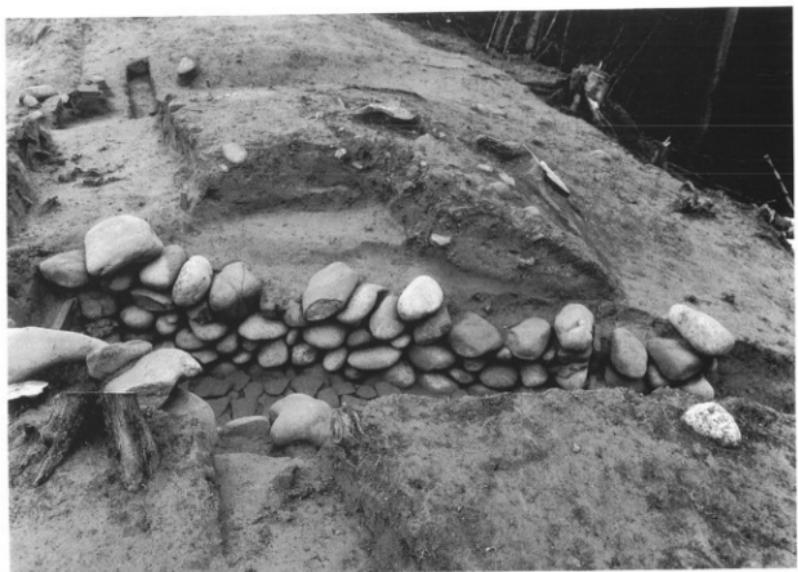
図版 16



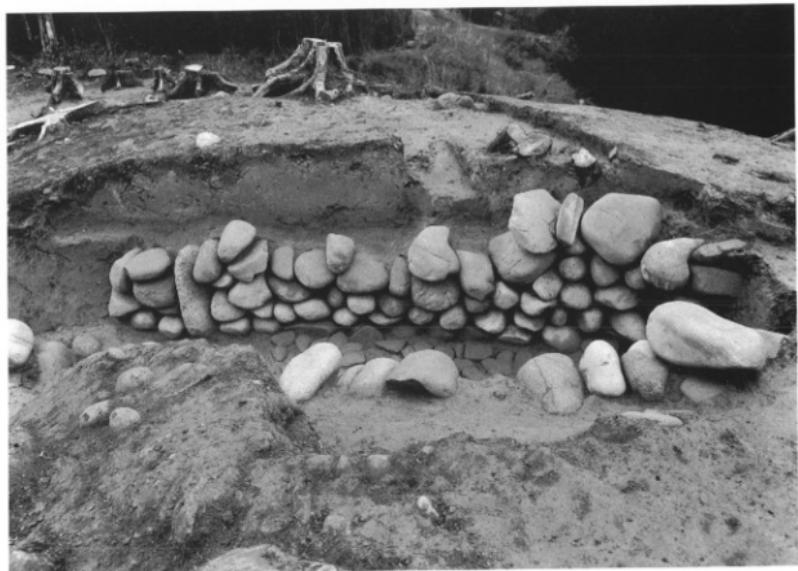
1 寺山 13 号墳横穴式石室完掘状況（南より）



2 寺山 13 号墳横穴式石室玄門（北より）

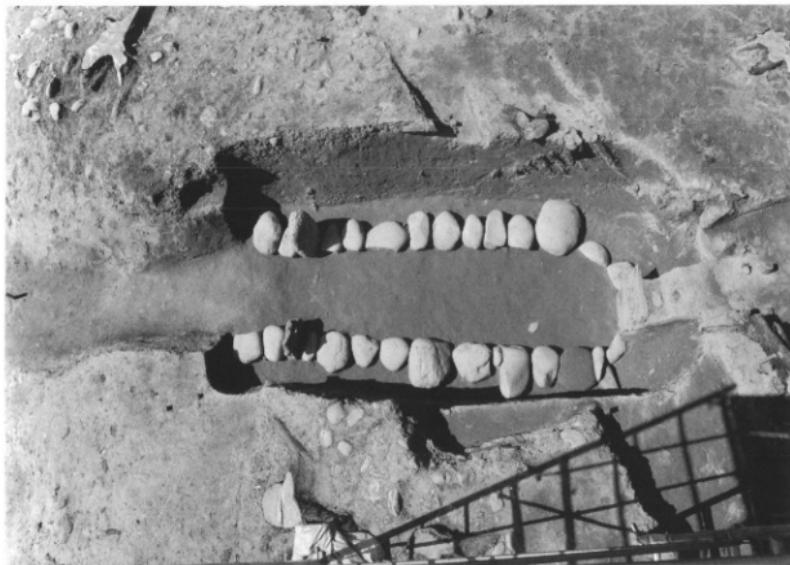


1 寺山 13 号墳横穴式石室左側壁（西より）



2 寺山 13 号墳横穴式石室右側壁（東より）

図版 18



1 寺山 13 号墳横穴式石室基底石（東より）



2 寺山 13 号墳墓壙（東より）



1 4区全景（南西より）



2 4区全景（南西より）

図版 20



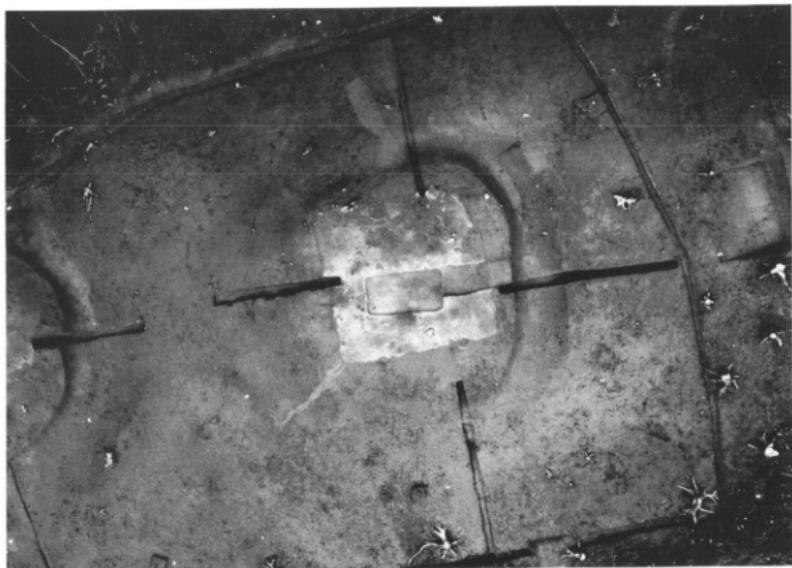
1 寺山 11 号墳全景（俯瞰）



2 寺山 11 号墳主体部発掘状況（北東より）



3 寺山 11 号墳周溝南側遺物出土状況（西より）



1 寺山 12 号墳全景（俯瞰）



2 寺山 12 号墳主体部完掘状況（東より）



3 寺山 12 号墳主体部
遺物出土状況（東より）

図版 22



1 5区完掘状況①（西より）



2 5区完掘状況②（北西より）



寺山古墳群出土主要遺物

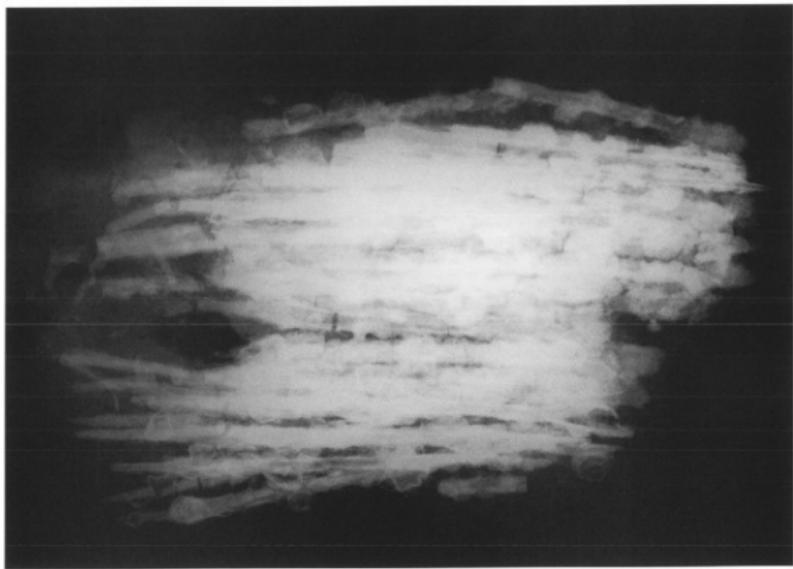
图版 24



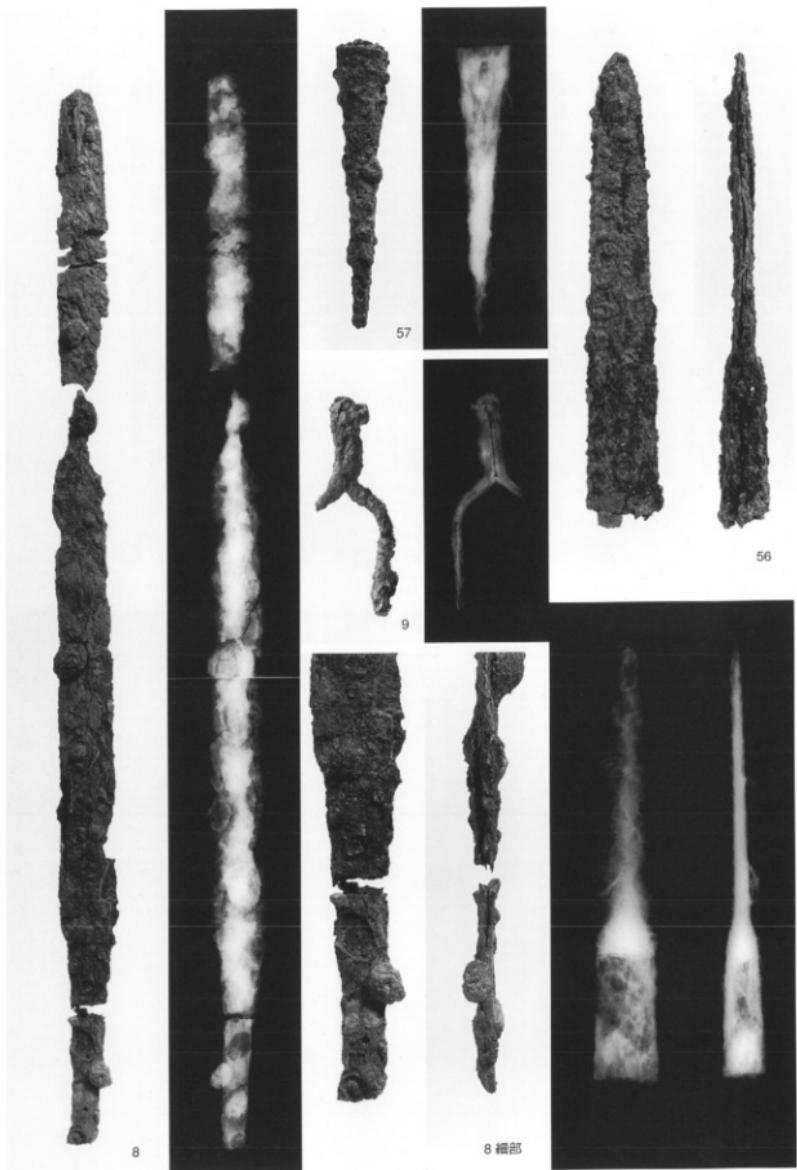
1 寺山 14 号填填丘出土遗物



2 2 区出土遗物

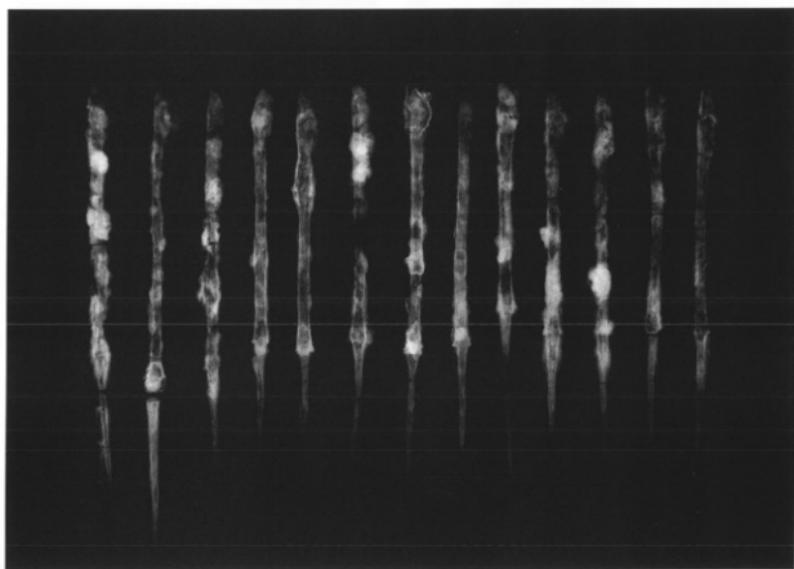
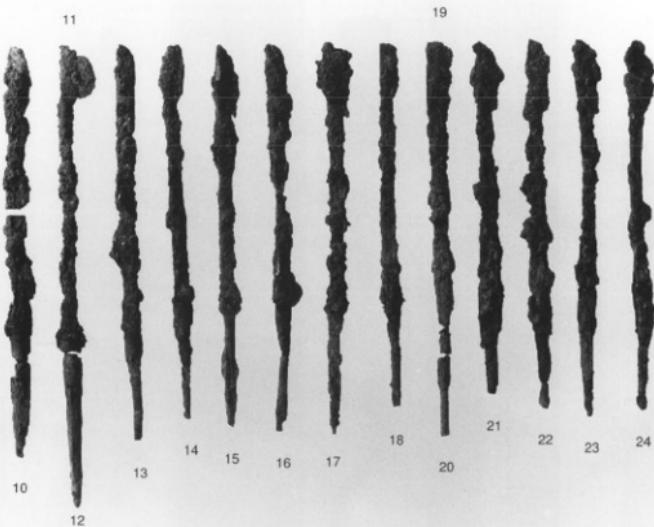


3 寺山 14 号填出土铁器保存处理前 X 线写真

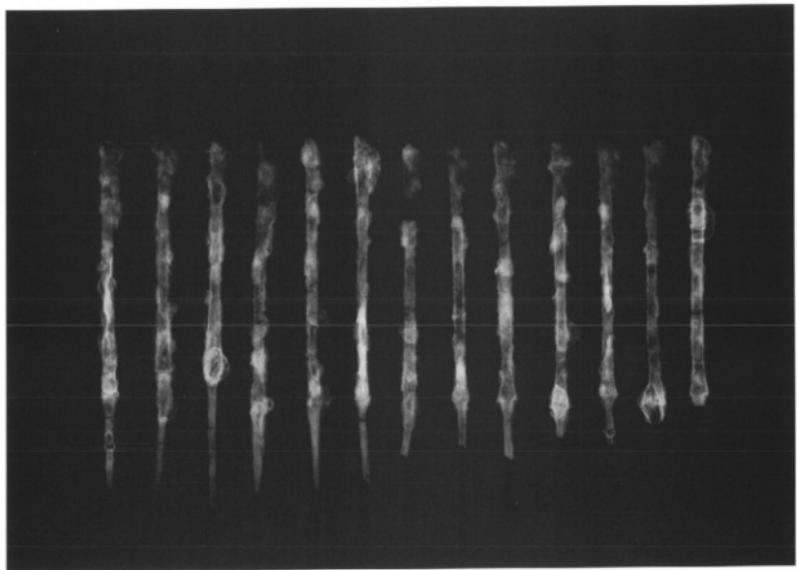
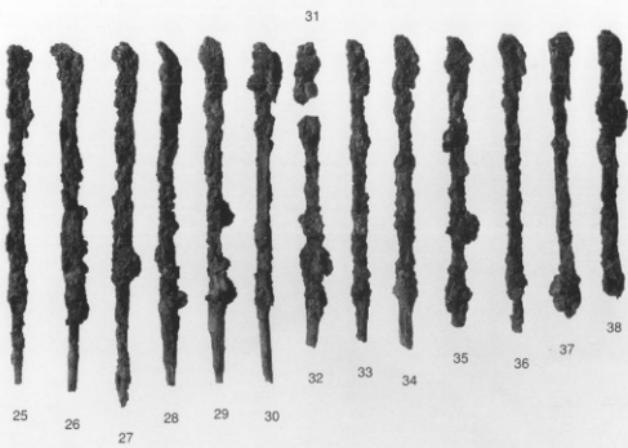


寺山 14 号墳出土遺物

図版 26

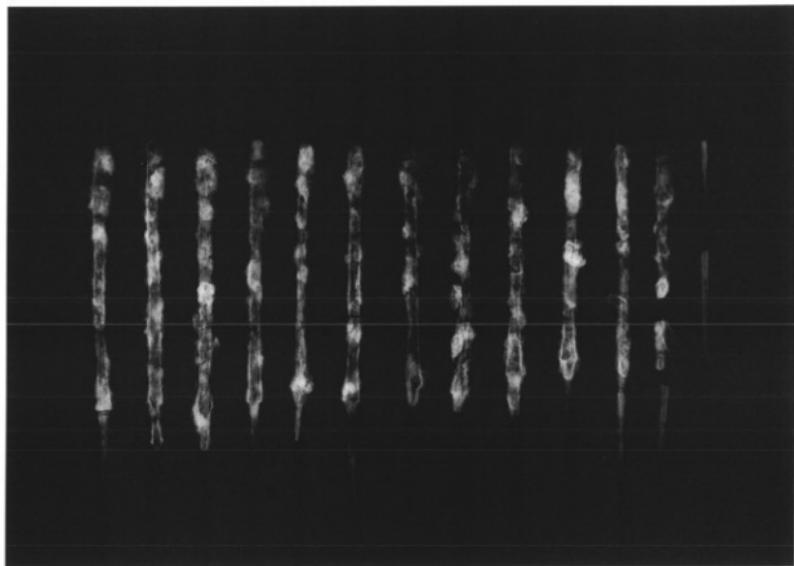
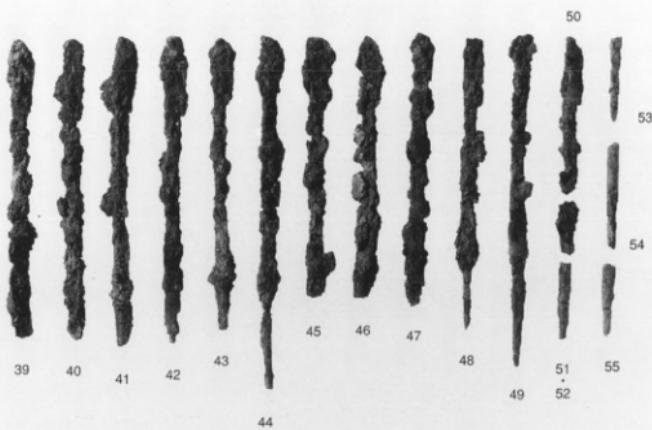


寺山 14 号墳出土鉄鎌①



寺山 14 号墳出土鉄鎌②

図版 28



寺山 14 号墳出土鉄鏃③



1 3区出土土器



64

2 3区出土銅錢



65

3 3区出土砥石



76



77



78



79

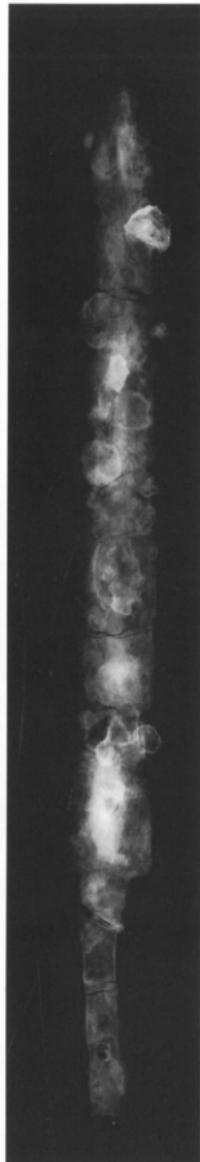
4 寺山 11号墳出土土器

5 寺山 11号墳周溝出土土器

图版 30



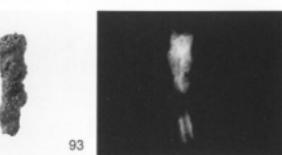
1 寺山 12 号填出土鉄劍・刀子



2 寺山 12 号填出土土器



3 5 区出土土器



4 5 区出土鉄製品

抄 錄

ふりがな	てらやまこふんぐん							
書名	寺山古墳群 第二東名Na 128 地点							
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	豊岡村 - 1							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第149集							
編著者名	及川 司 大谷宏治 田村隆太郎 西尾太加二							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒 422-8002 静岡県静岡市谷田 23-20 TEL 054-262-4261 (代)							
発行年月日	西暦 2004 年 3 月 31 日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査原因
てらやまこふんぐん 寺山古墳群	しづおかけんいわ た ぐん 静岡県磐田郡 とよおかむらしき じ 豊岡村 殿地・ しづおかけんしょく う こん 静岡県周智郡 もりさきいちらみか 森町一宮	22485 22461	33 -	世界測地系		19990106 ～	1,240 m ²	第二東名建設事業
				34° 49' 34"	137° 52' 6"			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
寺山古墳群	散布地	縄文時代後期				深鉢（小破片1）	寺津下層式か	
	古墳	古墳時代中期 ～後期	古墳 4 基 小堅穴式石室・木棺 直葬の複数埋葬墳1基、木棺直葬墳2基、 横穴式石室墳1基			須恵器・土師器・ 鉄剣・鉄鋤・石突 ・吊金具・鐵鎌	事例の少ない小堅 穴式石室の発見 珍しい構造の鉄鋤 の出土	
	散布地	平安時代以降				灰釉陶器・陶器・ 銅鏡・砥石	丘陵上から出土し た古瀬戸	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第149集

寺山古墳群

第二東名No.128 地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

豊岡村-1

平成16年3月31日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20

TEL 054-262-4261（代）

FAX 054-262-4266

印 刷 所 図書印刷株式会社

静岡県静岡市南町6-1

TEL 054-283-7611